

二十四輩順拜圖會

後為  
相模中斐駭河  
遠江冬河尾張  
美濃伊勢  
五

時  
八波生  
1810  
10-10



八波 4  
1810  
卷 10-10

御遷清

金屋本  
金屋本  
金屋本

觀音聖人  
御齋蹟 二十四輩順拜圖會後篇卷之五

目錄

○相摸之部

子津山弘徳寺

五明山最宝寺

勅堂

河津若福寺

○甲斐之部

阿弥陀御道御齋蹟

等力山萬福寺

○駿河之部

阿都川

卧龍山永勝寺

龍眼山若福寺

勅山信樂寺

箱根大權現

正永山若福寺

等力山萬福寺

荏柄天孫

勝之門澤

降命寺  
名号石

聖人堂

真本山福正寺

御寺光澤寺

熊谷山蓮生寺

靈徳信と此一  
阿都川と後と

○遠江之部

善法山普勝寺

○参河之部

吉田御坊

寂光山勝鬘寺

神守本澄寺

柳寺勝蓮寺

高立寺修坊

○尾張之部

羽塚山五智寺

东流御坊

小田原西方寺

徳松若生寺

三徳御寺

志子山上宮寺

樂命山如意寺

吉田三田御坊

栢野山淨妙寺

樂子山妙源寺

照馬山願照寺

西流御坊

因通寺

小牧西源寺

河烟勝室寺

河井若龍寺

河井妙性坊

○美濃之部

河井西徳寺

河井安樂寺

足近西方寺

金足山万福寺

八幡山聖蓮寺

○近江之部

宝福寺

近松御坊

日法神運若寺

真村了尊寺

河井榮泉寺

西方寺

河井称名寺

河井尊光寺

竹鼻西岸寺

福徳永寿寺

河井西入坊

深谷西方寺

河井尊福寺

先雲山安福寺

西方寺

天祥護法院彌藏寺

○山城之部  
 山科御舊地  
 東流御坊  
 ○撰津之部  
 日輝山永後寺  
 溝吹佛照寺  
 西流御坊  
 ○河内之部  
 福弁山慈願寺  
 松谷先德寺  
 玉手山安後寺  
 ○大和之部  
 惠日山立真寺  
 ○後後之部  
 常石室回院  
 ○修勢之部  
 專修寺御門跡  
 以上



相摸圖

親鸞聖人御舊蹟 二十四輩巡拜圖會後篇卷之五

河州專教寺 了貞撰

在傳曰白く男あり其事を先ぞ悲嘆のあまりこの地を建てるて見て何と  
 ありし姿のまゝなりしはたゞとてさきのりやうんぞひく然るを非ざる  
 其相の鏡を摸るる地をいづく相摸とい名づけぬと云は荒唐石鏡の悲愴  
 なる所はのぼりたるは若根より赤の地をいづく相摸とい名づけぬと云は  
 是柄の瓜徒来いす足柄の御坂と秋の味よくもれはけ坂の上と云ふ  
 思ふにしが加茂氏の居意考を按じると曰く東方の國と下とてから西の國  
 茶後を以て分つるなりと云ふもも妙とてするは相摸武苑の四一と云ふ  
 所以と下と分ちて年佐と年佐下とせたる也其年佐と云ふ名の義は  
 石の地をいづく相摸と云ふ地をいづく相摸と云ふ地をいづく相摸と云ふ  
 く論よりなるがこころは佐加武といふかゝり唱の心つきまて佐加三は後の唱なり  
 たり其相のまの着の敷のウとカと膝の敷と云ふは地をいづく相摸と云ふ  
 〇夫由國の右幕に頼朝の御業の地とて佐加三は佐加三と云ふは佐加三と云ふ  
 て都下のほきくしき廟は寺院の結構は佐加三の敷と云ふは佐加三と云ふ  
 より以下の諸國東武西藩徒還の孔道なりと細の各區圖を以て詳述す  
 あけぬは異流遠よりよりよりよりよりとて畧してこれとせされ 有るまじ  
 其意漏を咎むるなり

千津山弘徳寺

西流

相模国海老郡  
千津村あり

高祖聖人上皇二十日軍第五信樂房の喬はして下総の國  
新造弘徳寺に系の寺なりとぞ

臥龍山永勝寺

東流

日國足柄郡  
倉田村あり

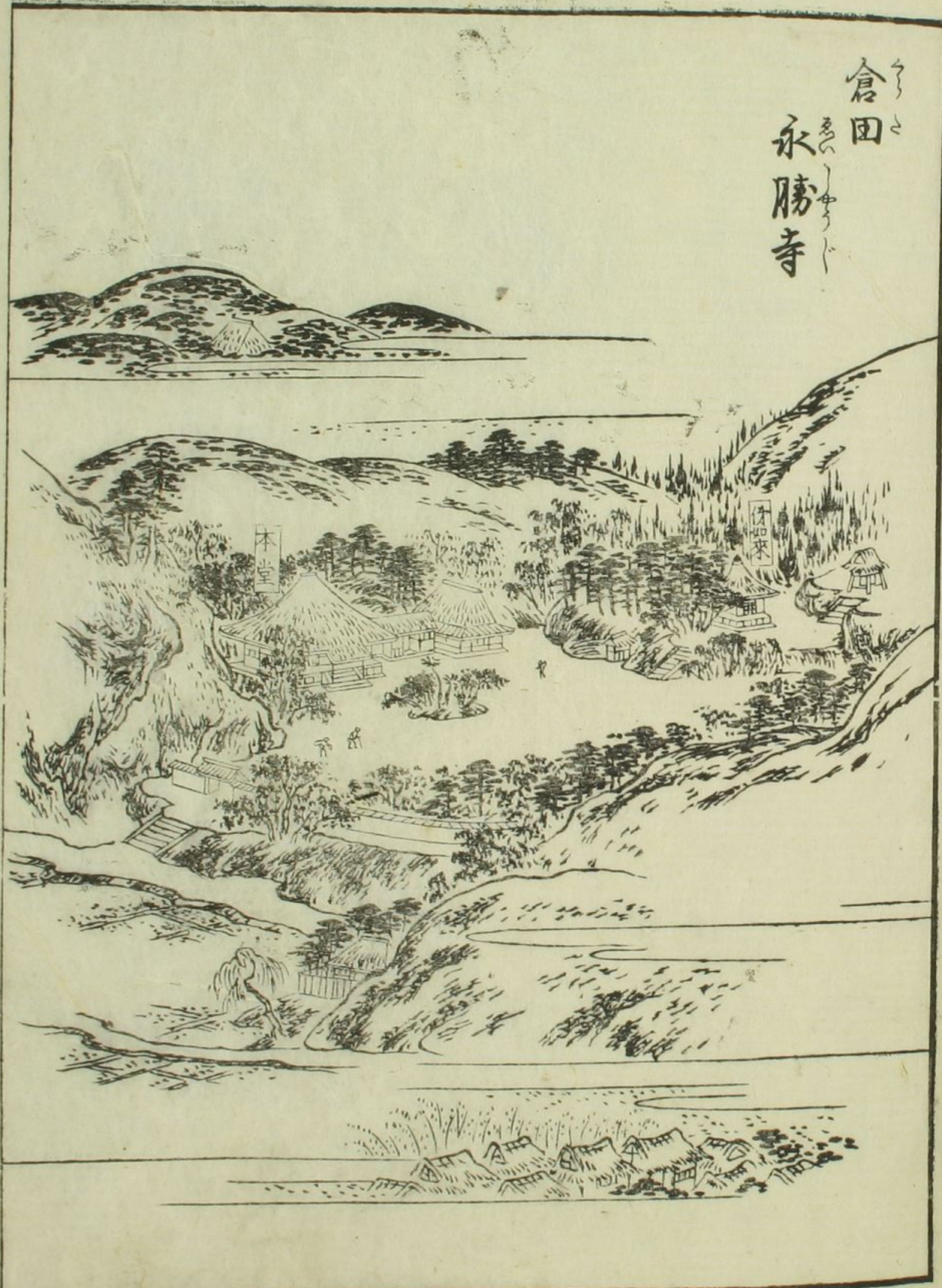
祥瑞院と号し聖人沖真身拏海房相兼の古院なりと関東  
七箇霊場の其一なり

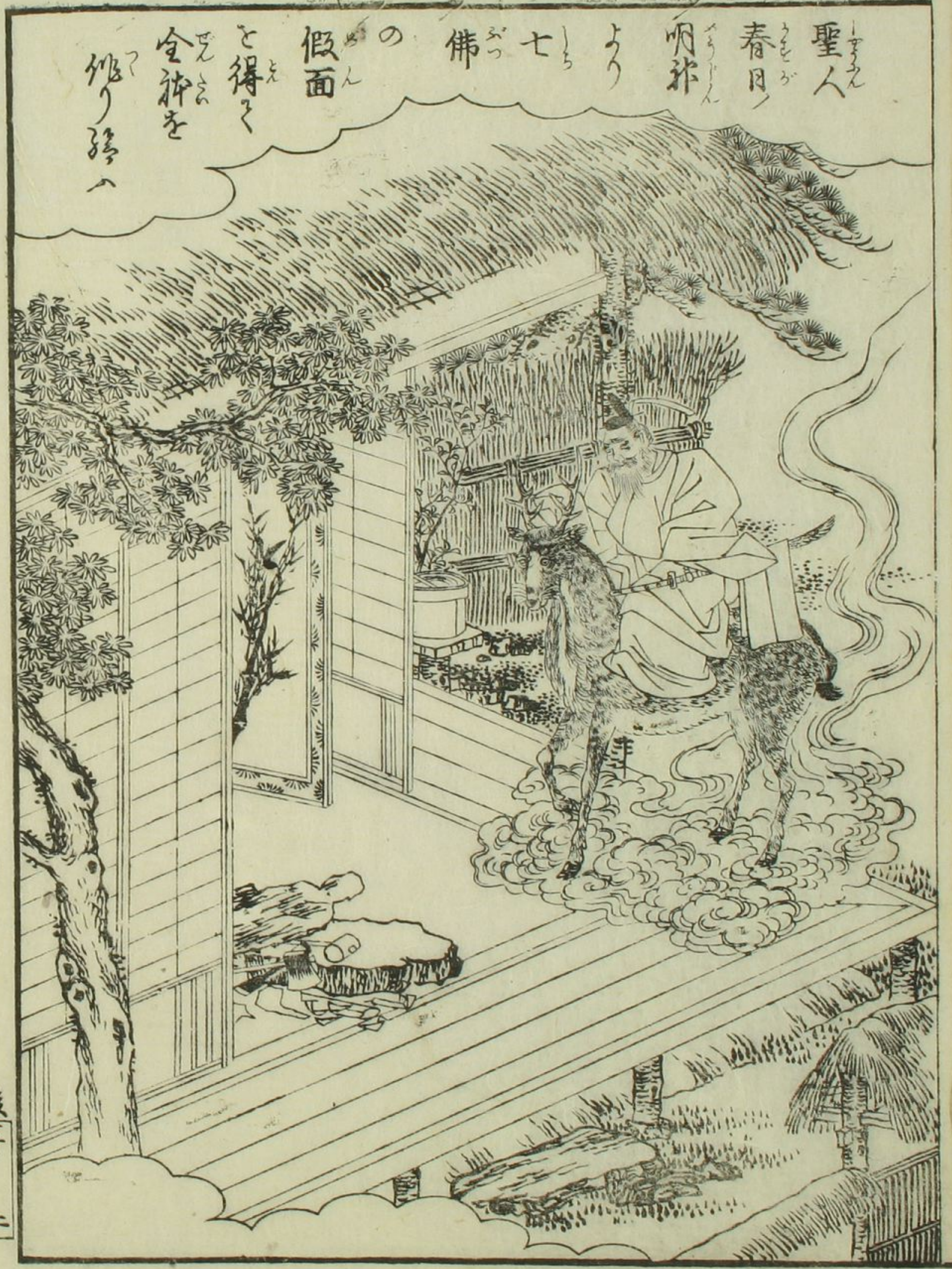
当院に往昔古宗の靈區ありしが嘉祿二年高祖聖人東國沖  
遍歴の初志はく謙倉に往返し終ひ善く群生と沖化益あり  
せり是し当寺の住僧竊に聖人の徳を慕ひなり源々專修  
念佛の法門とよまると終に精舎を聖人の寄なりしは聖人

当院又後々終ふゆとて七年  
安貞二年より文暦元年とある當國國府津  
沖動化の内とありい當寺は押ししなり  
又崇朝より一切經と渡りし附執政山系武苑寺奉附聖人と指法し授合ののりと隔りなり  
しは聖人とすなり當寺は押して考前し終つとや或曰此附聖人と稱後世は奉附あり

倉田

永勝寺

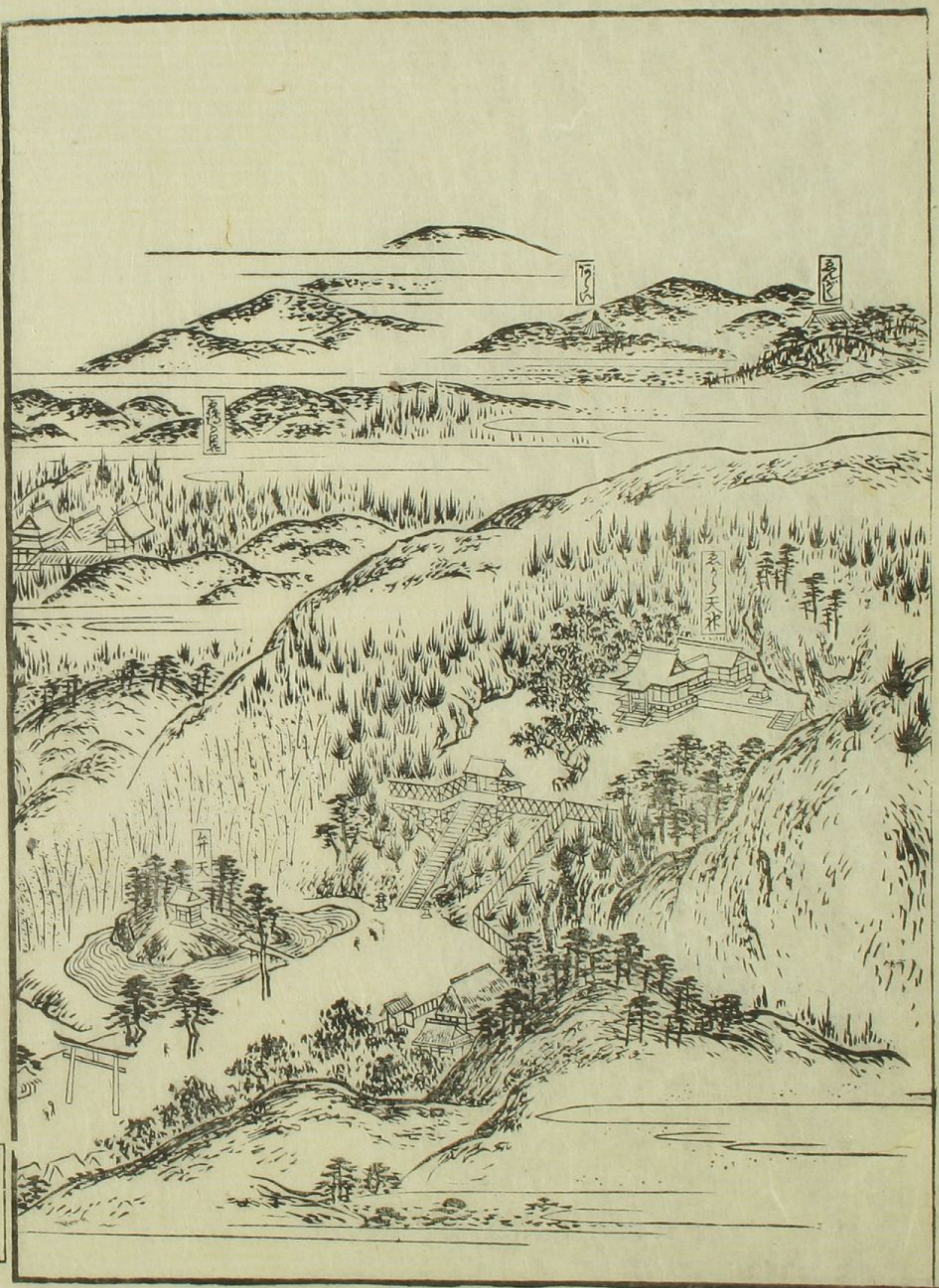




聖人 春日 明神 七佛 假面 と得く 金神を 佛の孫ハ

息依理亮附氏がくつと此とよも時氏率去の東瀛に寛永二年六月十八日と記せり聖人御授  
 合の初天福元年のついで附氏率去より四年の後それ奉附の徳ひを此のあきりあ  
 専ら弘法ありせ給ひし御降臨の期到速して即由院と撰海法  
 又附は「給ふ愛又おひく撰海法燈と相承」由寺中貞二代して  
 相續て真宗弘通は「つらとや」○靈物本尊面貌の如未 聖人由寺  
 寄とて孫院の空容成世給ふ初る春日明神のそを何れは聖人と礼拜し去七佛の  
 假面一箇を捧げ給ふ聖人これを擲てとまらるる像の面よりけ給ひより侍へてくし給ひ  
 たり 聖徳太子の像 聖人の御自他よりいともある靈像なりむり一別  
 ありしる像を授けたるわびやうぎやうふ御教を授け給ひ我々望とさせよ  
 こ宮へ傍後をこれと授けけく大さふはしと授けいそき本堂よりけしり  
 して今本堂よ 香本切目の枕 此聖人一切御授合の初武翁守 此外常盤  
 安長せりとぞ 奉時献りてまらるるころとほや 御教と給ひ聖人御自他の壽像希御日他七高僧の肖像を  
 由寺の靈堂よりしがあてて東御本廟（寄附）なりとぞ  
 荏柄天神 日國鎌倉よりあり  
 由菅廟の後由御門院長寛元年二月廿五日右由道灌の本教より

名  
柄  
天  
神



よりて建立は當社の御宝は高祖聖人六歳の御時自南無天満大自在  
天神の御号と号し御ひるる所の御真像と傳ふ

○和国の一室在柄の年をうり者よははのりより一室をかまし一室をのり  
又御世一とたり

五明山最寶寺

西派 日國三浦郡三津津は村あり

當山の征夷大將軍三位右大臣將源頼朝の御奉願より建久七年  
御刻ありし名匠より始りて天台因縁の淨刹なりしを因承六老僧の陸一明光  
上人と改め我地力念佛の法燈をくやし再び用基つはは靈場也

○本堂阿彌陀如來

多基善 薩河他 左子事

多基善 薩河他 左子事

諸尊堂

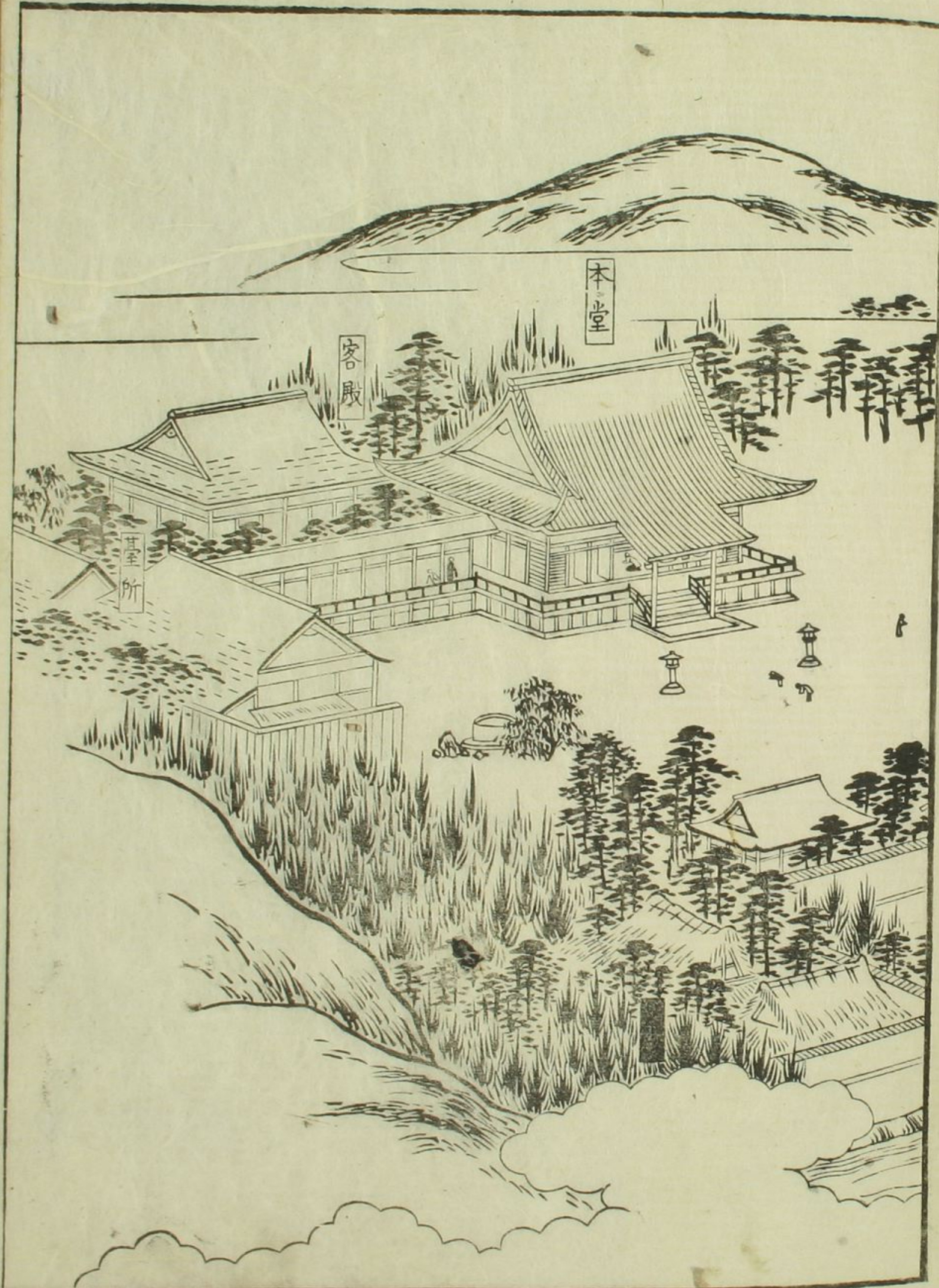
別當寺より多基善薩河他  
御地所流の御像五百

享保の記は當院の御縁起を奉て云  
且享保の記は當院の縁起よりなるをり  
抑相州三浦郡地比の里高津屋五明山最寶寺の

征夷大將軍三位右大臣將源頼朝の御奉願より建久七年丙辰  
御刻ありし名匠より始りて天台因縁の淨刹なりしを因承六老僧の陸一明光  
上人と改め我地力念佛の法燈をくやし再び用基つはは靈場也

給ひ供養の天導師は天台の碩學明光上人をぞ拓せらるるより  
明光上人より其俗姓後系氏より大藏冠謙是大臣の孫源右大臣  
後一任内麻呂五代の孫源和泉の國守信濃守季平より六代の孫源  
乃仁男也母右馬頭源義朝の嫡女より朝公の嫡女より其の明光世  
系赫くは武門に生れ高位高官をもち富貴榮花の身にもあへ  
を宿因縁より給りて未三五の春の死にけり小世の靈應を歎ひ  
忽棄恩入無の機又扱じ我々の門社の峯をまけ慈鎮和尚の法窓小  
いづり師弟の契まめやうして専學業修くはる小元素英敏明  
志く終りに教團融中道實相の真理ときり自利の妙徳をまやうれば  
利他の化益と法んとは明の霞をま出でて東國高麗の嶺乃度より返り  
より爰に謙倉源二位將軍の御姪の御孫より明光の碩徳より返り  
給ひ即辨が谷より一室と建立し御座山最寶寺と号し都下の高津屋





安直はしまん幼基菩薩一刀三袴の美作の靈像を収てあると「かの  
明光を拓して用山尊師よりしり若干の田園をぞ寄附せらるる家  
抄ひく明光山号を五明と改め教年の幼化をぞはにり純る高祖聖人  
小誠は「く専修念佛を弘通し終ふ法智日くよりして遠く坂  
東に地をぞ治ししは明光安うぬりよひ忽我懐の心を生し急ぎ誠  
後の國を教き高祖聖人の禪窟をくき兼てりしは教條の難若疑問  
を収てたくり切けてぞ挑むる聖人少し」ともされ終りて一渠が攝と扱  
恰も郷考の教は應とるうてく法同益盡は應信し終る後よはしし碩學の  
きこある明光と聖人の高德を計知あり終りて是れ我懐の爾とわ  
自力難解の法を棄て始て津去易往の念佛門は降入し即漸牙を  
くぬりて聖人の常路し教を他より安んて後世傑と呼んで  
六老僧の第一はひさなりされり明光其後年三行て五明山に改院

さうんは他力念佛の妙徳を弘通し是よりして右宗に最宝寺一變し  
終る真宗の佛圖とはありにり後又明光ふさひ聖人の後後し終  
は嚴重なる事なりしが一日聖人明光に仰てのまじり我今小誠東園の  
間ありて本教念佛の法を弘むふいさううまひは是もまじり國西  
これをわびこえり其人を得たれむをばし改め今よまじり企るよ母よは  
終る年月をこそせり我汝とわてより其才徳を考ふ小誠は其任は何  
まじり你佛恩をうりて勞とせらるる速に彼をばあつて弘法は  
我本宗をくみ満足はとありさる小明光再三其意よあつてざるをそ他  
儀るともくも師命をくして道るもあつて終る西園をぞ教きたるかくは  
後の園山南のわりに徘徊し彼に他力本教の有教を教化はしちり  
易の直入の法門末世頑愚の衆生を起しやまじりつり遠國  
近里の綱素老若抄ひくは純集り聞法隆喜して法は降と

るもの一日は百をひて算ふ爰は抄ひくじめて被地は一字と  
開闢しこれと光熙寺と号以後又日國源津郡常石の邑  
に隈居しこれに精舎を造立して宝回院と号け弘法教化  
を施すもとて十有餘年真宗壬辰の西國なる小今の玉  
ぎらふもく大さかひんは外に多る被り聖人これを及むま  
喜悅のあまり自ら明光の肖像を畫せ給ひ且崇か俗性  
の系譜を記して二冊としこれを送り給ふも  
明光洛陽より入りては念佛と弘通とあり倦ては竟り  
後堀川院安貞元年丁未孟夏中旬第六日瑞正はして往生乃  
素懐を遂らさし一うば新事六  
十日前即ち遠地は抄ひくこれを茶毘  
し送骨と被後國光熙寺は抄り廟塔と建遺教まこと  
めんなり去りて今世は西國送骨改悔の云系に明

光上人出世の恩うらやまを加へてこれ後又文藏蜀の氏は  
耳目といらしき功德は比とる小豈深が下とらんや明光始に  
西國は強き多る時最室寺と被弟明故は懐より明故より  
九世の後明心寺勢よりし時寺と今の世比よりし此れ回  
被比の里の朝朝より寄附の領地なるが故に弟三世明園の  
乃時奉る系師の靈佛を被地よりし一字を建立してこれを  
月山飯食寺と号せし九世明心乃代鎌倉乃地戰場とあり  
兵草の災ひ志づくるしが終又大永元己年辨が谷乃最室  
寺と被飯食寺に地よりしと此地や一万岳に面をかこんで松  
柏道よえきり其幽邃なるゆと寒く傷國と塔の佳境より今に十八  
世の法燈をうけて終るゆなり

○送麻孫と按とるは明光上人の神相州甘繩を建て甘繩了園との武州

麻布了海師の門弟と列するのら是如上人の門徒と云うて源二位頼朝の建立あり五明山を真宗の道場と云せり五明山とは扇谷の真宗寺の別名なり扇の極よりて五明山とは号し心宗三十一歳して佛光寺六世の寺勢を受く其後如上人の命よりて佛光寺と空性了源の附文「元應二年三十八歳して西園に転き後醍醐山南の池に光性寺と建立し又心宗の以日圓常石と空圓庵と造起し化驗する者十餘年如上人より歎び終ひ自ら明光の像を画き四の系譜を記して明光より一終り又彼地より抄ひて法華宗と宗小論の初なる上人と云うて額目宗師屈せしり後終り清湯より此所を上人渠が宗師と云せり此名抄と記し又終り天和二年中夏十六日午時入寂以幼年六十八歳を過せり葬し送骨を佛光寺に収むるに西園に説くこと如上人と後承明故に讓より其後九世明心の附を抄ひて門と云ふ○附翼は享保の池の邊よりあるを論し諸書と引記せるを送跡録と稱し從入寂の地佛光寺の實蹟を引て佛後より佛光寺へ歸り佛光寺に抄ひて叙しと云佛光異況何より是方より蓋送跡録及び附翼の各引記の書いと云これにこれをや心宗とせん高祖の遺者と云ふ

○靈室 聖人真身十字名号 勅書繪旨從古御軍家印

源氏物語に墨跡多し物繁きなり此を墨跡に  
龍泉山若福寺 東流 日圓海鏡郡大磯郡高藤寺山下村にあり

○本堂中尊阿彌陀如來 聖人御自他 并高祖聖人御自他 像を安置す

了源房信姓は原氏よりて鎌子内大臣より十六代の後胤伊豆大領俊光孫を文維職は五代の孫曾我十郎祐成が異版の子たりされは祐成の舎弟五郎時宗と傳へ俱不戴天の鎌工左虎門尉祐經を富士の將場より抄ひて討めし其子に續て刀中世霜と消しぬ名に万歳と讀しぬ此に時宗の了源の祐成が妻大藏の名妓虎と云る女が胎内よりて奉りて後降誕せり幼名と祐若と稱し繼祖又曾我祐信と



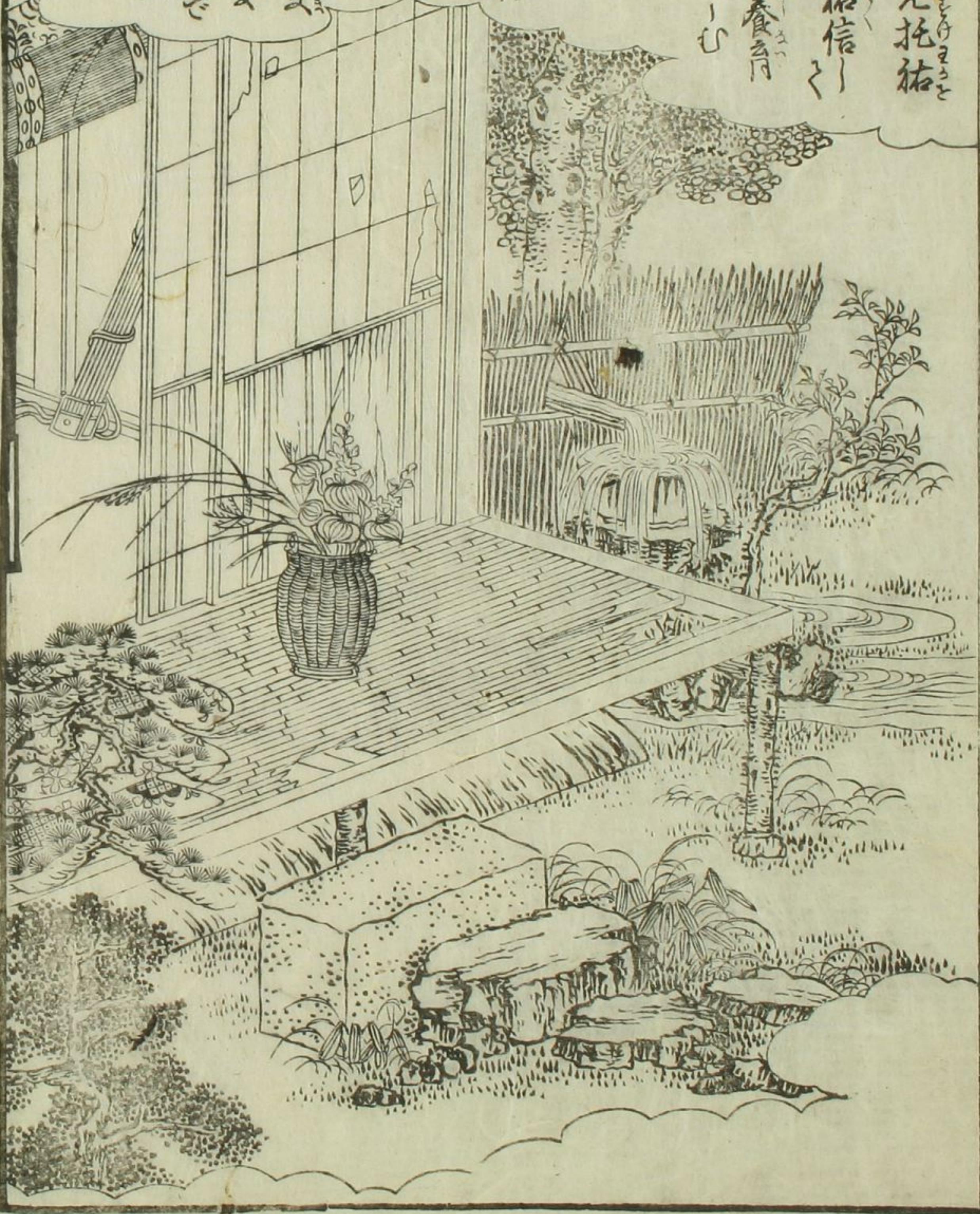
山やま下した善ぜん後ご寺てら



世に  
出で  
和  
真婦  
とや  
つぎ



於  
若  
これ  
を  
虎  
か  
名  
ま  
の  
や  
し  
若  
を



育り其後経て和回三浦の一黨謀殺せし時初めて大に武  
功を成し世に平義時吹巻より終に大樹実朝の喪  
賞を蒙り尚國平塚の邑と宛約に河津三郎信之と号し  
る時又幼年二十一歳是よりして専ら忠義と勵み再家名と  
貞く有り尤も小信之つりく後身を思惟する小又祖三世  
とも天年と盡し其後曾祖又修入道寂心頼朝の  
疑ひとうけ誅罰せし祖又河津三郎祐親の工友祐経が  
討と實に曾我十郎祐成伯又五郎時宗とも復讐の素  
懐を遂るといふも日く刀下の鬼とあきり皆是氷業の死  
より寛魂修羅の惡業を沈と交り深む漸みづつたとい  
我今絶する家名貞く再又祖の名を成しとは又天年竟  
現世愛中の仙業方り未末真福のありは武門のありとい

却て罪も罪とわき若くもくを受るの理り如に如何  
方る若根をも終り少し善提の道も向り彼業果を滅  
と」と類は浮世の身をいとい偏人同の業をえらるる  
ぞ善」たるが實は元仁甲申の年執權平義時乘去と  
信之これより忽厭離の心を成し終に蘊發深衣  
の身も自ら平塚の了源と改号し幼いとほしてあはる  
が名若くも後記」るるや高祖聖人尚國鎌倉に後返  
國府津よいまはるるをまきまきに禪室よ易治で聖人と頂  
後」なり日頃の素志を委くの人涙ととり小教を承  
抄しませとぞ教いける聖人といふ後」のりと思石弥陀如世  
の幸教他力念佛の布教を説せ給ひ十惡の罪人五逆の業  
後」不可思議の悲教と信し稱名念佛の正業を修し

む承く生死無常の迷ひをまぬがま速く清津安樂の佛去  
往生と況や我有縁の親屬いかり業報を受るも其の順  
次の往生を遂る時自在神通の大悲心をも思ふまゝに化盡と能  
く日く津去より接くこと小快楽無窮のさうと用くは  
こと細やく小教化のせ給ひしうば了源陸喜の源いむせ  
渴仰の心せれたる人師身はれ母をそくはして是より常陸給  
仕意うまゝ其実とぞ置く其後文曆元年聖人河津治の初  
了源離別のうばとを切方りしうば聖人も其真心をうまゝ思  
自ら親像を彫刻みくこれを附はし竟く系師又後き給ふ安んお  
ひて了源花水の邑高河系に圍まると我母虎御老の送歸るま  
くと則此地に宇造立し菩提寺と号し専真宗と弘通し善く群生  
と利益とるの多年はして建長三年癸亥年三月十二日午心中當寺

又母ひく、往生の素懐をぞ遂らさう  
人自書し給ひ了源の往生を稱嘆ましく関東北諸身又亦し給ふ  
未燈抄よ、こけん呼鳴了源武門の家は生まると再び又祖の家を直ぐ  
芳名に海に施し終り菩提のるんく、他力易妙に奉獻し  
聖人の崇奉を業ありなり、又二世慈悲地の達人と謂べし  
○当山境内古跡遺物  
唐ヶ原 唐ヶ原の古跡  
龍取山窟 龍取山の窟  
虎御老像 虎御老の像  
石地蔵 石地蔵  
○五郎時宗が力石 其外弘法大師御作 石地蔵  
後坊明神の祠あり都て此辺古跡長し大破小破こまらぎの破さ  
皆款名なり

大破の町と云ふあり



世傳又むじし聖人此不<sup>ま</sup>素<sup>ま</sup>せ<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>西<sup>ま</sup>行<sup>ま</sup>が<sup>ま</sup>吾<sup>ま</sup>心<sup>ま</sup>禱<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>風<sup>ま</sup>流<sup>ま</sup>押<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>出<sup>ま</sup>  
と彼<sup>ま</sup>之<sup>ま</sup>ギ<sup>ま</sup>とは即<sup>ま</sup>死<sup>ま</sup>本<sup>ま</sup>と書<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>卒<sup>ま</sup>都<sup>ま</sup>婆<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>す<sup>ま</sup>らん<sup>ま</sup>が<sup>ま</sup>此<sup>ま</sup>沃<sup>ま</sup>途<sup>ま</sup>や<sup>ま</sup>む<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>  
人を葬<sup>ま</sup>埋<sup>ま</sup>す<sup>ま</sup>不<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>らん<sup>ま</sup>あり<sup>ま</sup>け<sup>ま</sup>め<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>宣<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>

三<sup>ま</sup>より<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>此<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>悲<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>死<sup>ま</sup>本<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>門<sup>ま</sup>沃<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>露<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>押<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>  
か<sup>ま</sup>沃<sup>ま</sup>途<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>や

心<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>悲<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>死<sup>ま</sup>本<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>門<sup>ま</sup>沃<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>露<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>押<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>  
三<sup>ま</sup>より<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>此<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>悲<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>死<sup>ま</sup>本<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>門<sup>ま</sup>沃<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>露<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>押<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>  
か<sup>ま</sup>沃<sup>ま</sup>途<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>や

勅堂

日<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>足<sup>ま</sup>柄<sup>ま</sup>下<sup>ま</sup>郡<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>府<sup>ま</sup>津<sup>ま</sup>河<sup>ま</sup>東<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>入<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>あり

高祖聖人<sup>ま</sup>當<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>倉<sup>ま</sup>田<sup>ま</sup>永<sup>ま</sup>勝<sup>ま</sup>寺<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>抄<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>化<sup>ま</sup>成<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>せ<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>此<sup>ま</sup>不<sup>ま</sup>

芝<sup>ま</sup>菴<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>び<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>び<sup>ま</sup>去<sup>ま</sup>び<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>往<sup>ま</sup>返<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>群<sup>ま</sup>民<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>化<sup>ま</sup>益<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>芳<sup>ま</sup>徳<sup>ま</sup>也<sup>ま</sup>  
これ<sup>ま</sup>よ<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>世<sup>ま</sup>俗<sup>ま</sup>稱<sup>ま</sup>して<sup>ま</sup>御<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>堂<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>り

○本<sup>ま</sup>為<sup>ま</sup>阿<sup>ま</sup>彌<sup>ま</sup>陀<sup>ま</sup>如<sup>ま</sup>來<sup>ま</sup>

下<sup>ま</sup>河<sup>ま</sup>邊<sup>ま</sup>妙<sup>ま</sup>光<sup>ま</sup>寺<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>あり<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>  
聖<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>御<sup>ま</sup>世<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>あり<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>

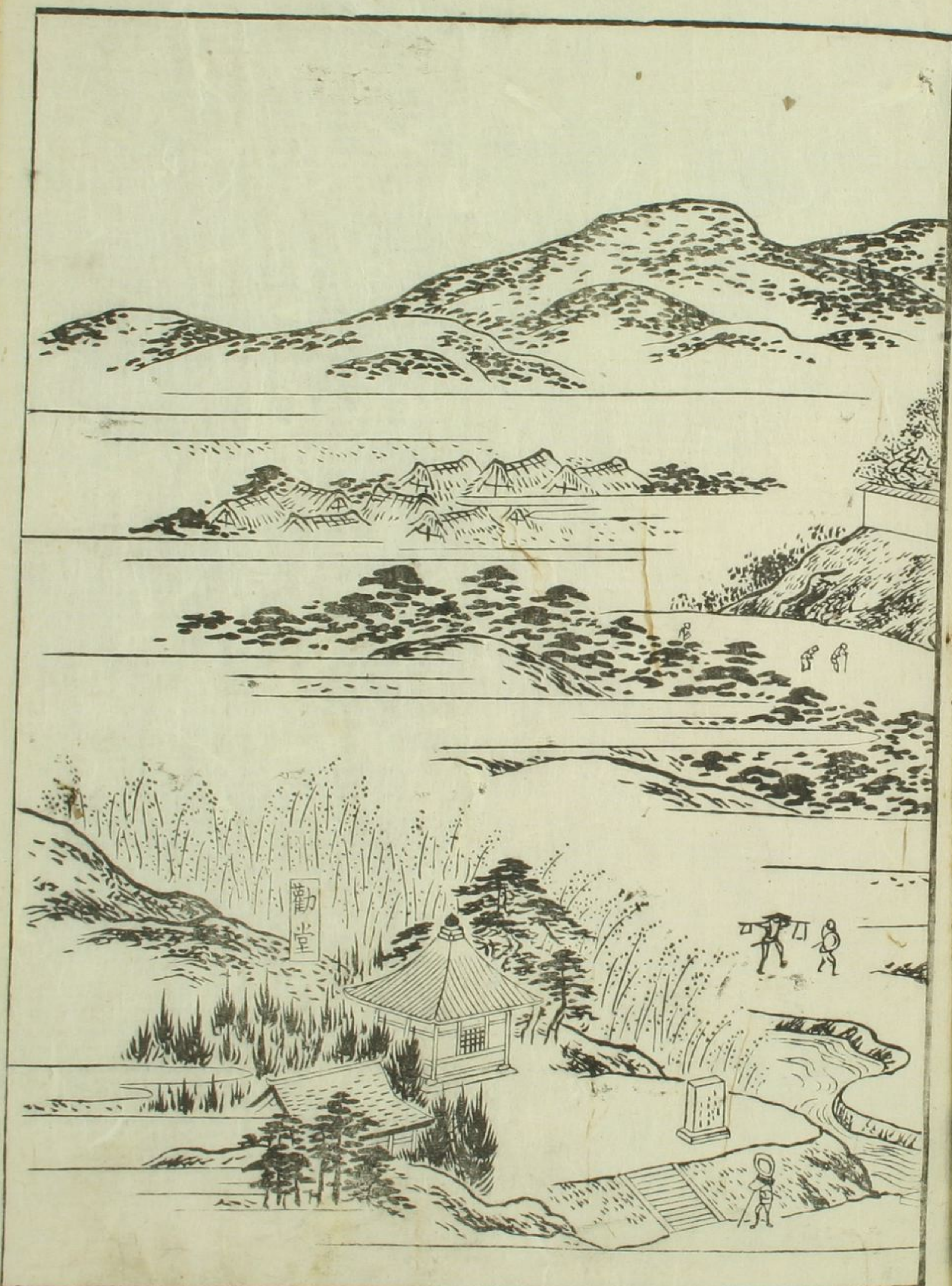
勸山信樂寺

東<sup>ま</sup>流<sup>ま</sup> 日<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>日<sup>ま</sup>不<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>あり

信<sup>ま</sup>樂<sup>ま</sup>院<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>号<sup>ま</sup>高<sup>ま</sup>祖<sup>ま</sup>聖<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>當<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>津<sup>ま</sup>化<sup>ま</sup>身<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>舊<sup>ま</sup>趾<sup>ま</sup>なり<sup>ま</sup>○本<sup>ま</sup>堂<sup>ま</sup>本<sup>ま</sup>為<sup>ま</sup>阿<sup>ま</sup>彌<sup>ま</sup>

陀<sup>ま</sup>如<sup>ま</sup>來<sup>ま</sup>  
聖<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>御<sup>ま</sup>  
自<sup>ま</sup>他<sup>ま</sup>

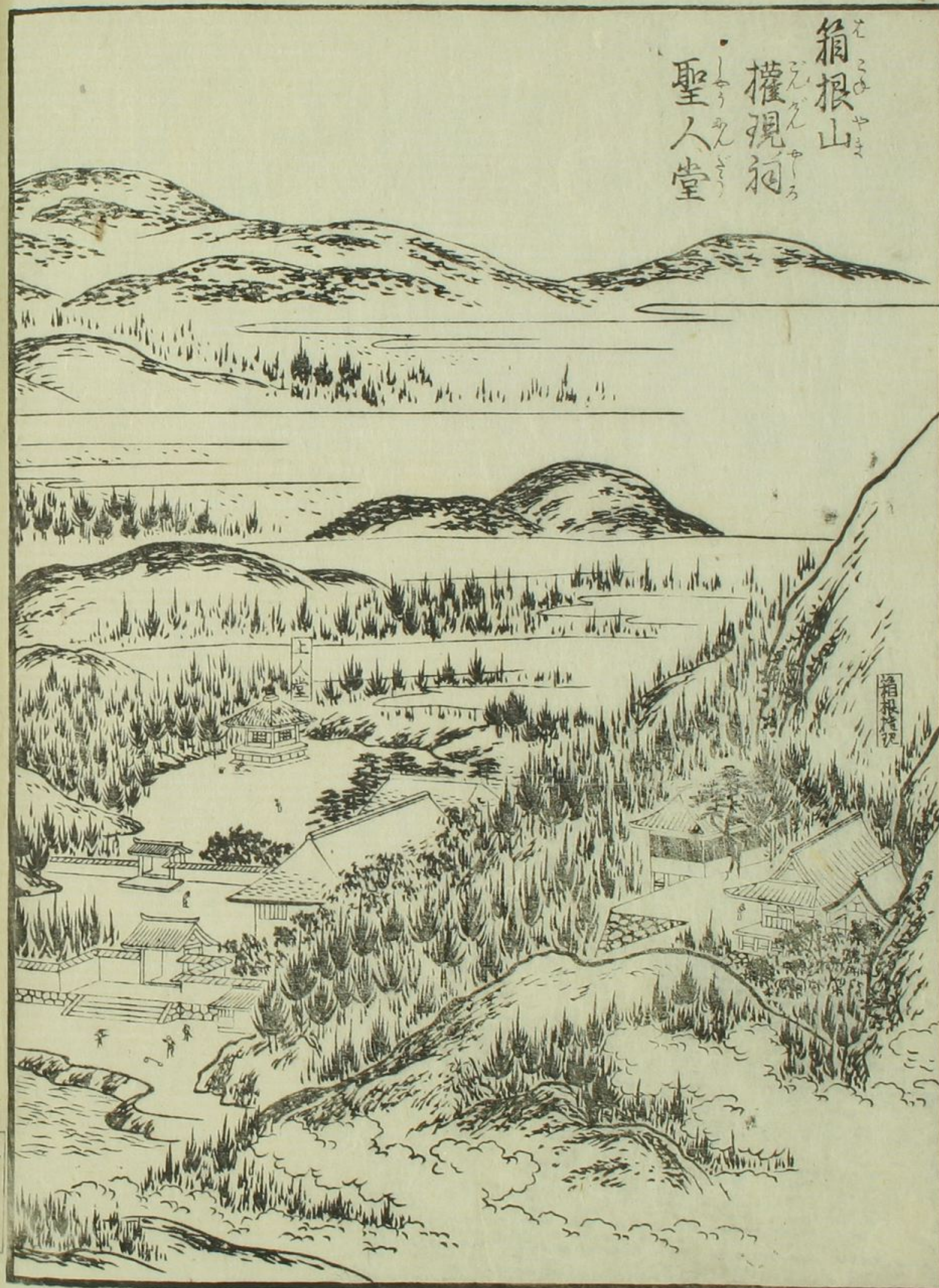
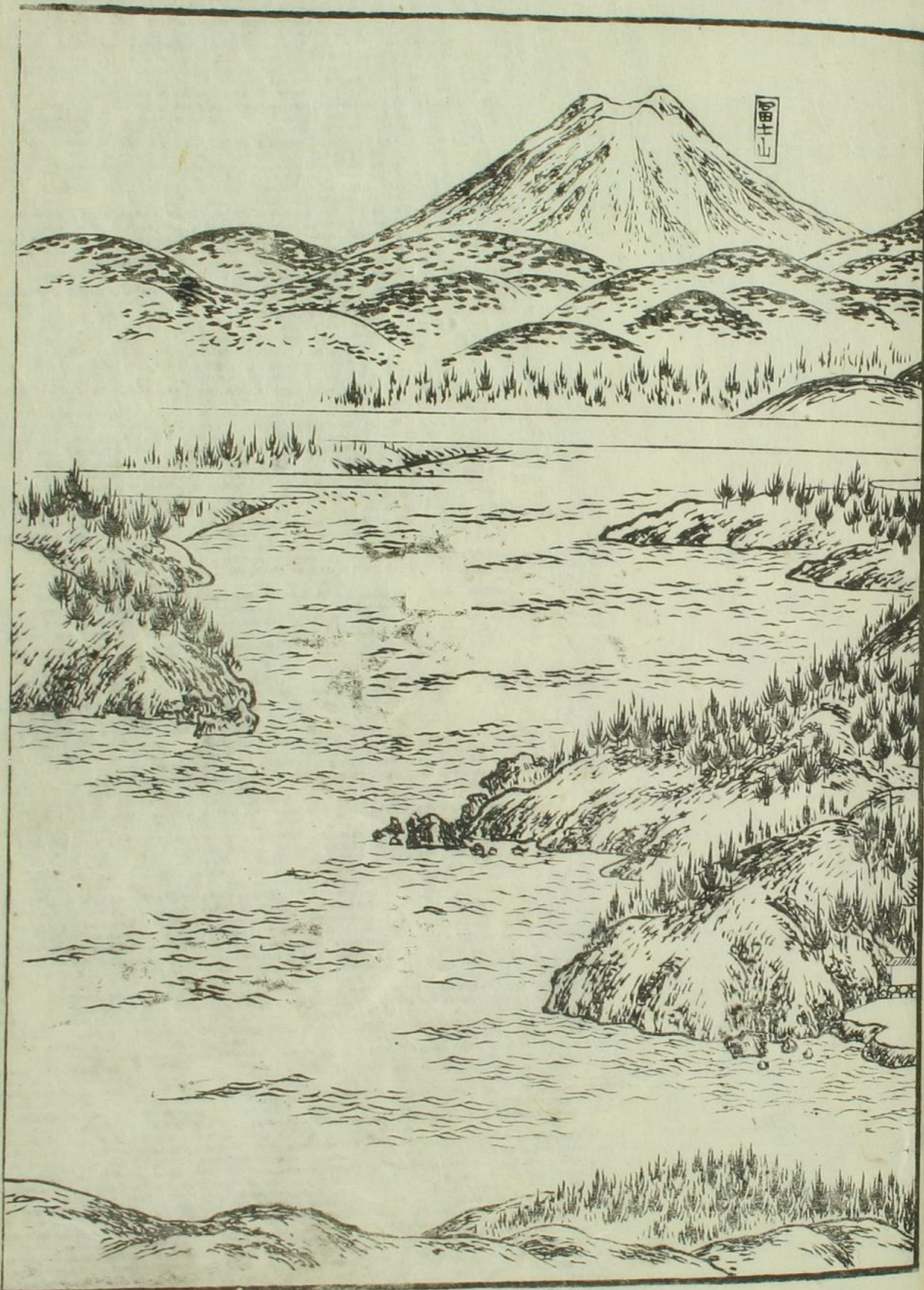
當<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>安<sup>ま</sup>貞<sup>ま</sup>二<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>聖<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>御<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>五<sup>ま</sup>十<sup>ま</sup>六<sup>ま</sup>歲<sup>ま</sup>常<sup>ま</sup>州<sup>ま</sup>福<sup>ま</sup>田<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>郷<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>タ<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>  
附<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>當<sup>ま</sup>不<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>往<sup>ま</sup>返<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>專<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>勅<sup>ま</sup>化<sup>ま</sup>利<sup>ま</sup>益<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>せ<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>貞<sup>ま</sup>永<sup>ま</sup>元<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>  
秋<sup>ま</sup>八<sup>ま</sup>月<sup>ま</sup>御<sup>ま</sup>降<sup>ま</sup>洛<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>常<sup>ま</sup>州<sup>ま</sup>より<sup>ま</sup>當<sup>ま</sup>不<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>こ<sup>ま</sup>せ<sup>ま</sup>終<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>兼<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>利<sup>ま</sup>生<sup>ま</sup>  
を<sup>ま</sup>蒙<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>恩<sup>ま</sup>德<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>慕<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>道<sup>ま</sup>信<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>族<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>蟻<sup>ま</sup>集<sup>ま</sup>か<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>此<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>廣<sup>ま</sup>至<sup>ま</sup>渴<sup>ま</sup>仰<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>恩<sup>ま</sup>  
ひ<sup>ま</sup>母<sup>ま</sup>が<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>教<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>め<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>せ<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>聖<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>慈<sup>ま</sup>海<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>御<sup>ま</sup>心<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>衆<sup>ま</sup>心<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>慈<sup>ま</sup>  
慕<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>じ<sup>ま</sup>が<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>や<sup>ま</sup>抄<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>らん<sup>ま</sup>即<sup>ま</sup>當<sup>ま</sup>院<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>御<sup>ま</sup>滝<sup>ま</sup>箇<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>さら<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>御<sup>ま</sup>化<sup>ま</sup>



國府津勸堂  
信樂寺







尚社大権現多る所の御神長出見尊なり孝謙天皇天平  
宝治年中の夏刻して濃川上人の用基より別當金剛王院坊舎  
六區あり尚社宝物三乘小帳治宗近友切丸の毛方を秘りし曾我五郎  
附宗後継の遺物書籍ありたは治棟実より其物なり  
文暦元年八月十七日聖人御降洛の初この山坂を通りて  
終ひる時権現巫の翁に命じて拓法し終ひ三日の間種々  
御饗應ありし事や事実委しく御傳抄に記し終ひ世  
のよく知るなり

○聖人堂 聖人六十二歳の御時  
御自他の肖像と妻居尼

○尚國の名産 秦波大根根の太く入道生じ種と  
別はて同地産するや 粟大石うまうり四より出  
りし粟の石  
・他 紫胡うまうり紫胡  
とと上あり 紅花うまうり  
より出 海老うまうり  
より出 小田原海苔 日向雜糧 日向漬梅 小田原外郎造頂香  
・金山石大いそより出  
たまの石なり 川村材木 十間坂里降梅あまのり玉は用也  
玉の中よりあり 石津布川より

△甲斐國

按て小尚國の東に天目西に白旗南に士峯北に金峯に方とて險嶽を以て其  
中は富士馬のり而水源をばえりこの山は峻と名づく峻は川をばえり  
て西方は消き山のまらひなりをいふまなり山のうまひ山のそらなり  
白をわひが終といふこの山れりなりくそらぬは國の名の標なりや  
るなり

阿弥陀御跡 都留郡内阿弥陀海道あり

此所を聖人嘗く暫く居候に終ひる阿弥陀堂其墟址也是  
曆二年御降洛  
のこたなるべ

傳へていひし此石に川の淵あり篠子麻子村あり  
谷川是之より川い 久しく大蛇潛り  
人氏を燒く小聖人尚國御經歷のわたり是をありとて思は  
即山上より崩落する岩石を集め悉く六字の名号と書寫し  
終ひ淵に投入終ひく大蛇の忽ち抜若と樂の采を得て  
天人の姿と現れ虚空に凌ぎうせり是よりして彼毒蟻  
のうまひるく里民飲ぶりかきりて其後年と経る小蛇の

淵の漱とあり漱の陸とありて終に平地とありし其彼名号  
の岩石をひろひ集め其跡に一塊の塚と築て念佛塚と号し  
跡をのじしる 日那真本村吾  
極寺の迹也

○日那内村 村医 王山 兼 天 禪 寺 養 養 朝 と 入 る あり 齒 院 の 中 三 十 三 面  
の 阿 彌 陀 如 來 殿 三 十 三 面 名 号 并 光 明 殿 六 字 名 号 等 と 高 祖 聖 人  
御 眞 意 を 示 す あり といふ

正永山若福寺 東流 日國日那本村あり

齒山の聖人御中緒の地之條子川念佛塚の齒寺より名を定礎にといふ  
真本山福心寺 西流 日國日那村あり

齒寺と又御中緒の地なりといふ ○靈室川城の名号 いふがれ名号といふ  
に 聖人齒山御住  
歷の初條子河原のわたりあり阿彌陀寺を御中緒に御勅化しりせ給ひし時を  
東方の白布といふ名に依りて御中緒といふに成りしなり 此に聖人の御勅化ありし  
何とぞ今世の御中緒の御中緒を御中緒といふは 三ノ又まはれ白布と推入急ぎ彼阿彌陀堂  
御中緒の御中緒を御中緒といふは 御中緒の御中緒といふは 御中緒の御中緒といふは  
御中緒の御中緒を御中緒の地といふは 御中緒の御中緒といふは 御中緒の御中緒といふは  
御中緒の御中緒を御中緒の地といふは 御中緒の御中緒といふは 御中緒の御中緒といふは

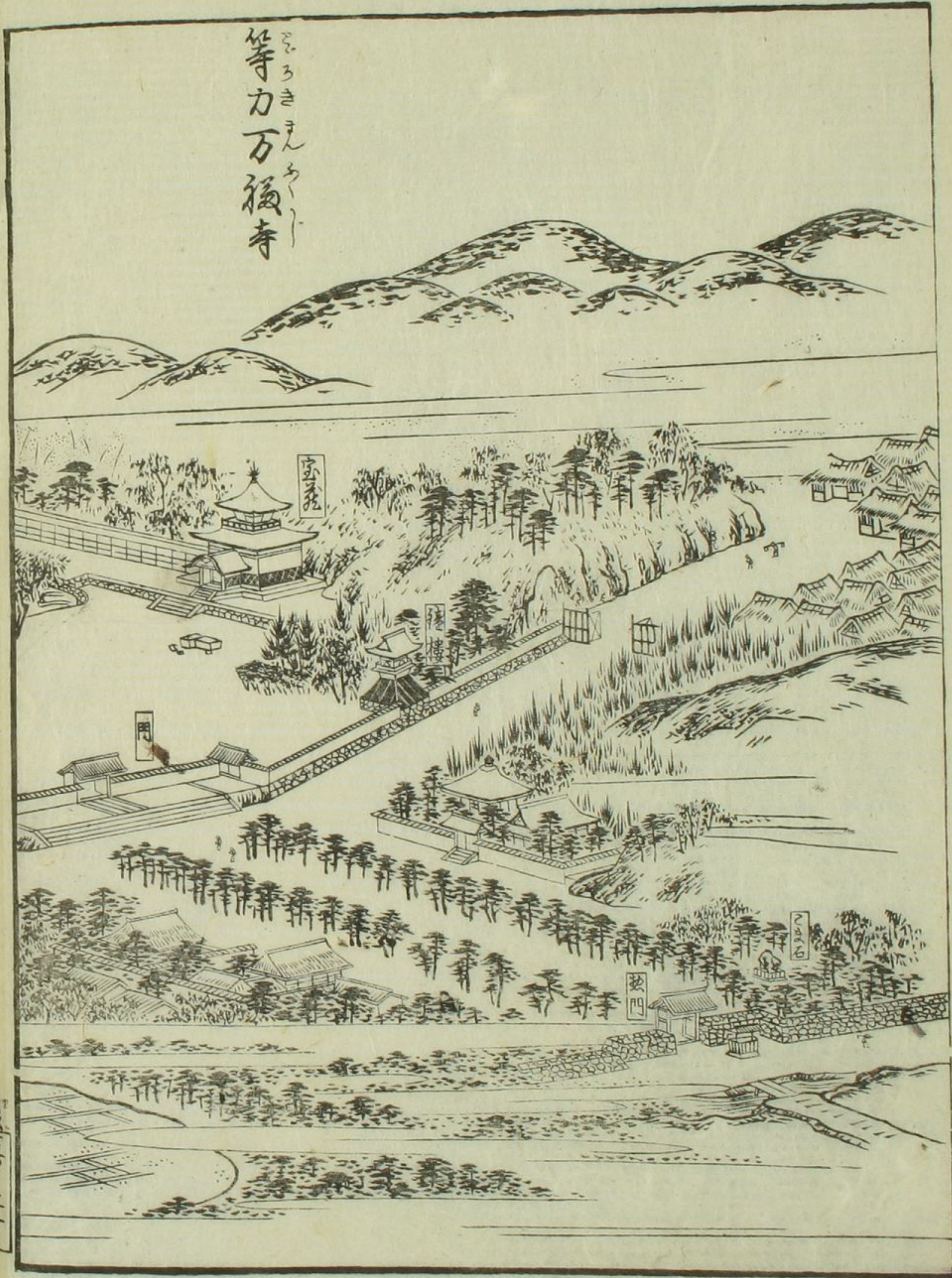
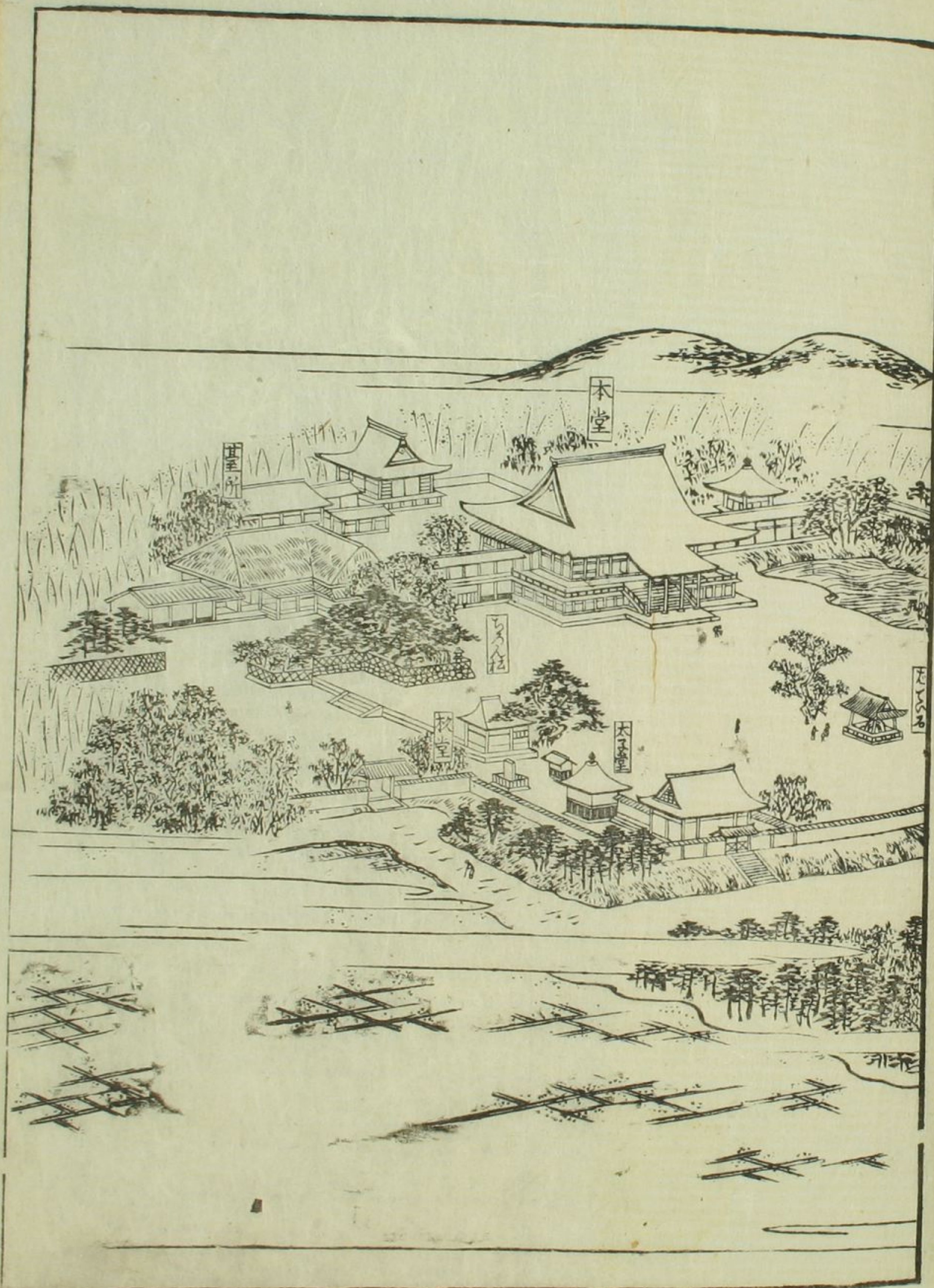
海にふりてのくぐりありて中緒に御中緒といふは 御中緒の御中緒といふは 御中緒の御中緒といふは  
川原の御中緒といふは 御中緒の御中緒といふは 御中緒の御中緒といふは  
齒寺と佛  
まはれくま

○齒寺より日那むらうかたりる吉田新田村と後源寺とより新ありこれいじ  
聖人御勅化ありし地し御中緒の地なりといふ

等力山萬福寺 西流 日國山梨縣等力村あり

杖の御坊と稱して東國七箇寺の其一あり六老僧等眞  
宗依釋源光法師の御基なり ○本尊阿彌陀如來  
聖徳を  
に御化

ま齒山乃瀝陽なるや其靈異を他へ詠はるのれ今亦籍よこま  
考るる佛法義勅眞靈聖徳王 聖徳を  
に御名に 御遊戯の勝地なりと御愛馬甲  
斐謙を出せるの石区なりとされは往昔聖徳を子彼甲斐の驪駒と説  
且佛通をなして空中を飛ぶに三日が間は諸國を歴すといふ





此地を抄ひて藤をとむり空中より降らせ給へ思召即ち  
当山の巖上より今より寺内は時より皇子侍従調子丸と謂て曰く  
今より五百歳の後我後身此去り来りて孫陀の本願を弘通  
とて誠まされ化益因縁合成の地なりと勅申りてふてい  
飛ひし去給へまうりしよりけり星霜積りて延暦の以道忠法  
師皇子降給地地方よりを傳へき始りて此地より一字と造りて  
善後寺と号し法宗の宗風を仰ぎしが元久の比より及んで源哲  
法師遠跡掃は源哲の元久上人の御弟子なりて三世方は師寺勢として天台園融此道  
場とよせり安建暦二年高祖親皇聖人勅免を蒙りて後河内  
治の坊より上野小倉山を抄ひて智明房聖人又湯より法苑上人  
河遷化れよと告まひせりは聖人悲歎よりまされ給ひ今いそがぬ  
謠りれよ即河内治所止り給ひ又よ東園化益の事を思召三化

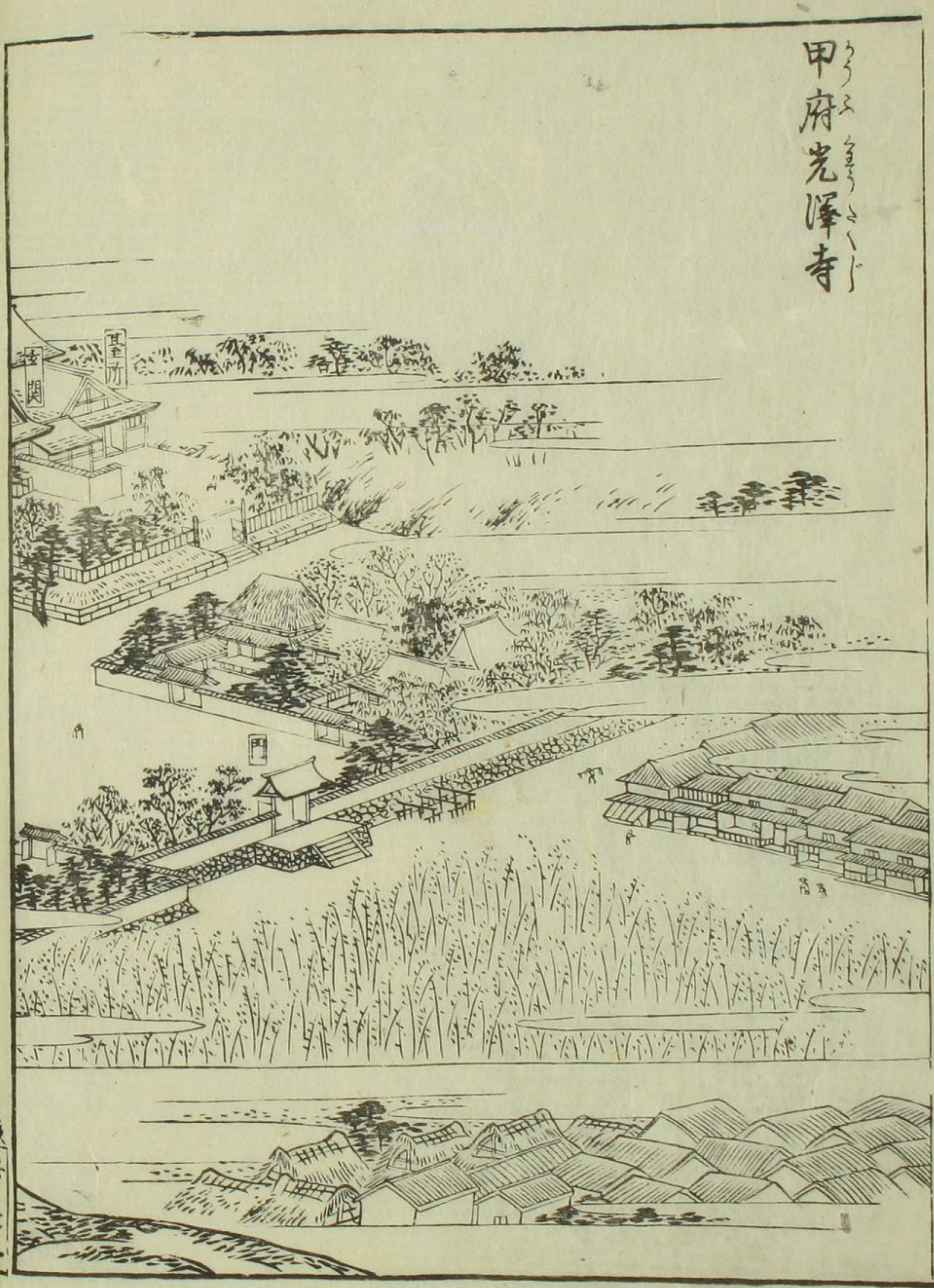
猶も小園縁り引不りやとて此も當國に来りてせ給ひ性く不縁に降  
いり化益を施し経歴し給ふ一日この等力御より多き彼方此方  
と宿りを求めさせ給ひしが但有叢林の中より此梵刹善後寺見し  
を即彼不りて授密し給ひる小住僧源哲元より因学善妙の  
急せしものなり自法毫深の我情を遣ふ一耐も聖人を挫んと因縁  
三乗の奥旨をさるるの乗介も難向を授せり此は聖人といは謝して中  
一実絶對持妙の法を以て徳機應愛恰も環の端なきごとく説ふせ給ひ  
はし其の源哲終つて廣く各辺の高徳をさるるの徳り此後踏をたごる  
りして忽ち我腹の幢凋り降法屈伏し竟り河内子此列よぞ加りり  
安んぢいて高祖當寺を教日河内庵尚より諸方より教化はし給ふ源哲  
日く又陸後一圃法利益教度なりしは此は真宗此淵源をきり  
歡喜踊躍して誠ま念佛の信者とせ給ひり既して聖人又も他

邦又稱人々其催をばし終るに源哲やぐく津葉を調(河出立  
の御膳をとりまいつらふ聖人即喫し抄りせ終るに二條の杖箒と  
て半は傍なる地は拙て撰てのしまり我きく如來大悲の加とる香  
拈る本に花咲とやされば凡まの徒生とくも又くかくれとる  
匠と終る別を死きてそ去終るふては權者の奇特いらじるくいま  
と終るを極るふ彼著漸又根芽と生しつら大本とありとるいふ  
思議うんとと抄り方りありし源哲此二本を守るふ尚聖人と  
致とるごとく日夜心を強き道に法勤かぎりあるふや源哲既又入寂有  
て其後とるうれ春秋をわくの兼應二年ののちりしは民屋より失火  
して此二條の杖の樹よりとりとる鳥の巢ははたひて靈本  
忽ら焼失んとはけし源哲自他の肖像佛室より飛出  
中のはは彼本に攀のかり両とあけて悉く是とらうら滑

終るにとうんを在て世に尚院を杖の河坊とは稱しとる  
○靈佛 聖徳太子河自他肖像  
此及び彌勒の像并は河馬具等 ○馬蹄石  
其法 ○河箸杖 寺内あり彼冬火の附  
源哲自他の肖像 寺内あり此のよま止し  
のよれおけし終るにゆびとやけ痕あり法や作願をそくのあき滅後かんこに百  
年の星霜を經るとらふ尚かくのどし堂本像靈はしとらんや仰くはしるるに  
等力山萬後寺 東流 日圓日那栗原村あり

等力村ありとる和と日号日系はして源哲法師の閑基あり○  
什物 記念の御氣 法統上人の御真影の中央に泥筆の六字の名字右の脇に河自  
とらうら河流羅の河附空師あり 親友母をたとあり丸の眼は聖人の御親友母を信とあり  
雲師ありとる終るに河氣あり

御堂光澤寺 東流 河坊 日圓日那栗原村あり  
仙龍山と号は當寺の相州倉田長延寺に引地へ 長延寺とは永勝寺の  
古名と寺勢と今長



甲府光澤寺

延寺と号  
此とや

○本堂十一間に面一切經堂及び僧坊七區あり

○畠園名産・郡内紳・郡内織・日給・日紙・日蠟・小梅

地胡桐・荏油・柳下毛綿・粉・葡萄梨子  
岩瀬村岩修持寺  
より出る名産あり

### 駿河國

風土記云旧東記と珠流河と書す昔例流河と書す郡と駿河と云ふは流く  
國の名を依りて云ふ也按る小和月六年四月の詔に駿河内七道法園郡縣の名取定と著す又此處の  
武郡武光諸國郡内郡置等の名並二宮と用いず郡名を承るる事と云ふるされは西國東國と云ふ川西國郡  
邊に城大井川尖き川の流れ珠流河といひんといひは流の二宮の宮也此は駿河の國  
此なること其の類を略して云ふは用ひざるなり  
○畠園府中又教養寺と云ふこれ聖人阿闍維多寺なりとぞ

### 阿部川

富士郡より東海道の驛路なり

水源阿陪郡の内より流きて東へ海へ入る東へ富士川あり

て西へ大井川と隣なり是東御道の驛亭なり往昔文曆

元年秋八月高祖聖人阿闍維多の朽く此川邊に立てて坐せ

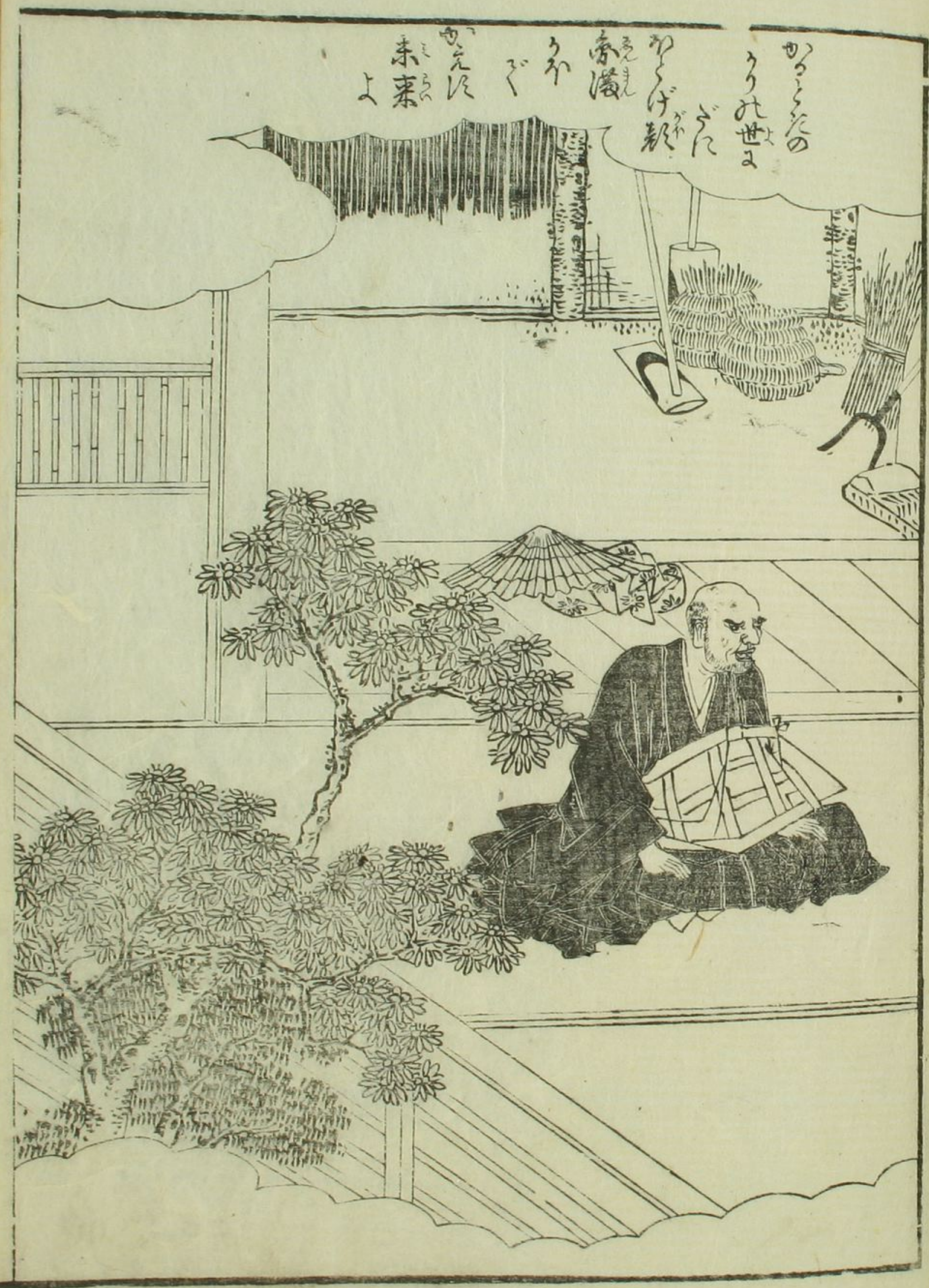
流ふと滾くする長流瀧水岸を渡してをびこれ丹楫あり

と豈たやとく渡るを得んや犹るをいけんや助る亦の  
乃唯物杖草鞋のこちるをや爰に抄いていけんといふと云  
中うく後を抄くは猶く想せ給ひたる小津後より  
一人の僧忽然として出来り聖人に向ひ此川乃流瀧我れ  
よく去りいざせ給へと御身を先立て好禪又聖人  
阿闍維多と云ふ是又流の流らせ給ふと思はれや甚流く  
て恰と陸地を何むがばに於て西岸に希給ひ一かの僧  
即飄然として波の中へ入ると見しが終に其の方を去り  
聖人奇異の事いそれと直に波と用きて見給ふは波佛乃  
る像亦腰より下りいよとあり又濡抄はしりたる禪又板こそ  
今の御僧にこれ如來とてはしくたるぞやと感涙教給り  
去りて鞍附の称号をぞ唱へさせ給ひたると云ふりと此は像



靈像化僧て  
聖人を率て  
阿部川と馮  
終る





てさうらふ小祿名十念せしむる小ふらぎや一念毎に念まの  
化佛達せがはより出まの口入給へがまいたは驚嘆し奇異の  
あひをばしつるが何さま此僧ん人そいよとあはしと急ぎる目をえ  
出てこれとまいらせまというる御方までおまは申ん今今の奇  
持をみる上の御名ゆはしくおるはし思召るが蓮生唯餘のみとは  
へと安と功德の佛名一念をまづ小一百宛の積よ何て積るも実よ  
勿神のさきつるがさればとく喰ど小もぬらと祿が路積の備用中  
なり我降り来ん祿の必かのあはさるゆとせられよといひつたら  
出奉團(こと急ぎまき)跡よは家内打こぞり各眼元の奇特と  
感とあひとあがの沙汰と止ざりしが祿經る小陸ひるも各團  
又打まといとあたる小蓮生房の既よ奉團の不用と達し又も  
後たのがうんと此宿をこりては彼まの家にもう懇懇とれとの

べて即ち貫文の各目をわくしつる其財はけはるる十念  
を清え給しとあしつるまは迷惑しつる小も御念佛を  
致まつ世よ相違はしとくも我まどれたの凡まのあよ  
していくんぞこれを返しきるものぬべきやとさまぐと院  
たれが蓮生かいらとろり居たよ何らば唯汝餘念ろく想と  
かきりよ祿名を唱ふ給し我まどららと是と清え給しと自ら  
口を開きて結ぶりしうはま心なりんも人ども押へよ陸ひ  
祿名念佛の経よこいふぞや一遍ど小まの口より化佛  
出く蓮生の口よ入せ給ふ既よかたのどく九遍まぐ唱へ今こ  
遍と唱へんとせしよ妻たるものかたつらにありて何んとして  
まの口よもとあて達せよ何ひ何るもの御のやの奇持と  
見系しとろり何れ給る一遍まは清り押しませ濃よ廣まの御恩



徳を以て教ふよを教て口をわらうと云ふは低取て滑平は  
けき違はし止てわらうと云ふは我大切の室をれども辱にまうせ得  
正に必は是を因縁と何とぞ吾知識の教化をうけ来世の果極と  
教ふはゆめく忘るゆめく終は別と云若て捨よこそこのがらま  
たかくて主婦の者いふ我不思議の縁に値過と云ふも未若  
の附わらう小や善提を急ぐ心もたかく唯く怪異のゆめあひけ  
ゆとのゆめいふ名聞よこと云「たが其後年ありて高祖親鸞聖  
人浄土法の初をうらば此家に宿しせ給ひ」よと主婦の者立出  
ていひける不思議の浄僧ありて我家に入せ給ひぬと始終のゆ  
ども聖人は委く浄物ごうらぬ「たが小聖人今なだうせ給ひそれその  
態谷蓮生房よと云ふぞ我よくよくこれをきり去りてし汝若よき  
法の室をさうらぬと名号不思議の正りを志せ」給ひしは

主婦これを徳聞たらまらる若若後配して聖人を礼拝し何れ  
を今まごむくも名聞よはは「たがど何とまは」の我若があまや  
此とい後世の一大ををも浄慈教は「給ひれとひたうら小親ひまうけ  
わが聖人その心とあられと云即主婦よ向せ給ひ我け他力が親と  
深く信ごなり佛恩の稱名をうらうんがたとい十悪の罪人又浄の  
女人といふも西方より接し浄土よ向らう給ひ浄いまれこまやうと教  
化しせ給ひうらば主婦の者い陸喜の涙よせられたるなり信心  
を得て即念佛の安心をぞ了納は「まうらこれより終は信家と贈  
て佛圖よめこれを選生寺と号し嗣子相續して今よ二百年又よ  
後給しるるは」と云

○世傳云彼時蓮生法師念佛と云ふと家のうらなり小池いひうの十数箇うら  
またらまらる蓮十華生しつて花をうらまうあやうら蓮生其後入らう  
後と云へて念佛と云ふは「蓮花と云ふ」が一遍と云へば「蓮花と云ふ」

此に中より一巻のりしてまがまがしとらんいづこかきよるやまると  
 又云彼當家の主人と云り悪七兵衛兼造がまがまがしは毒飯とありしを年々  
 減りの後彼毒勿種のみと云りたまはしは世に毒飯のひく居たりするふとく不  
 幸にして命をまろりけり民國よりして彼地を後一世のぬりて見合せ  
 せりりるらん末寺僧を考へざればこれと云らん後り也

○什物高祖聖人真筆十字名号(伝書)を傳おせり

○出園の名産は ちりちり後子其流川より出る ねご入日本より出る  
解 出川の茶店を南入風味甚し 竹さへく 腑中の所とて能る花入 文徳櫻捕  
解 藤家よりひこれをとるるふんを 船ぶと現箱とくあり 船戸の深飯 大舟川黄舟川舟  
 十だんて 舟の山の茶店を南入和方り備藤六 船戸の深飯 大舟川黄舟川舟  
解 徳徳寺より出 沖津細舟の船あり 白簾子 浦原船 同紋 三條松  
解 風味を他異なり 露 富士岩山中岩川より 粟薔 日香燄灰 丸子石龜山より 淺見寺膏葉  
 府中表凡とく此園暖氣ありて諸菓熟餘園より存よ

遠江園

按るよ今切の渡しの切ぎりし名は遠園と湖水をりしと云されは湖水と港海とのふ糸に道  
 きを近海海とのこれと對てけ園と遠海海とはひかりらり和月六年のながり園と云ま  
 違下り近は遠のなまはたりあるん  
 ○遠園後松の楳々に福岡山廣興寺と云あり福岡村より列寺にして聖人河津信緒の地とぞ

善法山善勝寺 東流 渡松より

善寺の高祖河津信緒の河津休之助とせしめし 靈場なり即其河津  
 跡とく九尺に方さ橋を造ひとてのる後河津信房一守と造  
 三才といふ

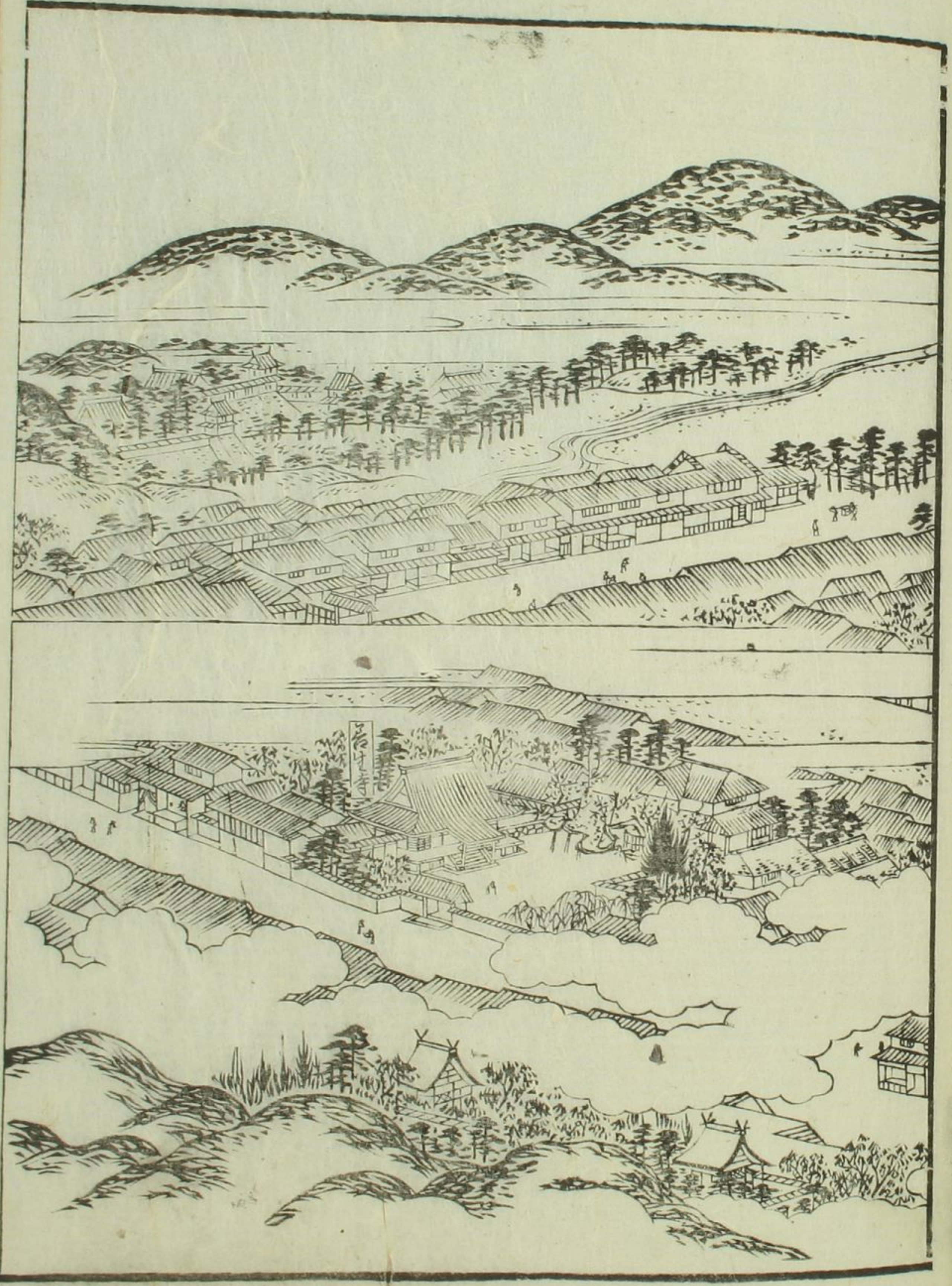
- 出園の名産 干姜西川より 紫菀西川より 渡松密柑西川より 葛布西川より
- 掛川の名ぶらりめがら 揚和布くけ川の海 白羽柑子掛川より西川より 蒸好西川より
- 根の正てり村とて地が 白羽柑子掛川より西川より 小尾山西川より 粟川館西川より 日去根西川より
- 納豆西川より 松茸小笠山より 溪地茸西川より 小尾山西川より 粟川館西川より 日去根西川より
- 新飯よりび解此名の名地や 渡松は 蒸好 有松枝西川より

参河園

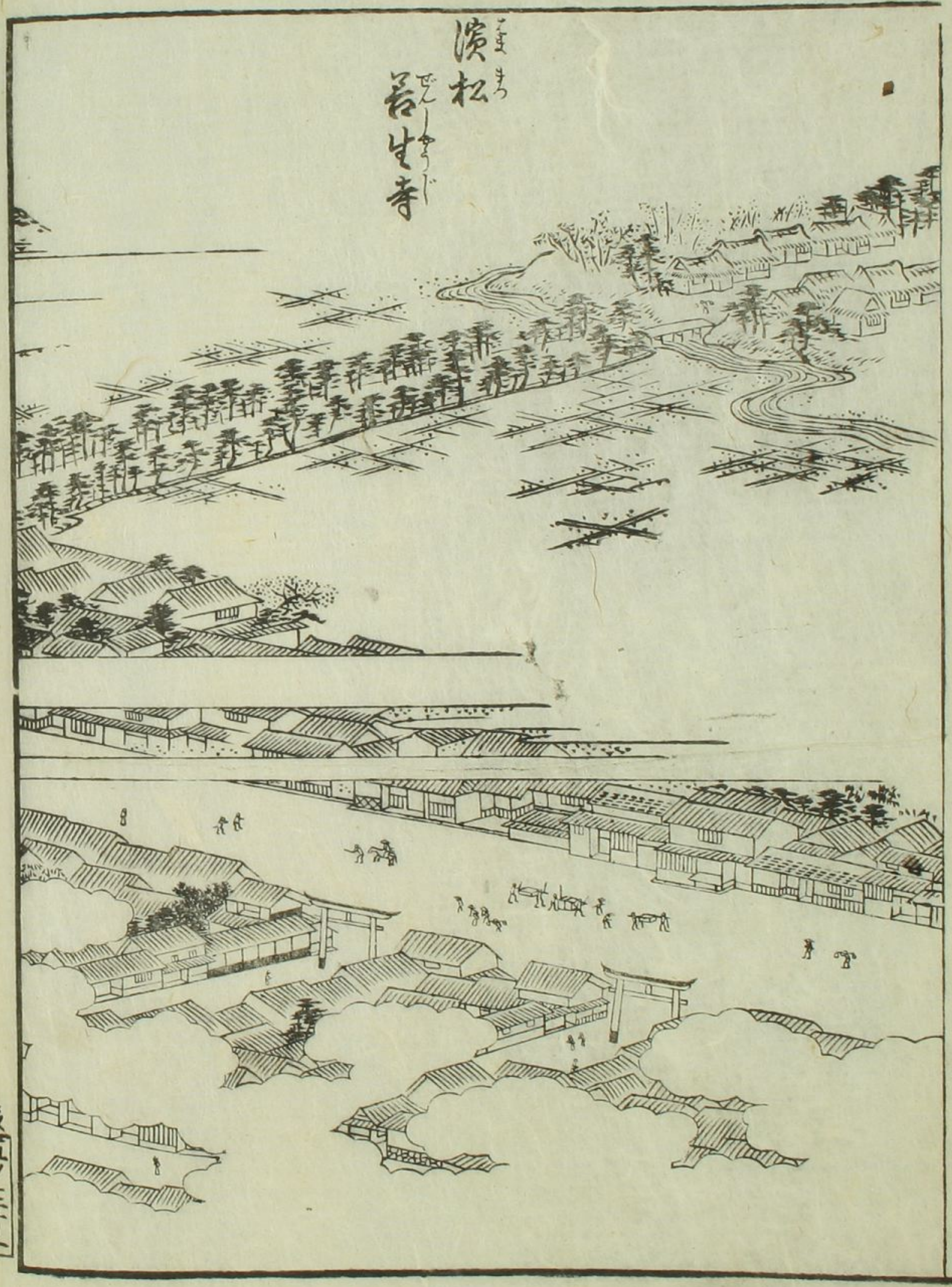
右田河坊

本堂十日間方

○出吉田の滝下よ正源寺と云る是田流の末寺あり聖人の河津信緒の流家なりとぞ  
 ○赤坂と云るは法書と云るあり是又河津信緒の地なりといふ

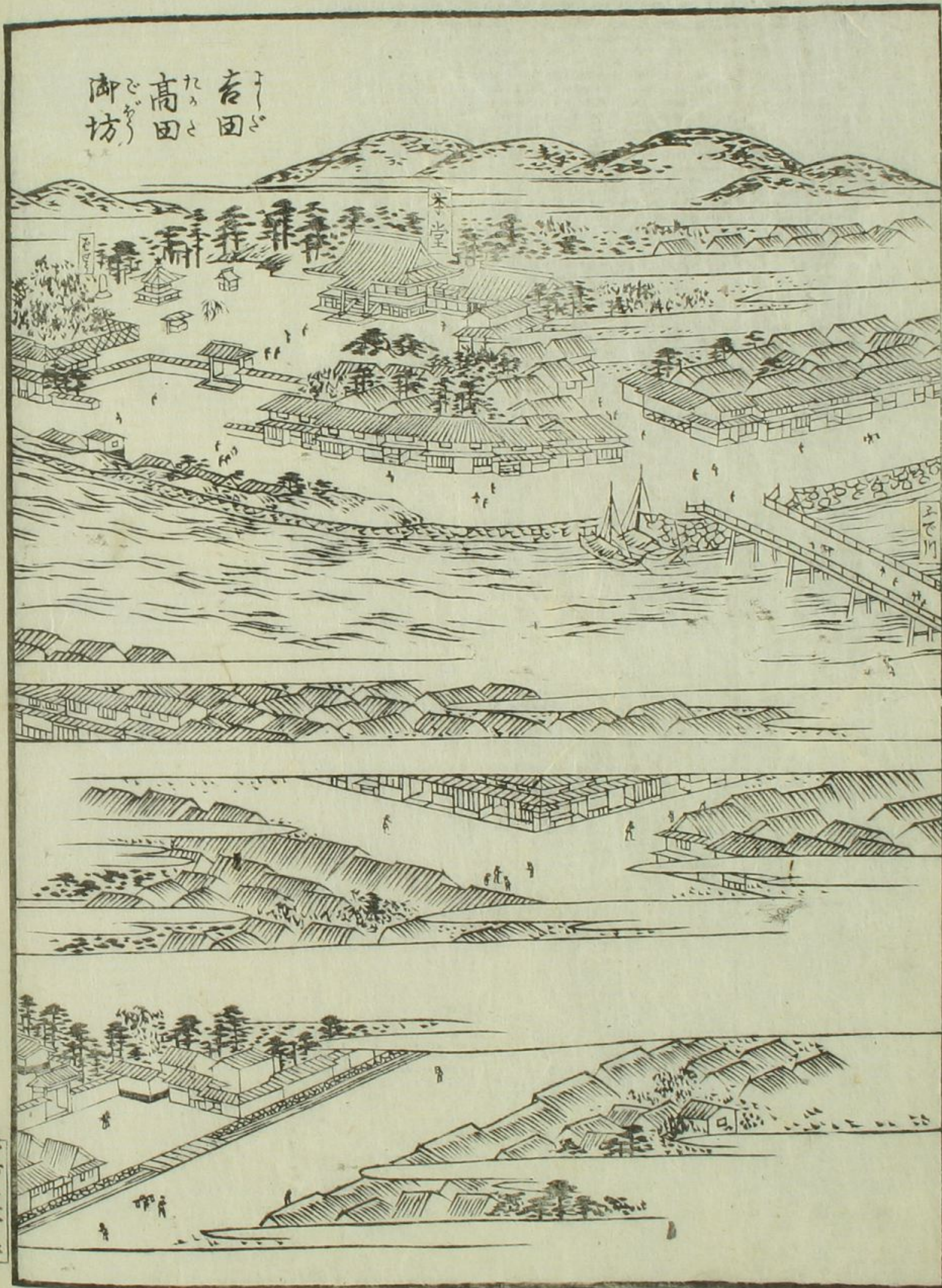


淡路  
松  
若生寺





高田の御坊  
高田の御坊



○平地村光教寺といふ西流の所坊所なり

寂光山勝鬘寺 東山院家 日蓮類田部 深溝の寂滅所なり

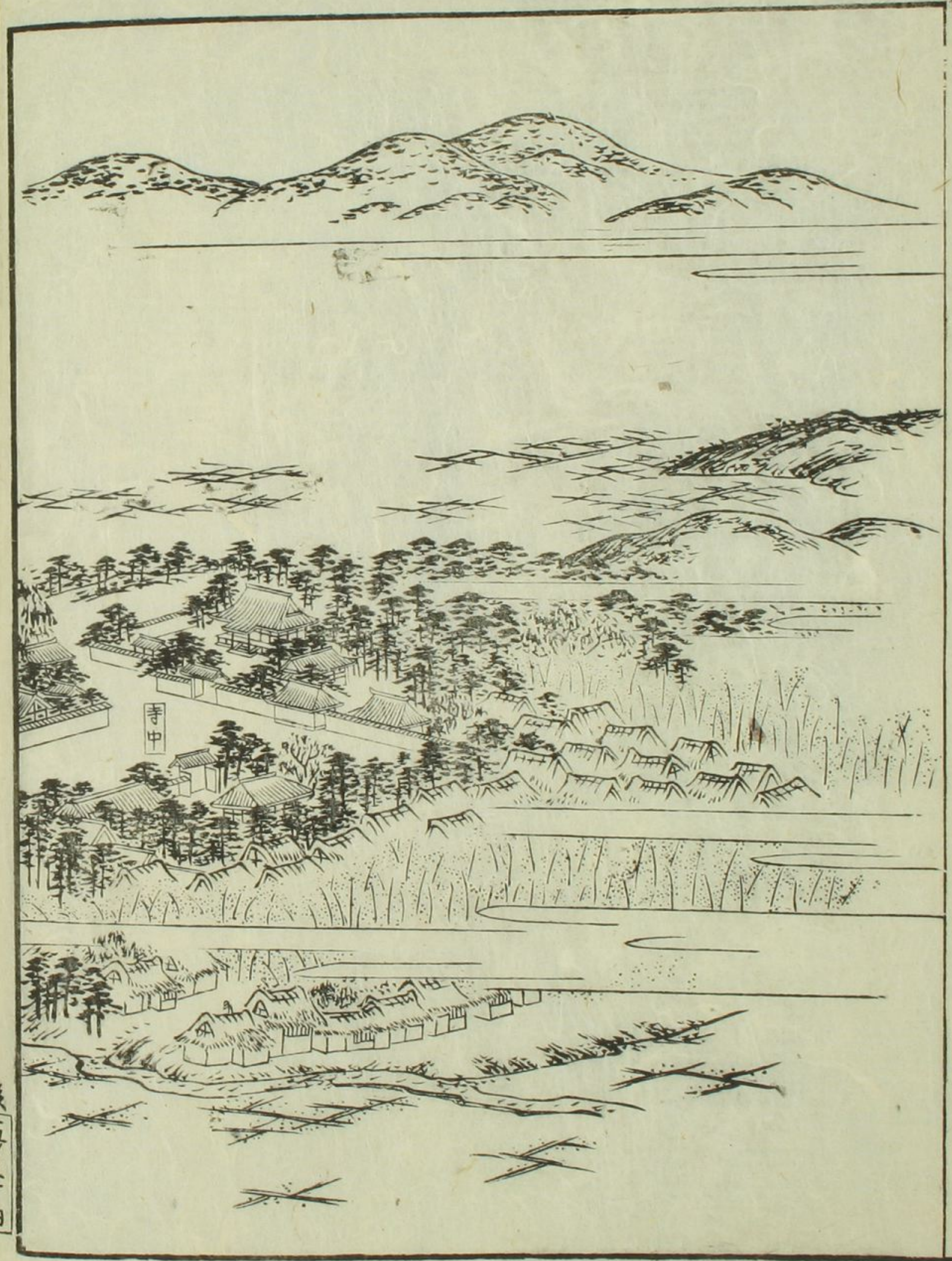
当山の向天台因宗の精舎なりしが中古寺勢了海法師我真宗よ  
降依く中真用基として又他力念佛と弘通行はし靈場之兩國  
よ抄いく三箇の一院といふ 當國三箇寺と稱するものなり當寺上宮寺希  
當寺なり是皆日時は降法ありし處に移れし也

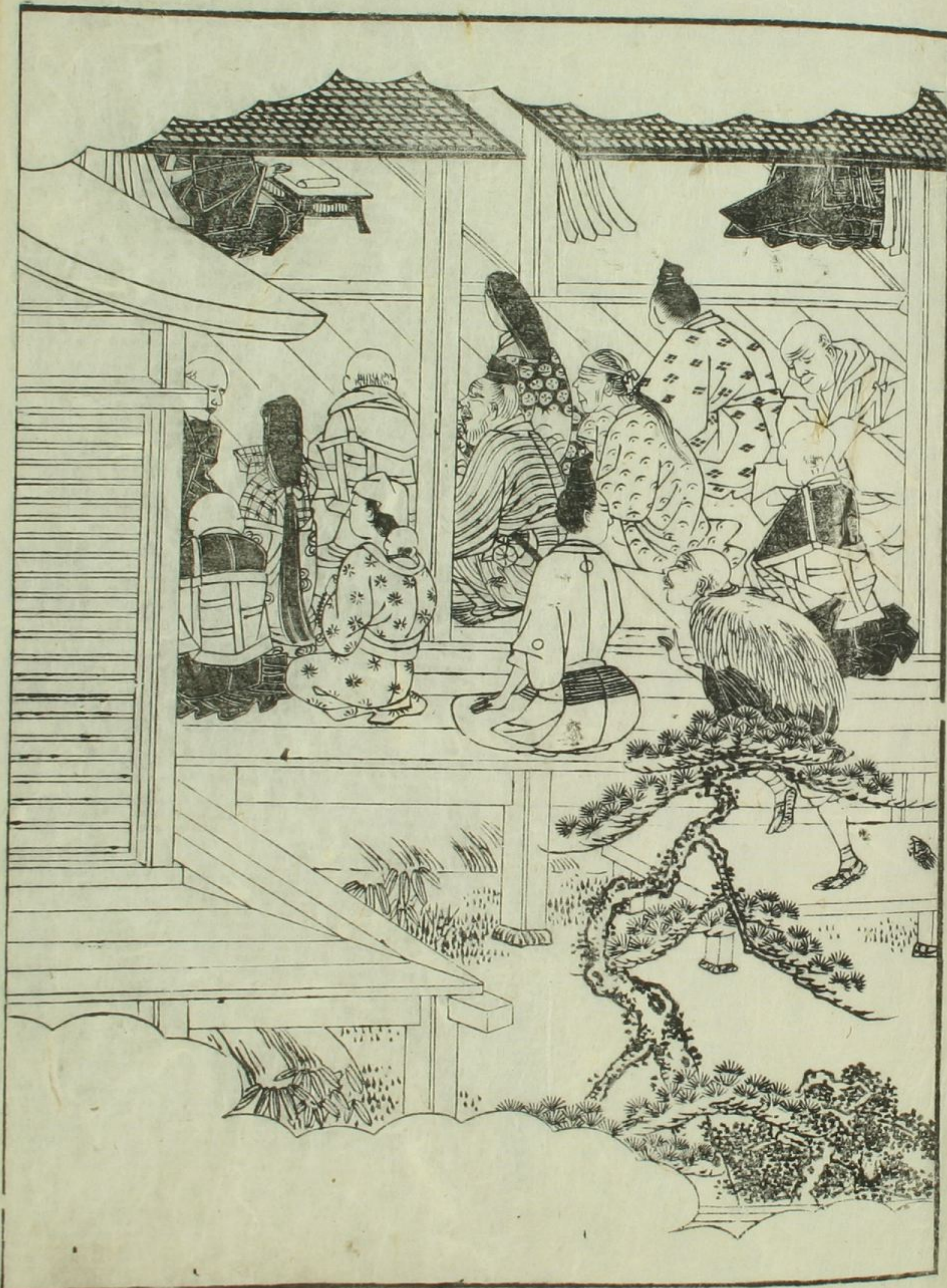
○本堂九間に面する如來の像 聖人冲真他為源如來と稱し高祖聖人當院の奇勢  
了海法師(所記念)として遷らせ給ひ此像佛冲真  
やきと移ひえたりしなり霞の動くを移ひ連眼より冲真源  
ありと云ふは其源原の抄とてめてありし樹なりなり 塔殿二坊

高祖聖人冲年六十三歲嘉禎元年の春冲降法行しせ給ふ所  
當國其他の名柳堂よ抄いく三七日の間冲説法はし給ひるふ遠道の  
細素群衆(徳田と若恰も山の下く日くは降法渴仰をん族十  
を以て算入爰は當院の住僧了海法師これを以て我後之旌旗を  
つびしま當國よまき我この勝鬘寺の天台因頓の道場なり代三

乘の法をまひ當國の衆民を救ふとてこれを降依(尊重)とること  
年以し我我代は當國の宗がたれふ覆さるんと行やう我愆のゆゑ  
らびやいで彼地よまき我法徳を以て難造(一財)の宗を屈伏せし當  
地を追拂はんの案のうらにありし即日真の冲院寺教因と宮寺連  
躬をんとしるをせ法師をわらひ竟は柳堂よこそありけりけり聖  
人冲説法のま中なりし三人の僧のやむとて此座のまると結者  
多るが聖人のまきとせ給ひ徳衆よ對して大教をとなら抑釋を  
冲一代の教法その教多門なりとていづこの門は佛教の何れなる何  
とれ法は殊勝ならん但これを修せんとす各如説は降法其功德  
を獲耐は終は利益を得んゆ必我より我とて世よと代末代のたが  
いありんは厚薄の二つあり法は必一既は降(か)ぐ元來世運は  
降てうんまり爰を以て釋多き婦小法を志し給へりたるとは彼大乗冥

針崎勝曼寺





了海教因蓮の  
三徳柳を以て  
真宗と稱す

願の法のとら一機一縁の益をうぐ成る上代利根の衆生其の修  
し其徳を得るともも齒今未代純根の衆機在家造悪の九支事  
其苦多を勤るふとえんやまきい河経より我未法附申債債衆  
生純修道未有一人得者とは況後へりわう魚は今我とむ  
不の弥陀本願の教如來出世本懐るんが機普善の要法よ  
して五乘空入の大道なりたとい十惡の九支五逆の衆人なりとて一念  
よ本教を信し専心よ弥陀を信命しきまは他力攝取の淨利益とや  
して即得往生不退轉と安んじさらは其うたひみえうん淨法  
此うまはいとく報恩の稱名執念るなりと恰も懸河の流る  
ごとくいとこまう小淨教化のせ給ひされ衆人陸喜の涙をるじ皆  
一日よ稱名をこそ唱へたるかくて三僧は先よりとり徳聞してありしが高  
徳無双の見識も忽我執の心を棄て我偏心の陋なるは悔と歎きつ

聖人よ謂しなりこの小回心懺悔して竟る本宗とひるべし真宗念佛よ  
ぞ歸せらるなり

○齒國にそのく聖徳を多勝曼經内溝港の靈地なり小なり寺号とわくは稱名と  
や又齒國係ねとる地は勝曼經の寺とる寺院あり先よ聖徳を多所靈地とて真宗  
を奉る寺とる日光寺門跡に屬するの院なり

稻荷山淨妙寺 東院院家 日國中ノ郷あり

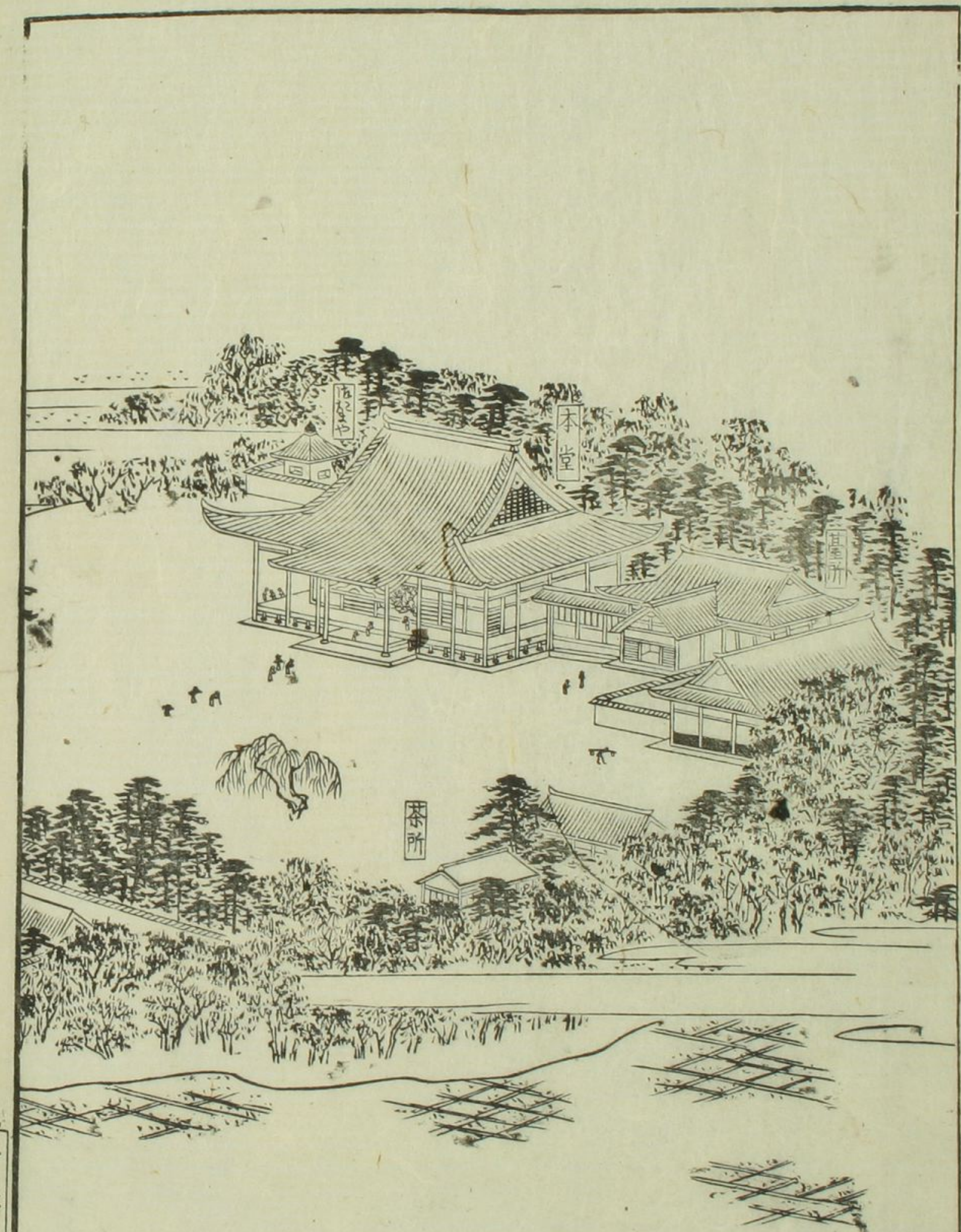
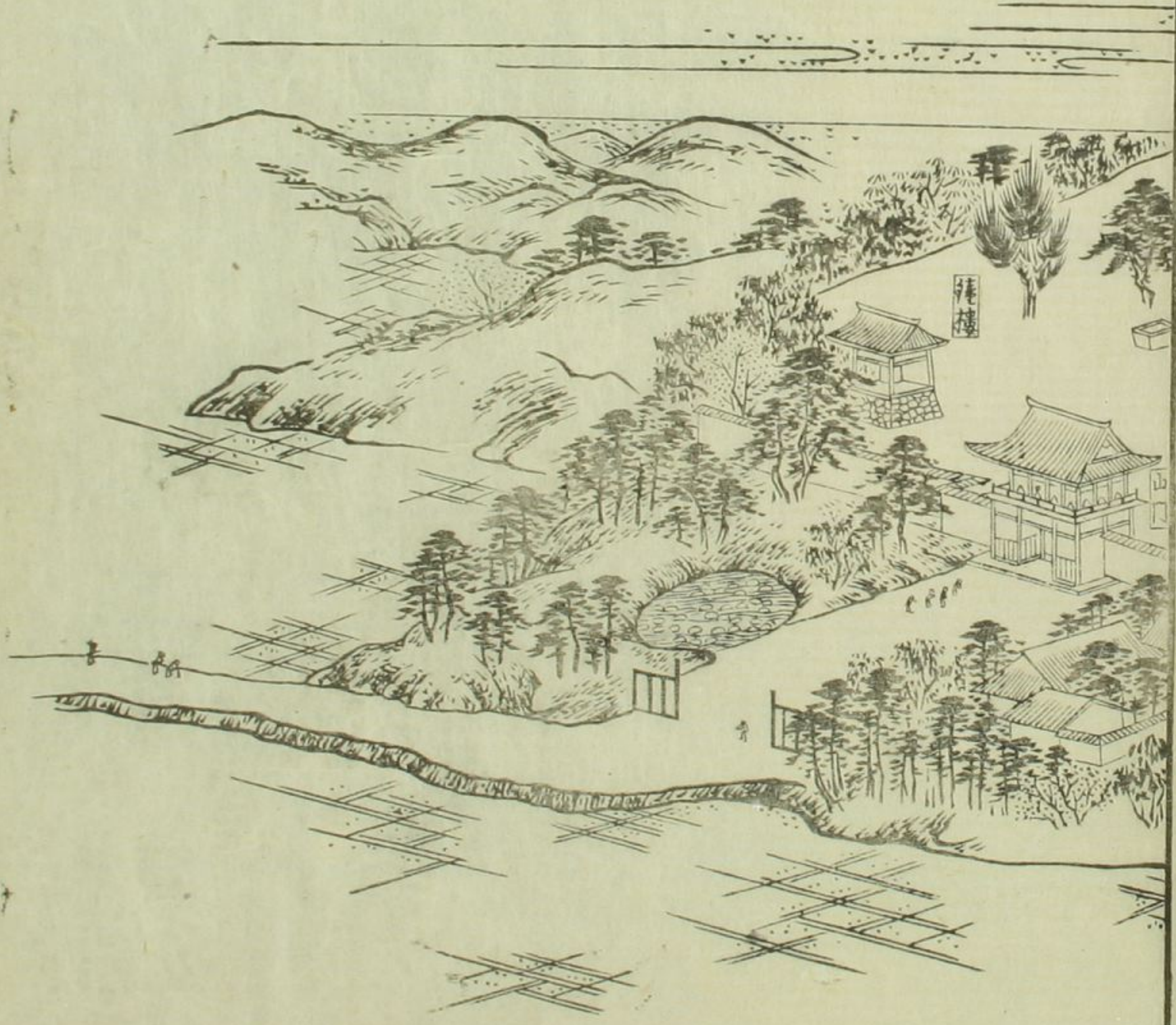
齒院に二十に軍第十三葉中 信願房の選跡なり始に相州鎌倉よ  
創建ありしが中右齒國よ將終に 信願房の徳下野國藤原系總持寺の末代に  
此故よ今よ關東七箇の大寺に一院と稱せり

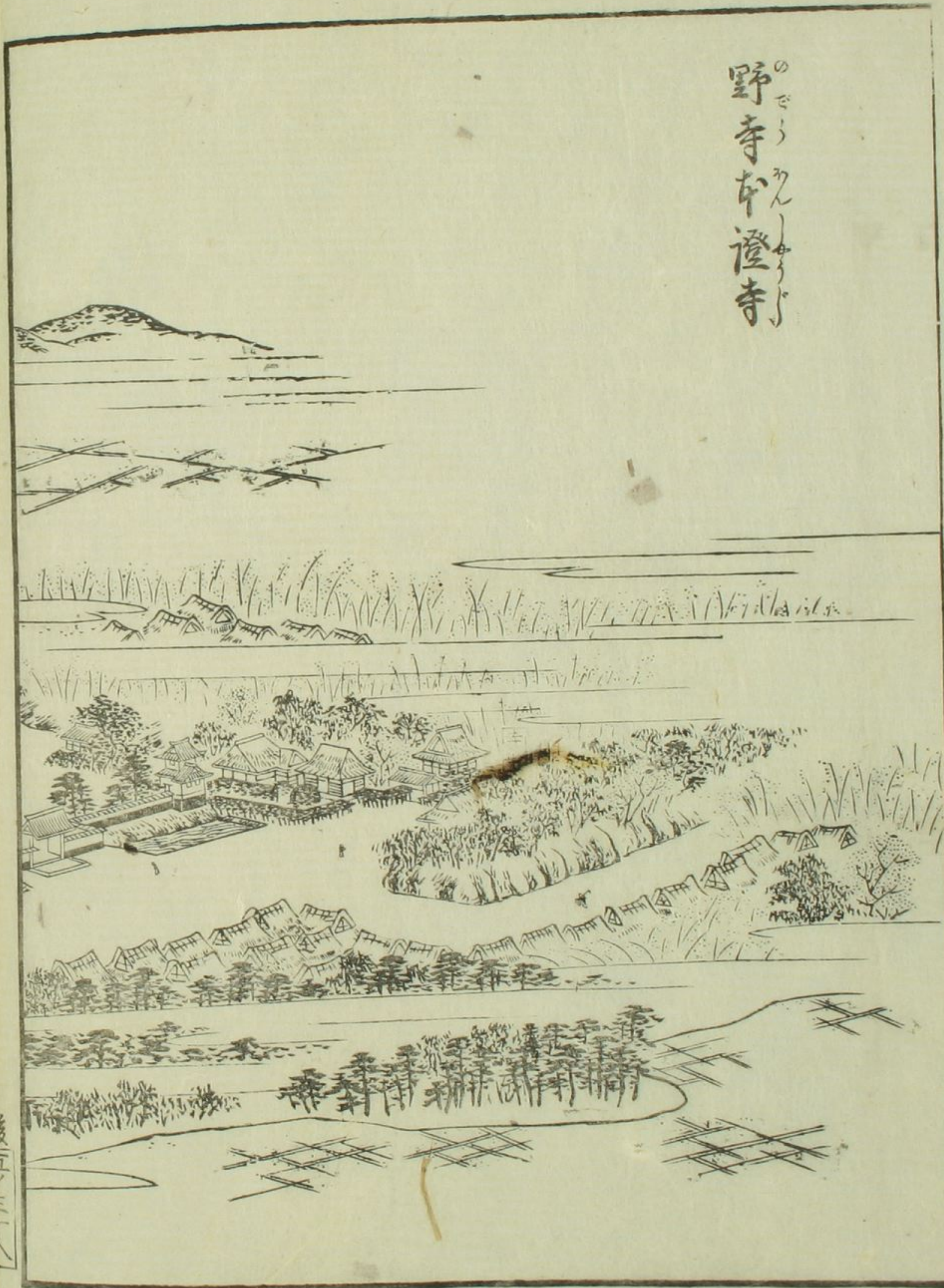
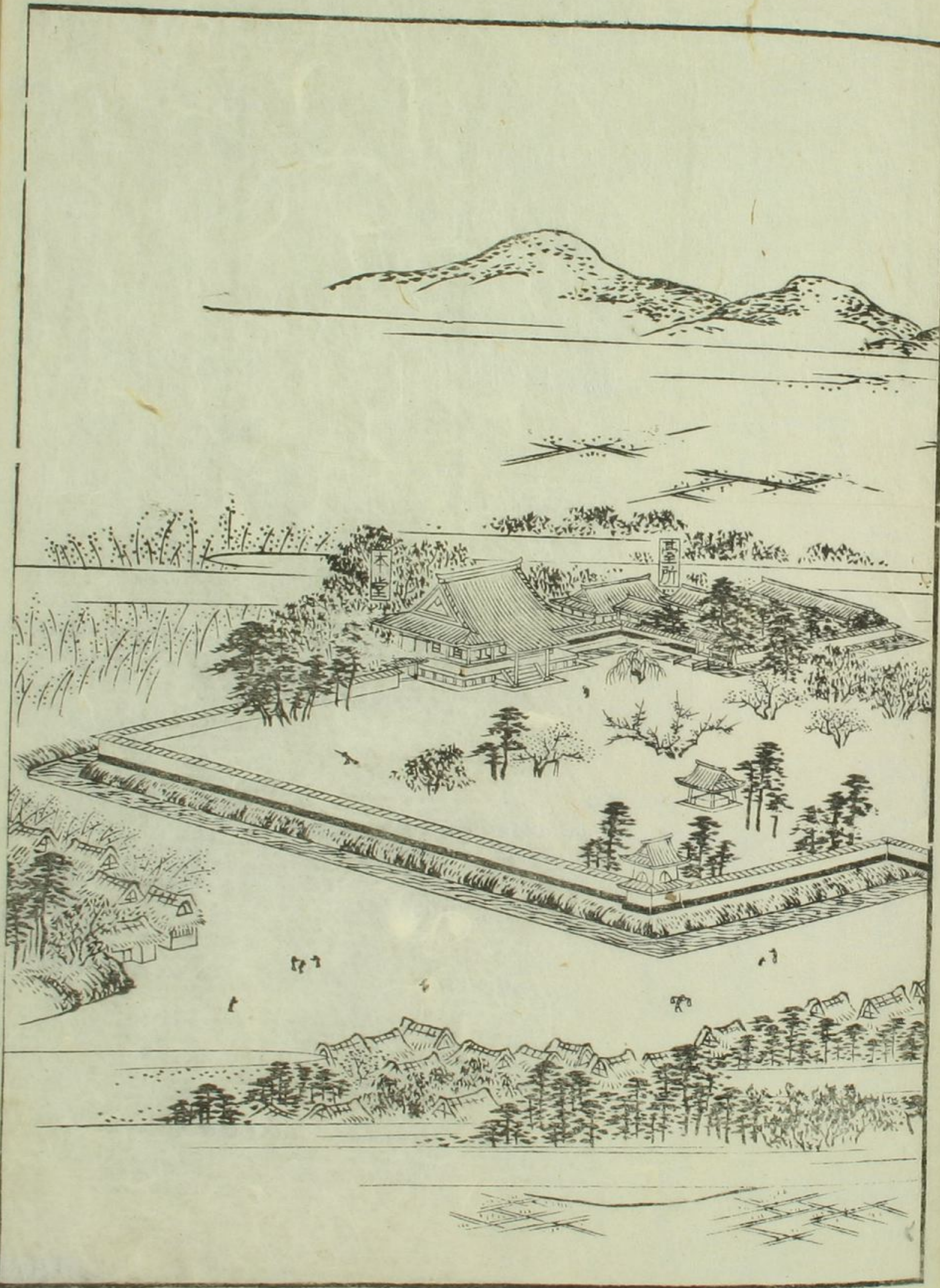
○本堂十一間よ九間高祖聖人淨真宗の壽像を安ん

○計修より中の郷の向よ和良因房とあり先良因の遺法なり又中の郷  
より中里よりとる寺地村慈光寺といふありこれ三河國又箇寺の一院也  
とる又寺とは淨妙寺正法寺淨願寺慈光寺壽寺希慈光寺なり  
とる是聖人面授の淨并るに五尊壽寺に今尾州藏岩あり



中ノ郷浄妙寺





野寺本澄寺

後五

雲龍山本證寺

東流院家日國郡海那志まの庄持寺あり

用基ハ真宗降法の大徳慶園法師より當園三箇寺の一院あり ○本堂十間に面高祖真蹟名神不離の本を安置凡坊舎三區あり

慶園法師より向小山別官外重の息なり當園夫他乃流小嶋の龍宮と云ふ所に居城して武徳をとりんりしが宿因の終る所にやつら世の罌産をいとい富貴の交りを経て終り別發深夜の夢あり屋形を別精舎と云ふ専天台園宗と修し「り」が高祖聖人柳堂沖動化の初了海法師と日縁を以て忽ち教を捨棄して永く聖人の沖并子とあり真宗安二の願徳とそ稱し今勝發寺の事これを出れ今船藏洞宗安二の願徳とそ稱し今勝發寺の事これを出れ今船藏洞 ○靈室聖人丸との沖動及び用基慶園法師自他の像あり

其外これを畧す

左子山上宮寺

東流院家日國日那依村あり

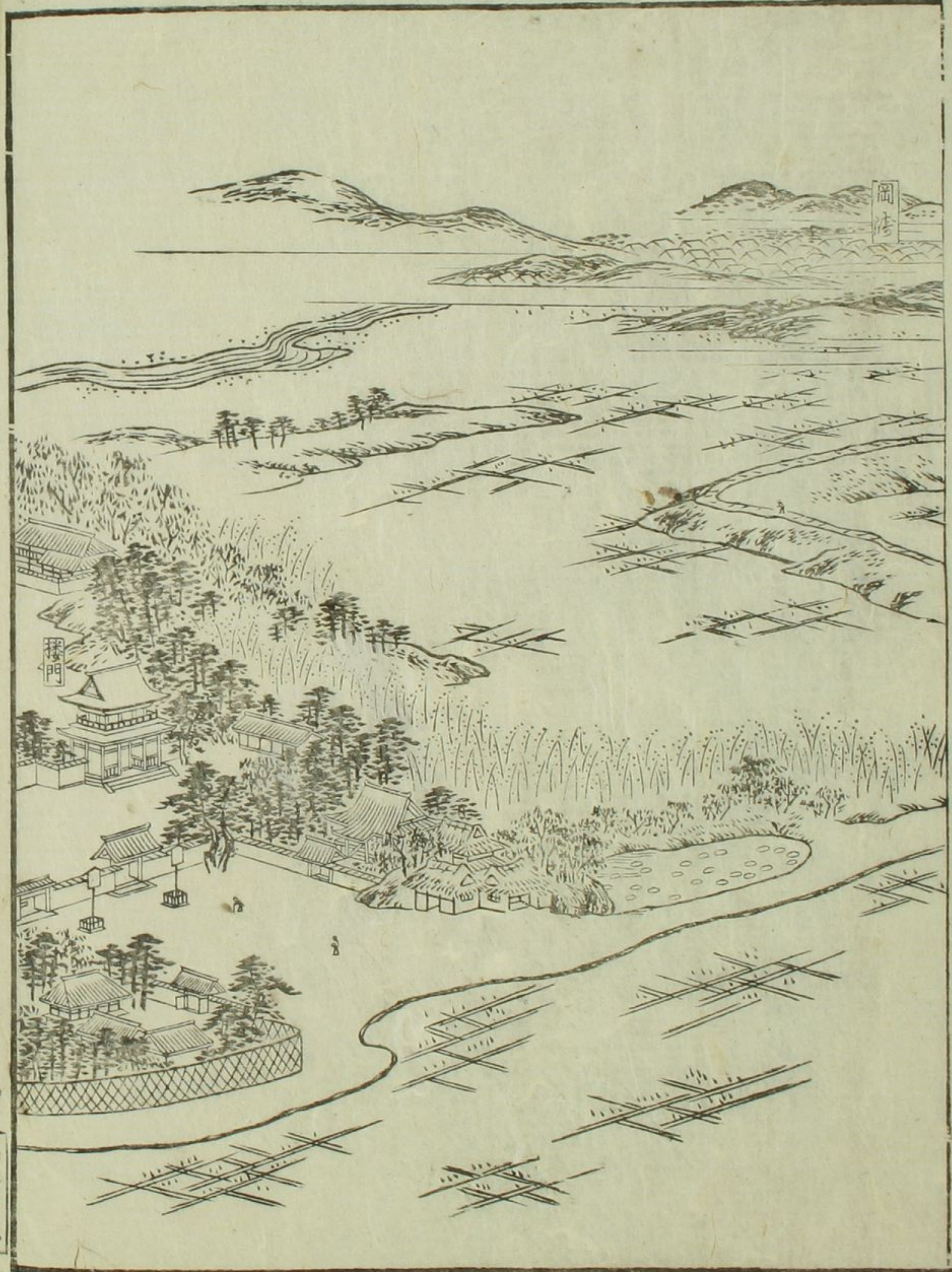
聖徳皇院と号し真宗降化の大徳蓮外法師の用基ありて當園三箇寺の一院あり ○本堂十間に面本尊阿弥陀如来聖徳子沖真他 僧坊三區あり

當院の往古聖徳さまの用開あり「靈地あり」天台園宗此佛場より依之諸号して中次武人安友右衛門尉祐綱入道にて蓮外と号し當寺又恒持し専ら大乘實頓の法を修し「るが不思議より了海法師とてり小聖人又柳堂と号し「なり真性得悟の強縁を以て竟し本宗を改め他力念佛と降法」沖并子安二の信者とはありと云ふ

○持寺中修寺より二里を経て西之村に應仁寺と云ふあり應仁さまの



素子妙源寺



選如上人此不<sub>レ</sub>久<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>河津<sub>前</sub>は<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>河津教<sub>所</sub>あり<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>河津<sub>寺</sub>あり<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>河津<sub>寺</sub>あり<sub>レ</sub>し  
又龍燈<sub>松</sub>と<sub>レ</sub>入る名<sub>本</sub>あり<sub>レ</sub>なる山号と松光山と稱<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>河津<sub>寺</sub>あり<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>河津<sub>寺</sub>あり<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>河津<sub>寺</sub>あり<sub>レ</sub>し  
一<sub>レ</sub>る俗家<sub>より</sub>是<sub>を</sub>守<sub>ル</sub>と<sub>ク</sub>又世傳<sub>レ</sub>る本村<sub>の</sub>なり<sub>ト</sub>又池<sub>あり</sub>選<sub>上人</sub>  
の河門<sub>後</sub>依<sub>ル</sub>本如<sub>是</sub>と<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>但信<sub>の</sub>武士<sub>これ</sub>の他人<sub>と</sub>此池<sub>より</sub>出<sub>現</sub>

桑子山妙源寺 高田院 院家 日國日都桑子村あり

華<sub>聖</sub>院と号<sub>レ</sub>し 寺号<sub>或</sub>明<sub>眼</sub> 念<sub>信</sub>房の<sub>用</sub>基<sub>は</sub>て嘗<sub>レ</sub>く高祖

聖人<sub>河</sub>説<sub>法</sub>あり 靈<sub>場</sub>あり ○本堂<sub>十</sub>間<sub>に</sub>面<sub>本</sub>尊<sub>阿</sub>弥<sub>陀</sub>

如<sub>来</sub> 安<sub>阿</sub>弥<sub>陀</sub>の<sub>惟</sub>當<sub>院</sub>より<sub>其</sub>最<sub>上</sub>の<sub>九</sub>即<sub>存</sub>ると<sub>世</sub>に<sub>名</sub>を<sub>稱</sub>する<sub>僧</sub>なり 僧<sub>舎</sub> 二<sub>區</sub>

當<sub>山</sub>用<sub>基</sub>念<sub>信</sub>法師と<sub>中</sub>の<sub>當</sub>石<sub>平</sub>田<sub>の</sub>莊<sub>の</sub>領<sub>主</sub>安<sub>友</sub>薩<sub>摩</sub>守<sub>是</sub>

なり<sub>即</sub>屋<sub>敷</sub>は<sub>屈</sub>清<sub>し</sub>は<sub>ふ</sub>さ<sub>ま</sub>本<sub>親</sub>名<sub>号</sub>の<sub>要</sub>法<sub>と</sub>受<sub>得</sub>なり 高<sub>徳</sub>を<sub>慕</sub>

一念<sub>降</sub>命<sub>の</sub>教<sub>心</sub>と<sub>後</sub>佛<sub>く</sub>聖<sub>人</sub>の<sub>河</sub>利<sub>益</sub>を<sub>信</sub>し 竟<sub>レ</sub>河<sub>津</sub>子<sub>と</sub>は

法<sub>名</sub>を<sub>授</sub>て<sub>念</sub>信<sub>と</sub>ぞ<sub>也</sub> 此<sub>石</sub>の<sub>道</sub>俗<sub>聖</sub>人<sub>の</sub>来<sub>徳</sub>を<sub>慕</sub>

は<sub>法</sub>は<sub>入</sub>り<sub>て</sub>室<sub>は</sub>群<sub>衆</sub> 河<sub>津</sub>教<sub>化</sub>を<sub>教</sub>へ<sub>け</sub>は<sub>即</sub>教<sub>日</sub>河<sub>津</sub>苗<sub>ま</sub>

しく<sub>日</sub>は<sub>河</sub>化<sub>益</sub>は<sub>り</sub>ま<sub>り</sub>室<sub>は</sub>抄<sub>ひ</sub>念<sub>信</sub>一<sub>と</sub>と<sub>造</sub>臣<sub>永</sub>河<sub>田</sub>

跡<sub>と</sub>也<sub>は</sub>今<sub>は</sub>六<sub>百</sub>年<sub>は</sub>ま<sub>り</sub>と<sub>も</sub>曾<sub>て</sub>退<sub>將</sub>なり 靈

場<sub>あり</sub> ○當<sub>寺</sub>第<sub>一</sub>の<sub>靈</sub>宝<sub>法</sub>院<sub>上</sub>人<sub>真</sub>教

河<sub>津</sub>教<sub>所</sub>小<sub>志</sub>也<sub>は</sub>河<sub>津</sub>教<sub>所</sub>外<sub>に</sub>河<sub>津</sub>お<sub>の</sub>也<sub>の</sub> 靈<sub>釋</sub>集

河<sub>津</sub>教<sub>所</sub>の<sub>傍</sub>に<sub>今</sub>勢<sub>州</sub>一<sub>河</sub>田<sub>の</sub>室<sub>は</sub>は<sub>り</sub>と<sub>も</sub>

其<sub>外</sub>什<sub>宝</sub>院<sub>多</sub>し<sub>れ</sub>ん<sub>を</sub>略<sub>し</sub>

○桑<sub>子</sub>村<sub>より</sub>松<sub>の</sub>河<sub>田</sub>は<sub>門</sub>は<sub>十六</sub>七<sub>丁</sub>なり<sub>安</sub>靜<sub>と</sub>る<sub>石</sub>あり<sub>念</sub>信<sub>房</sub>の<sub>舎</sub>

兄<sub>安</sub>友<sub>禮</sub>守<sub>の</sub>城<sub>跡</sub>あり<sub>禮</sub>院<sub>は</sub>念<sub>信</sub>房<sub>より</sub>小<sub>聖</sub>人<sub>は</sub>依<sub>ル</sub>河<sub>津</sub>子<sub>と</sub>

知<sub>り</sub>因<sub>若</sub>と<sub>号</sub>し<sub>る</sub>が<sub>曾</sub>て<sub>建</sub>長<sub>寺</sub>中<sub>上</sub>浩<sub>して</sub>聖<sub>人</sub>は<sub>河</sub>真<sub>教</sub>と<sub>言</sub>は<sub>れ</sub>り

則<sub>朝</sub>因<sub>法</sub>眼<sub>を</sub>命<sub>つ</sub>て<sub>る</sub>を<sub>法</sub>の<sub>自</sub>ら<sub>河</sub>裏<sub>書</sub>の<sub>河</sub>津<sub>苗</sub>河<sub>津</sub>教<sub>所</sub>に<sub>は</sub>し<sub>り</sub>

抄<sub>紙</sub>に<sub>は</sub>り<sub>て</sub>因<sub>若</sub>と<sub>号</sub>し<sub>る</sub>を<sub>法</sub>の<sub>自</sub>ら<sub>河</sub>裏<sub>書</sub>の<sub>河</sub>津<sub>苗</sub>河<sub>津</sub>教<sub>所</sub>に<sub>は</sub>し<sub>り</sub>

教<sub>を</sub>世<sub>に</sub>安<sub>釋</sub>の<sub>河</sub>津<sub>教</sub>と<sub>り</sub>其<sub>後</sub>長<sub>湫</sub>河<sub>津</sub>教<sub>所</sub>と<sub>傳</sub>ふ<sub>る</sub>が<sub>實</sub>如<sub>上</sub>人<sub>の</sub>河<sub>津</sub>教<sub>所</sub>

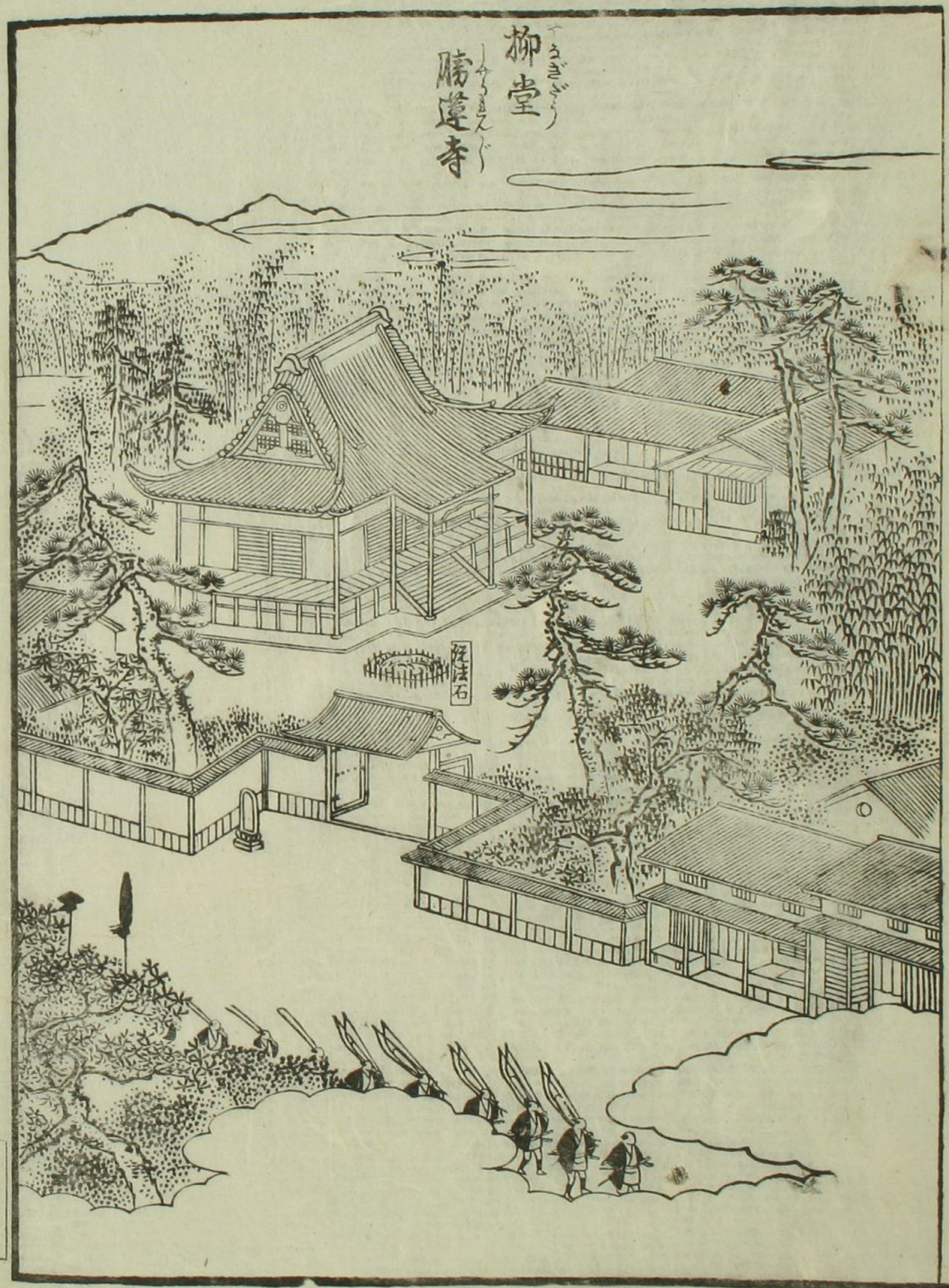
寺<sub>より</sub>河<sub>津</sub>山<sub>居</sub>る<sub>河</sub>津<sub>本</sub>廟<sub>の</sub>室<sub>は</sub>は<sub>り</sub>と<sub>も</sub>安<sub>靜</sub>は<sub>其</sub>其<sub>法</sub>の<sub>法</sub>

柳堂勝蓮寺

東<sub>流</sub> 日<sub>國</sub>海<sub>部</sub>國<sub>修</sub>橋<sub>西</sub>夫<sub>地</sub>名<sub>あり</sub>



柳堂  
勝蓮寺



高祖聖人三七日の間御勅化はし終ひる芳趾なり ○説法石 聖人御

此石上より此石上より

世に傳へしを 世に傳へしを 世に傳へしを 世に傳へしを 世に傳へしを

此の靈場は 此の靈場は 此の靈場は 此の靈場は 此の靈場は

勅より其名を 勅より其名を 勅より其名を 勅より其名を 勅より其名を

達をこれを柳堂茶師寺とせん 達をこれを柳堂茶師寺とせん 達をこれを柳堂茶師寺とせん

人御年六十三歳にして上洛ありて 人御年六十三歳にして上洛ありて 人御年六十三歳にして上洛ありて

ありて此柳堂より終ひ三七日の間御勅化はし ありて此柳堂より終ひ三七日の間御勅化はし ありて此柳堂より終ひ三七日の間御勅化はし

及び尾州淡州の道俗群衆集りて 及び尾州淡州の道俗群衆集りて 及び尾州淡州の道俗群衆集りて

族た人の其れ風まびくく 族た人の其れ風まびくく 族た人の其れ風まびくく

誠なる宿因合熟の地ありて 誠なる宿因合熟の地ありて 誠なる宿因合熟の地ありて

即當國御化導靈勅後傳の靈場なり

○岡崎十王町之柳堂山西院寺と云ふ此柳堂の別院なり又日本の上は臨勝寺と云ふ

樂命山如意寺

高祖聖人の嫡子閑東六老僧等三荒本源海大徳聖刹の古跡なり

源海上人信姓等々佛光寺の宗たるにせり此寺上人既佛光寺の寺務を了海法  
師より傳へり此の日本國武州荒木村の地にありて一字を造立し臨福寺と号し其後  
高祖を以て當國主本原を別院を攝へ化蓋を多うが御年七十八歳ありて心念の終りを  
終りて或は御年五十八歳ありて終る此後臨福寺の海信海國定遷教密と次第に相違  
多うが教密の付當國中系別院を攝るに終りて彼本原の別院を引移り宗廟聖人の外に  
附り第三代の知藏上人御巡國の如き如き寺と號し終りて終りて當國に終りて

此外什物之れを畧す

照高山願照寺

高祖聖人の真身閑東六老僧等五番茶畑專海法師の閑基なり



専海房の真安二年五月野州高田に於いて聖人の降臨あり竟く  
御弟子より専信房専海と号し聖人常陸給仕の法侶なり

○聖徳太子御本像 聖人 其外宝物教品あり  
御著地あり 秋喜河にせ給ひし御姿を  
画工頼國法眼と命ぜらるるに云はるる

高取専修坊 東流 旧國門郡高取あり

専修坊の當國柳堂に於いて聖人の御勅化ありて歸法得道に

御門後方より即真宗弘真の佛場と號し今も不退轉の御坊なり

○什宝は高祖聖人真頼泥等六字名号蓮如上人虎斑名号と安ん

- 當國名産・雲母・當國名産・名倉産・夫の根・碇石・石貝・
- 雅海蔭・足代紙・石橋・前産白夷・モロコシ・刺・寄居虫・
- 海産腸・芋川温純の在り

尾張國

尾張國は當國幾田明神の御神體ありて同神體の御姿ありて御勅化ありて  
尾張國の御勅化ありて御勅化ありて御勅化ありて御勅化ありて御勅化ありて

羽塚山無量壽寺 東流 智長郡成岩村あり

當寺の岡山吉良了若房の御勅化ありて殿上人なりしが當り

世に厭ふ心滞り終に嘉禎の以雲舟を解してたまさる三河國に漂

泊してありて御柳堂に於いて聖人の御弟子より即真宗弘真と唱

へるが中古成の門より當國に後任に ○宝物教品墨之

小林光明寺 東流 院家 旧國門郡大村あり

仁宝山祇光院と号し四天台に道場ありしが當時佛性法師在五中王の

真宗に降法し中真開山と号し

備し高祖聖人參州桑子村に於いて御勅化ありて世給ふ御附

當寺の住僧佛性法師被りて御勅化ありて聖人その御

奉願一実の天道念佛徒生れ玉極と御教示ありて終に佛性願

二用悟後明く陸喜感嘆のありし聖道難解の法を捨念佛  
 易初の真門に入即浄苑ありて聖人を小林の邑に屈法し  
 登彼浄利益を蒙りてとるん當院ありて小林村ありしと中  
 古當不人後時して安住してあり

西流御坊 御堂十二間に面

东流御坊 御堂十に間又十一間

當御坊の結構うら境域廣くして堂宇山巍然たり御門の六  
 なり系師の本山は法して相讓りて馬場花のうまはと眺茫たり  
 志松乃をばとえさきて森として列をばと遠く相争ふ甚壯觀也

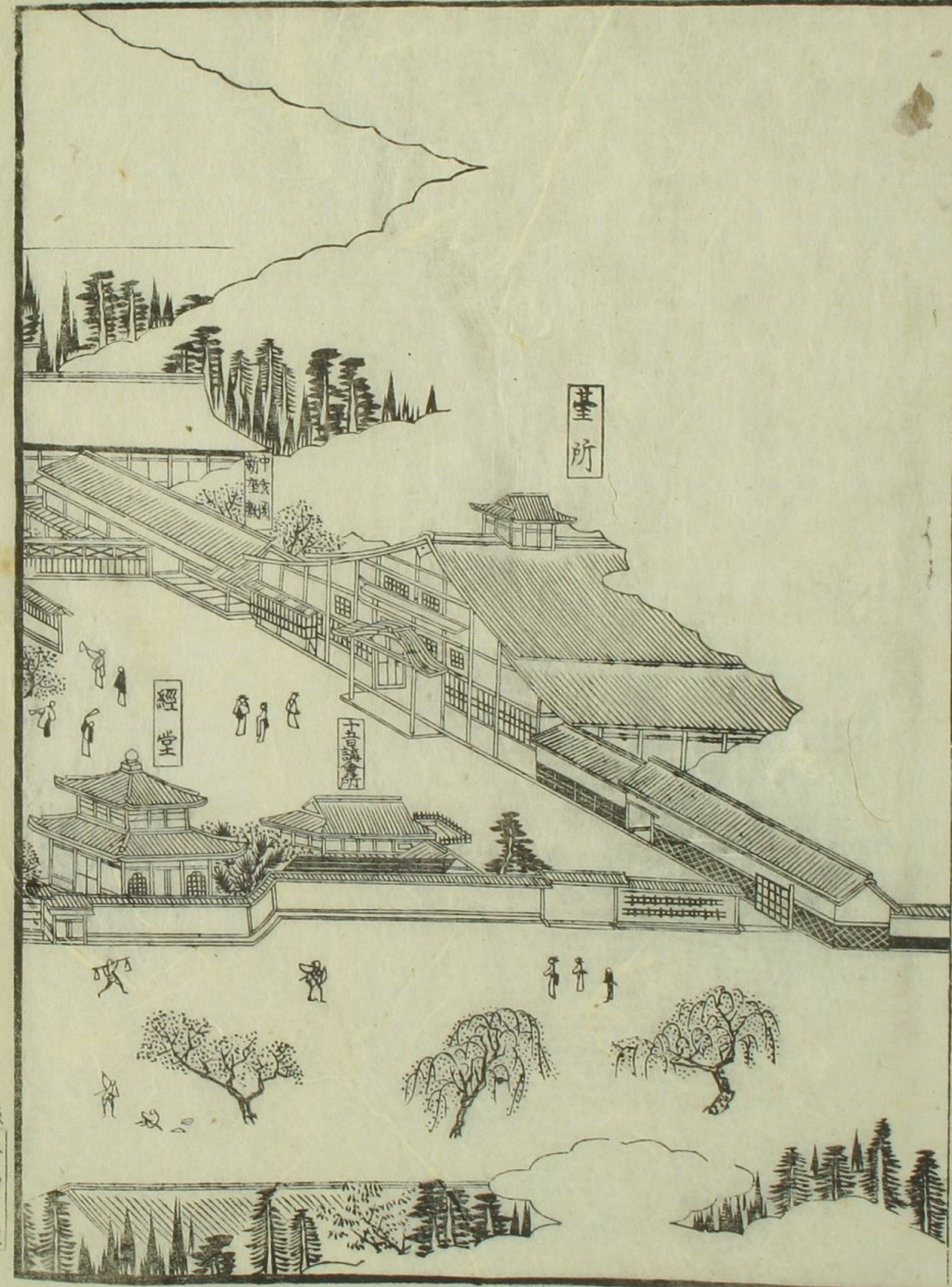
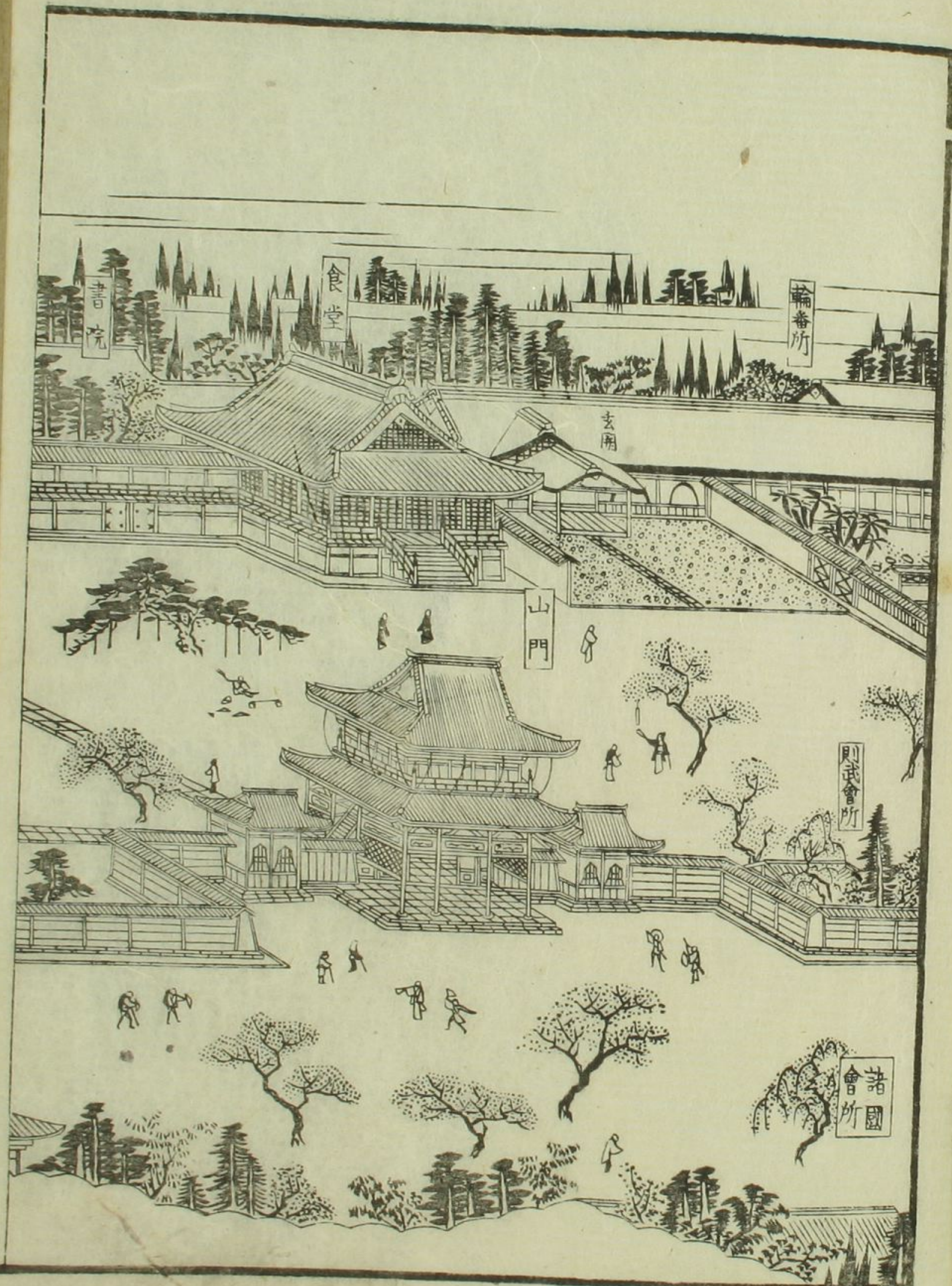
七宝山聖徳寺 東流院表 日國名流屋七間所あり

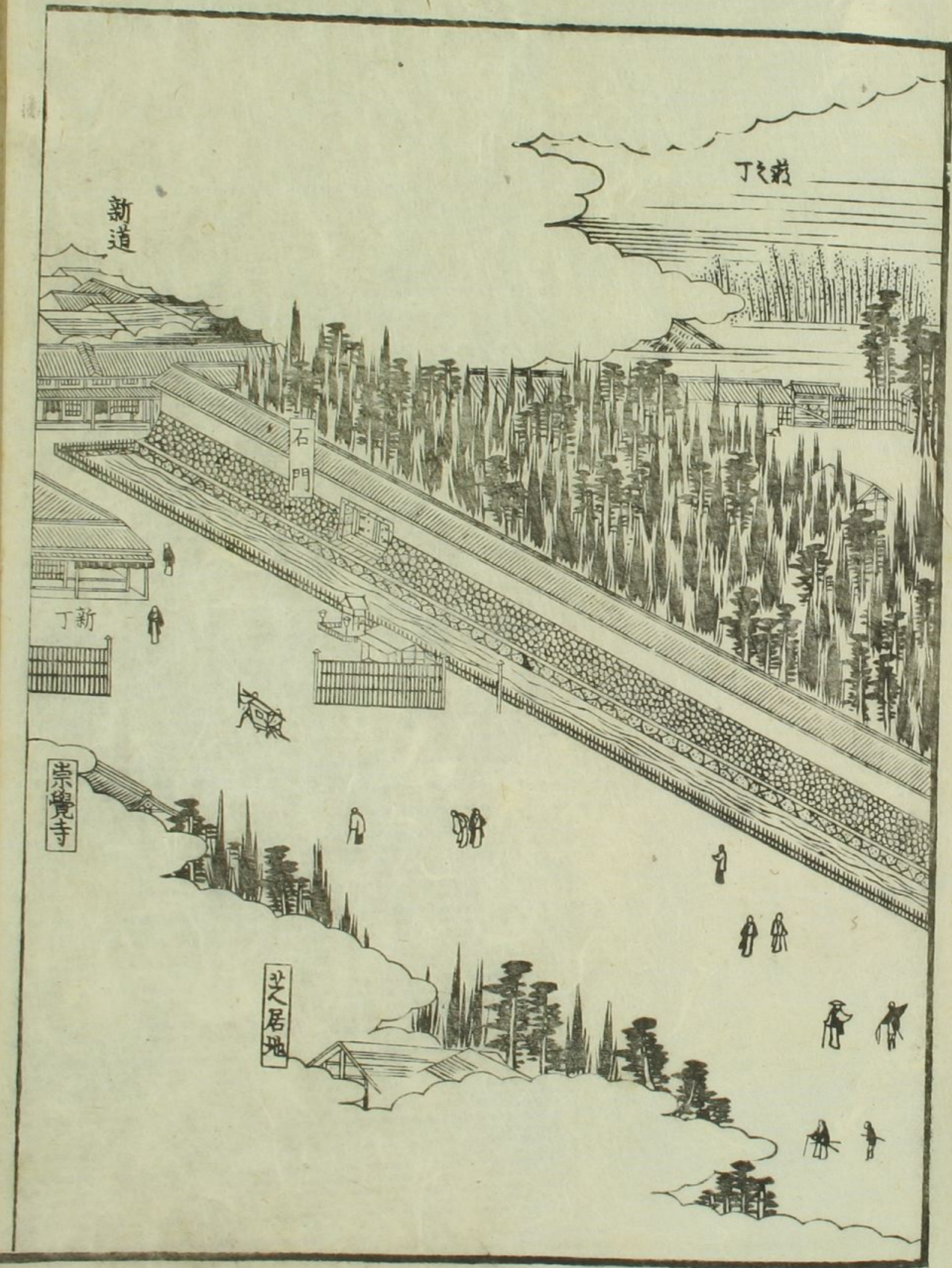
當寺の高祖親法皇聖人送像宝鏡の靈跡にして上足閑若法

尾張國東本願寺圖

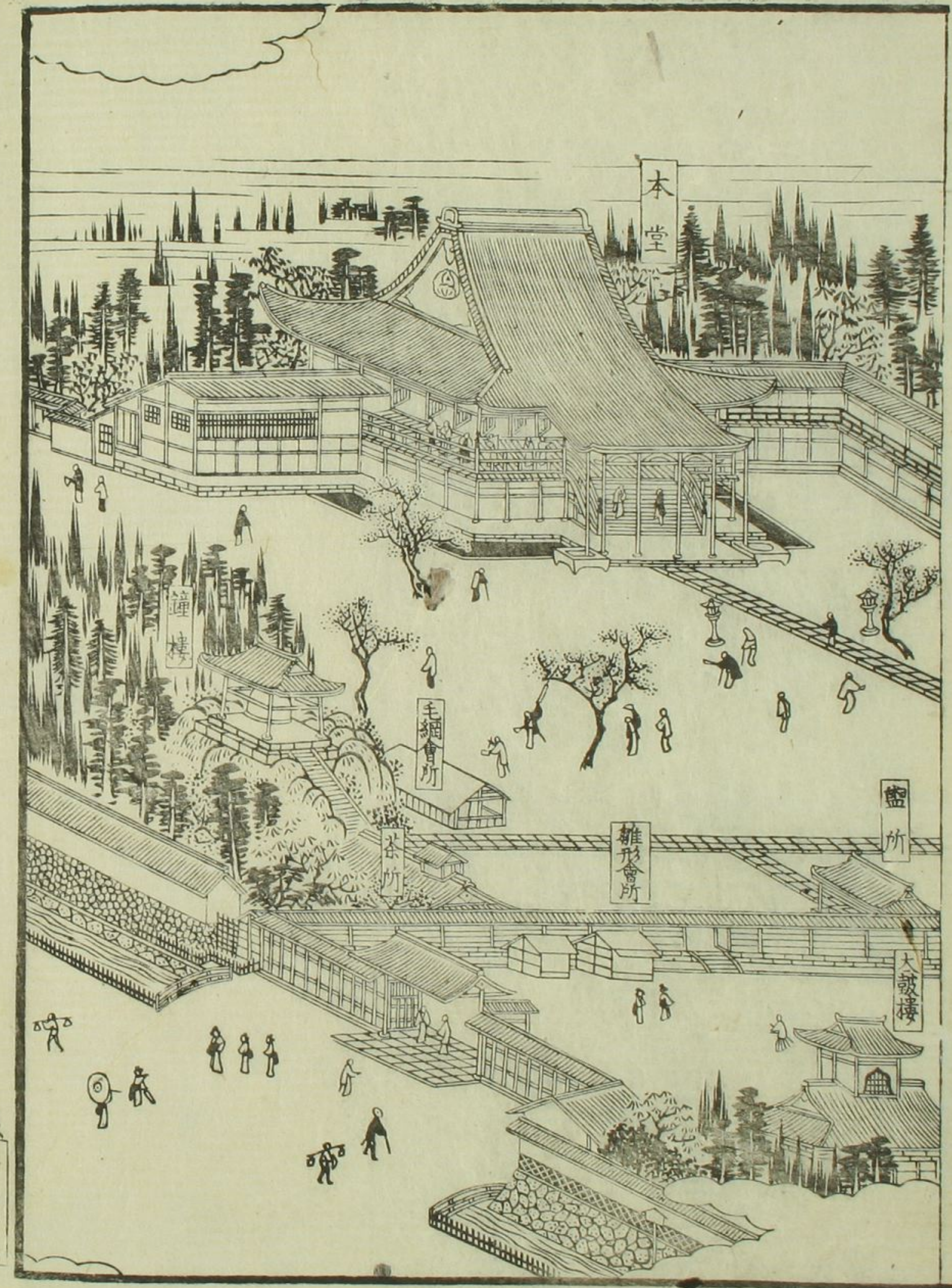
文化六年己巳春  
北亭墨僊應需寫







丁新

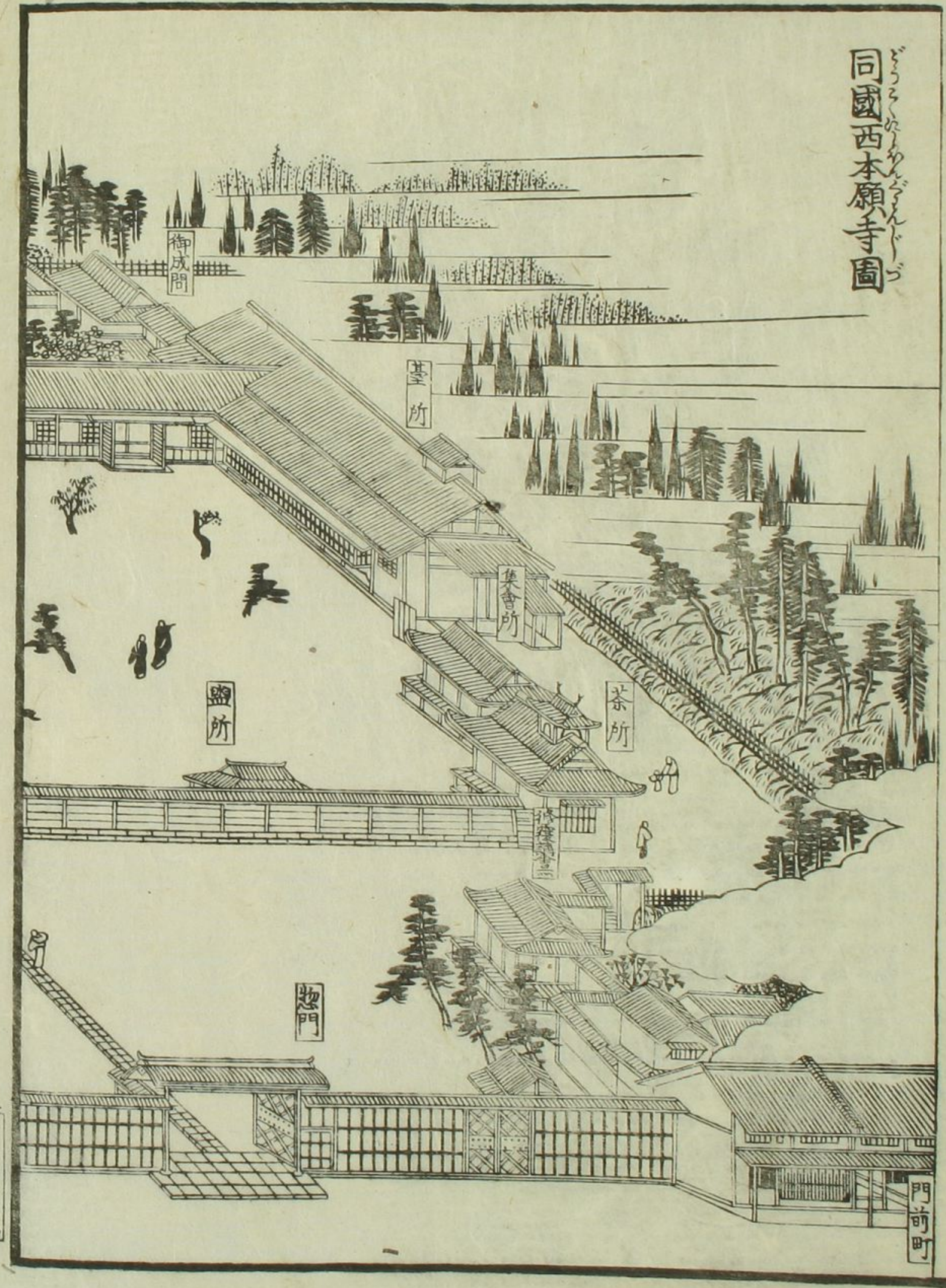


後五ノ四十八



文化六年春  
小寺長伯寫

同國西本願寺圖



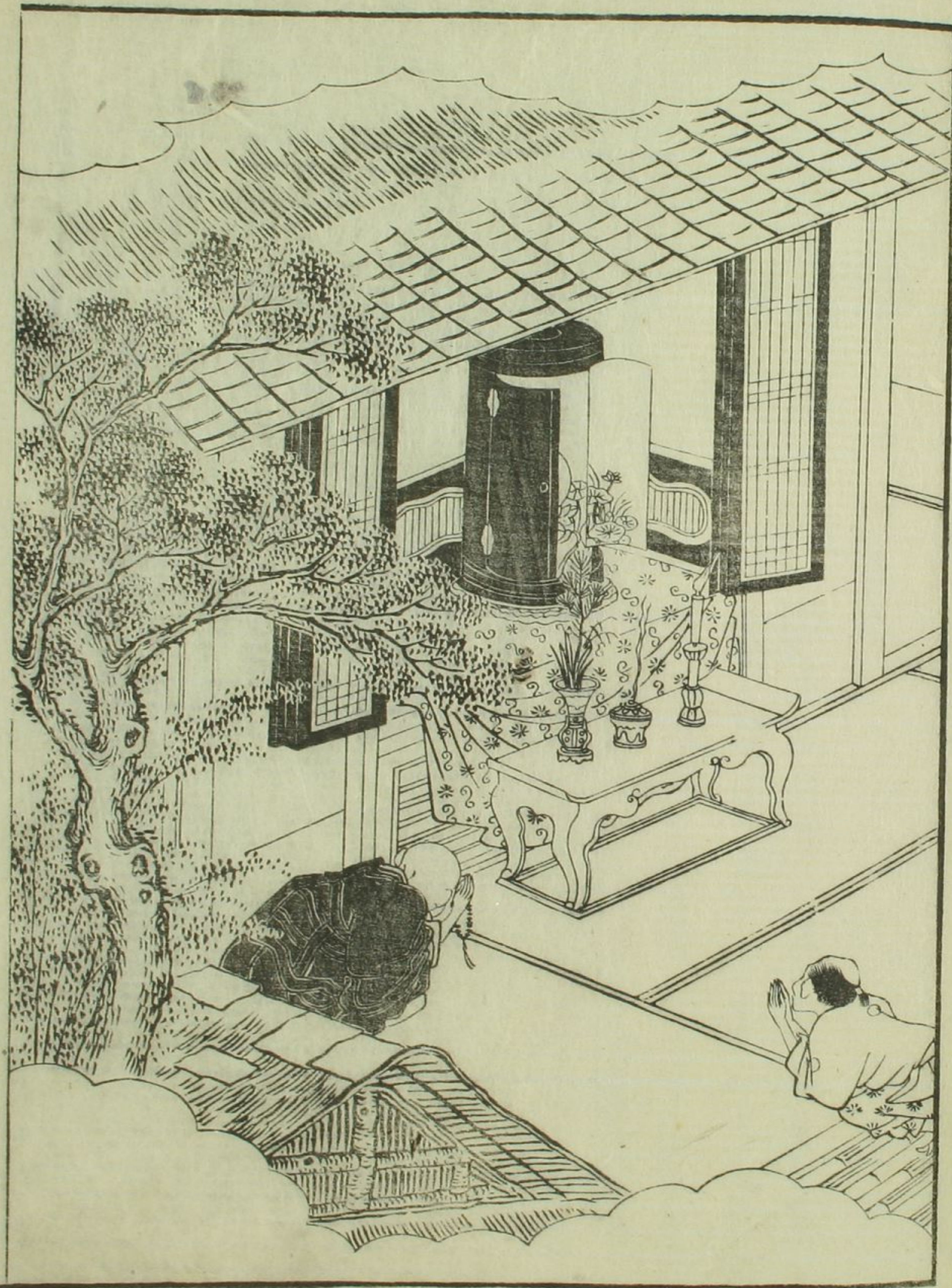
後五ノ四十九

師の用基用基のより○本堂十回余本多阿弥陀如来自他七

閑若法師のいと源氏の枝族して小笠原左衛門尉長頼とて甲斐  
國を知り其性智勇をお兼文武のよろた長疎せり然る小長頼を  
うごろ小無常將妻のりつとまを親く世上榮利の文を厭ひ類又  
浮沈を適まんとてこれいも有縁の知識とていひる小はらく  
一々年月を送りたり爰高祖聖人相州國府津よはして専  
化蓋はし給ひたる小長頼かくとまより直又故郷をよりとて急ぎ聖人  
の禪室又乃の禱で日以素願の真実を聖人よ若希也又聖人その志  
の深きと感く他力真宗此安心をやくこまやう小津教寺はし給ひ長頼  
願一念佛命の願心を敬し速又信心堅固の念佛者とあり即利發  
して法号を授り閑若房とぞやたり是よりして聖人よ常陸給仕ある  
りり既又中津藩の御時供奉にあらざりまはせり東海諸國さ

經て竟嘉禎元年尾張國羽栗郡大浦今尾張國屬とあるに

か當るに真言宗此古院あり經聖人即これに入せ給ひ此に於て悟  
勅化利益の給ひたる小遠近の道俗市のどく群集一隣里の男女  
山のどくと糸泊一各圓法隆喜せ給とるはし既より聖人  
當るに御出立はし給ふ彼御化蓋を費あり面く我もくと地集  
御名蹟を押しと事し世何とぞ聖人都へ登り給りんとするに非是の御身  
み御一人當るにぞめ給りしと一日は歎き給ひしに聖人も衆心を破ん  
みを悟り給ひ止とをたげて閑若よかくと命じ給ふ爰よ押ひて閑若房  
も御別を憐むなるとふも師命のまかしく則當るに歩りて又弘法  
の基趾を用きこれを聖徳寺と号し專修の志佛と專弘通大也他  
力の傳燈をりやして竟弘安二年辛巳三月に日寂を去り給ふと云  
中古尾州中津郡富田寺と稱し後又當るに給じて万代不易の靈場



聖人精作と  
 徒面又寓して  
 以て頂相を  
 祝し徒死に  
 与へく記念  
 亡し終る





瀧りて又う雅らと七人の道行命と捨てぬと聖人を報せ糸  
せらふ小聖人其志の源と感あひ大浦の御滝面のる彼七人の日影(吾名  
号と書置)とあひし其子孫等付まじこれと宗教一堂宇とつくた  
御真等の名号をて本ると以さきは先づの七門後の御踏の部也  
と七御部七箇寺とは総来とるる也  
又河内九門後と御踏九箇寺ありこれに御聖那の内  
本居本流より入地は聖人を御法はしなり御教化義  
河内流より入地は聖人の御竹が泉の御坊より入地なり

小枝西源寺 東流 日圃日那小枝村あり

いふ人の日圃岩倉より真言宗の寺とて聖人の徳化は陸の真宗の門  
又入より中古古交後略とて先又濃部七箇寺の一寺なり

河内勝宝寺 東流 日圃河内あり

尚寺も日圃濃部七箇の其一なり

日比押運若寺 東流 日圃日那日比押村あり

これ又濃部七寺の角より推古天皇の徳化は陸の真宗の門  
本居より尚寺(入)とせ給ひしが附の信侶聞法を喜して御并ふとぬ  
聖人教の御踏を以て御案内をぞぬとるとなん

○尚寺は古く本流を信と信持せり信人三聖人の御真并二十に車并十八常州大  
曾根常福寺の御基入信房聖人御降臨の御法成るひ尚寺を本居とて  
奉病廢して終らばを附の信侶其肖像を刻とるるなりとて或は流又國あり  
一人の老女あり真宗並二の信者なりしが聖人の御法を志ひたり尚寺は本  
て信記せりこれ其本流なりと何とて是なるを志ひたり

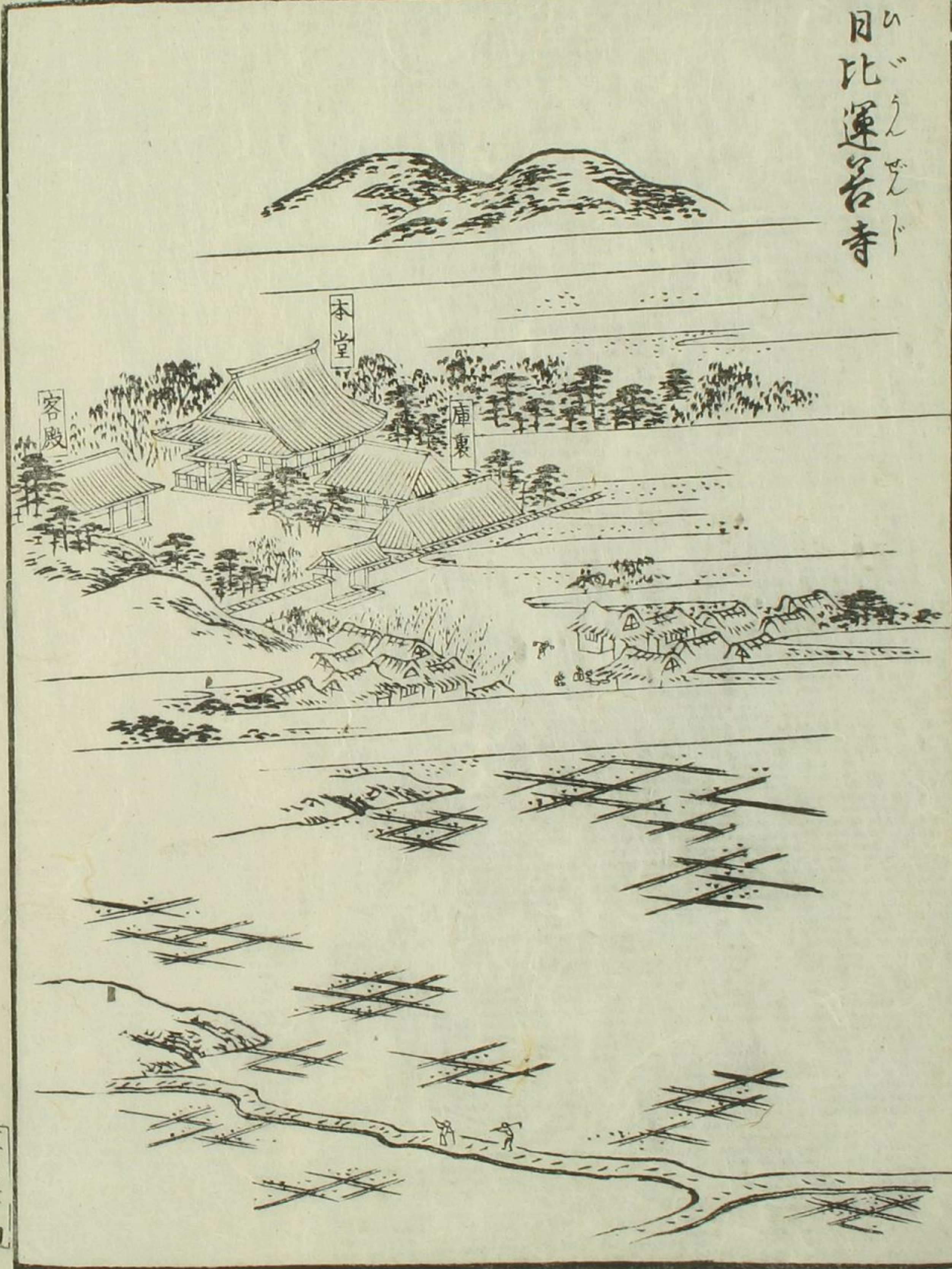
河内崇泉寺 東流 日圃日那大毛あり

古い教海房とるる河内九門後の一なり

○実証記云云尾州九門後(蓮如上人より祖の御教御傳授御書と賜じと  
て聖人御真宗記念の尊号とて九門後の寺院をのここれを要する

河内長龍寺 東流 日圃河内あり

日比運若寺



古(い)専修房と号せりこれ又河野九門後の一寺なり

奥村了専寺 東流 日國中津郡奥村より

当寺ハ濃部七箇寺の内の一院なり

西室寺 東流 日石より

当寺右より七箇寺の其一なり

河野妙性坊 東流 日國中津郡小方より

河野九門後の其一なり当寺の崩基正園房よりなる信性永田主計久秀則の息武部卿秀実入るせし法号とぞ

- 当園の名産・綿・蓼玉・蒲黄・大根
- ・名古登藤奥・宮杖燈・南方袴・蒲籠治步物・注冊政常小刀
- 日鳴海氏雲・藤氏治東之守礼

日鳴海氏雲  
藤氏治東之守礼

義濃國

四事記曰美濃或曰三野と云出國を指す美濃國が所なりと云る處に三ツあり云ふ  
り或は美濃國に赤田知多と云ふ縣を置きて又三國を以て美濃と云ふなり

河野西德寺

東流 葉栗郡國成寺村あり

古く西方坊と号せり是又河野九門後の内なりて尾州六坊の其一と云

河野稱名寺

東流 日國日郡中野村あり

齒寺又九門後の其一なり

○齒石より水三丁なり是本流河野の古跡なり

河野西入坊

東流 日國日郡中野村あり

日九門後の内なり齒坊十七世妙念なる僧河野九門後再真の人也  
後其隱居地を妙念寺と号しと云

河野安樂寺

西流 日石佐郡あり

日九門後の内なり

河野尊光寺

西流 日國日郡下印食あり

又光尊坊とも稱し九門後の一寺なり

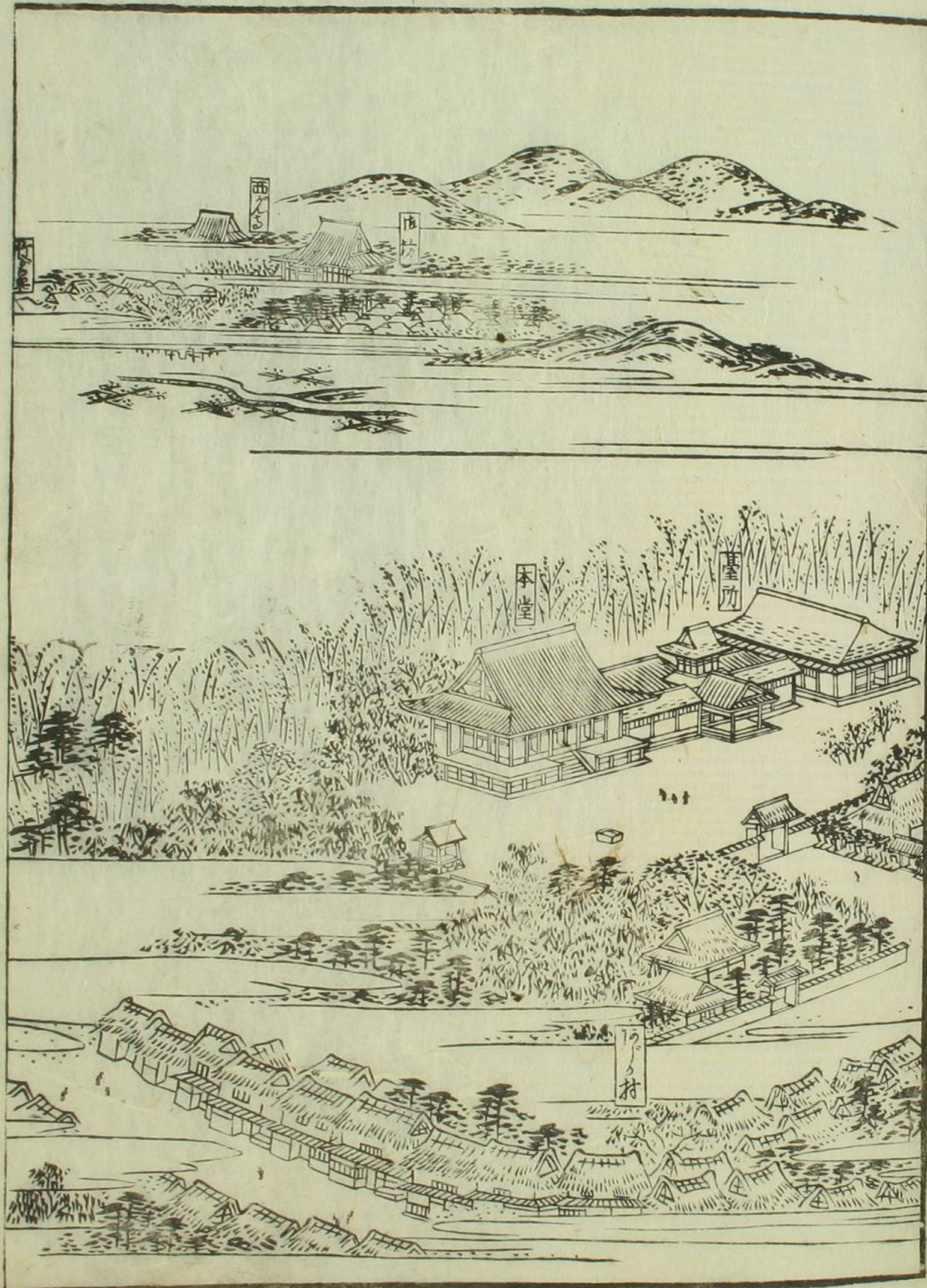
淡谷西方寺

東流 日日郡是近あり

高祖聖人直牙西園坊の芳趾はして尾州六坊の其一なり○本尊阿

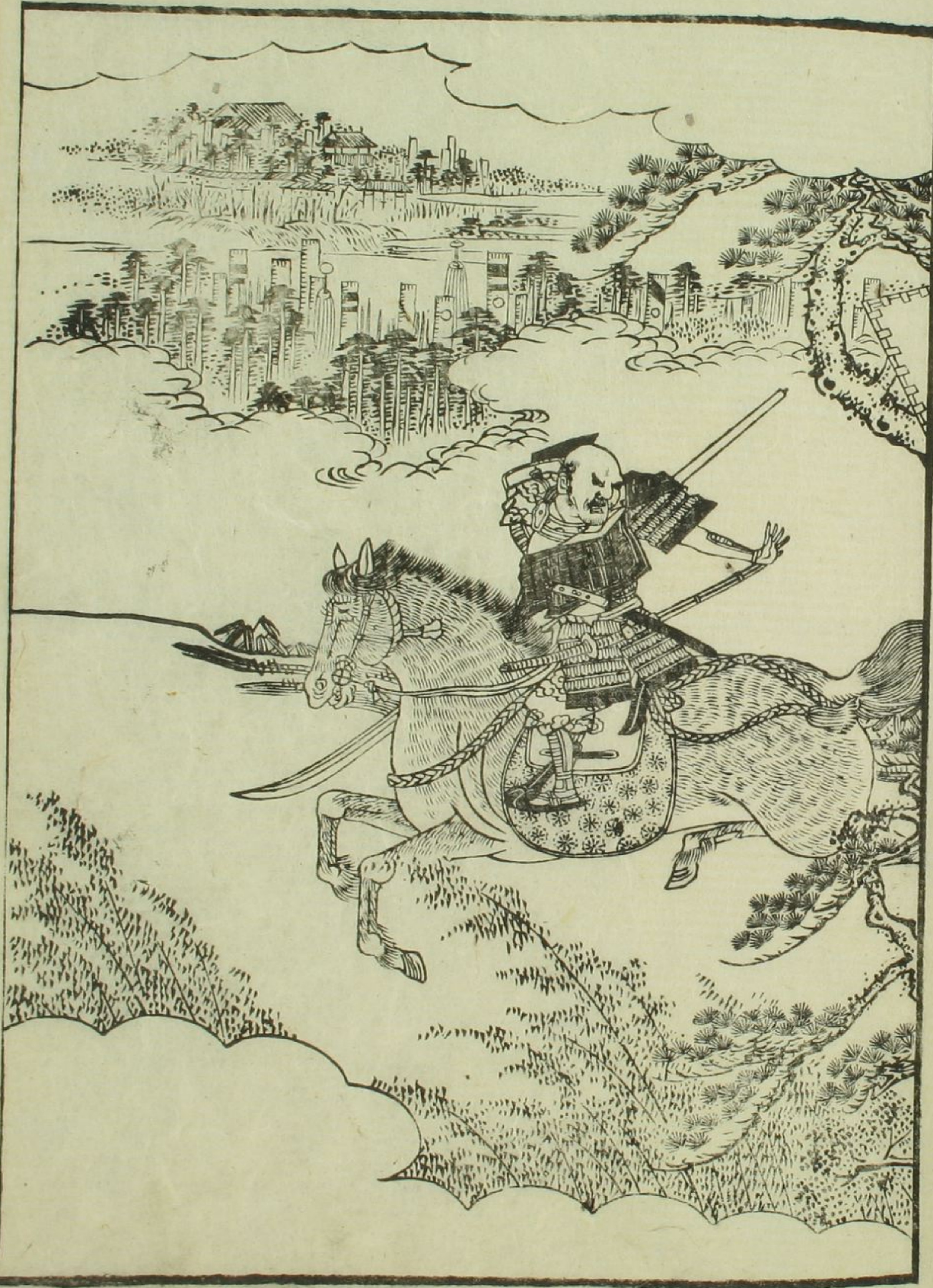
孫陀如來 聖徳太子  
の御地

西園坊の淡谷七郎が末孫淡谷左衛門と云尾州中野村の僧人なりしが  
聖人參州矣地を以て教傳し終つて法を傳へて西園と号し安んずるを  
承りて法名を授けて西園と号し安んずるを創設し其を  
西方寺と稱せりかくて教代お續ありしが天正の以平相繼田信長が坂石  
山の御本坊を仇し既合致し及びく御當時の僧祐慶房也と云  
より連門後をかり置り於耐恩の死せどんが御恩徳を報ひせんと  
と云日又終つて纏つけ御味方より專ら耐恩の死と云しけり



足道西方寺  
 竹鼻西岸寺





西方寺祐斐門後  
 本引率して平相  
 信長が兵と石山  
 防



信長を大に勝り悪き門後をうらまひらるゝ即中野の地改加賀守  
弥八に命じて西方寺と稱しむこはよらるゝ弥八と率と引率して中野村  
の地を佛殿僧坊築きし靈宝什物もあつて悉く破却しとて  
教代連綿しと相續しとる布令の地一時は齋と稱しとるぞうたて  
されば祐慶佛恩と改めいふべき心やいふべきことども時勢といふ  
とるのうゝ暴虐と避て當りたり再び精舎を建立し安んじ  
教如上人其志を憂勞せんをばしとる書をなされ祐慶坊と稱し  
たるとる人則これを洞の洞書と稱し今も當寺は傳來せりまの  
とるに祐慶を始り門後の面く必死のとるべきをいふ人る祖  
聖人花との洞教を免せらばしとるや

○當寺より南より門より大浦と云ふ名ありこれに聖人洞教地あり是洞四  
縣とも教云大浦と尾州に屬し

寺田西岸寺 東流 日 日那竹が裏あり

足近西方寺と日系ありと御坊石とを

河野專福寺 東流 日石あり

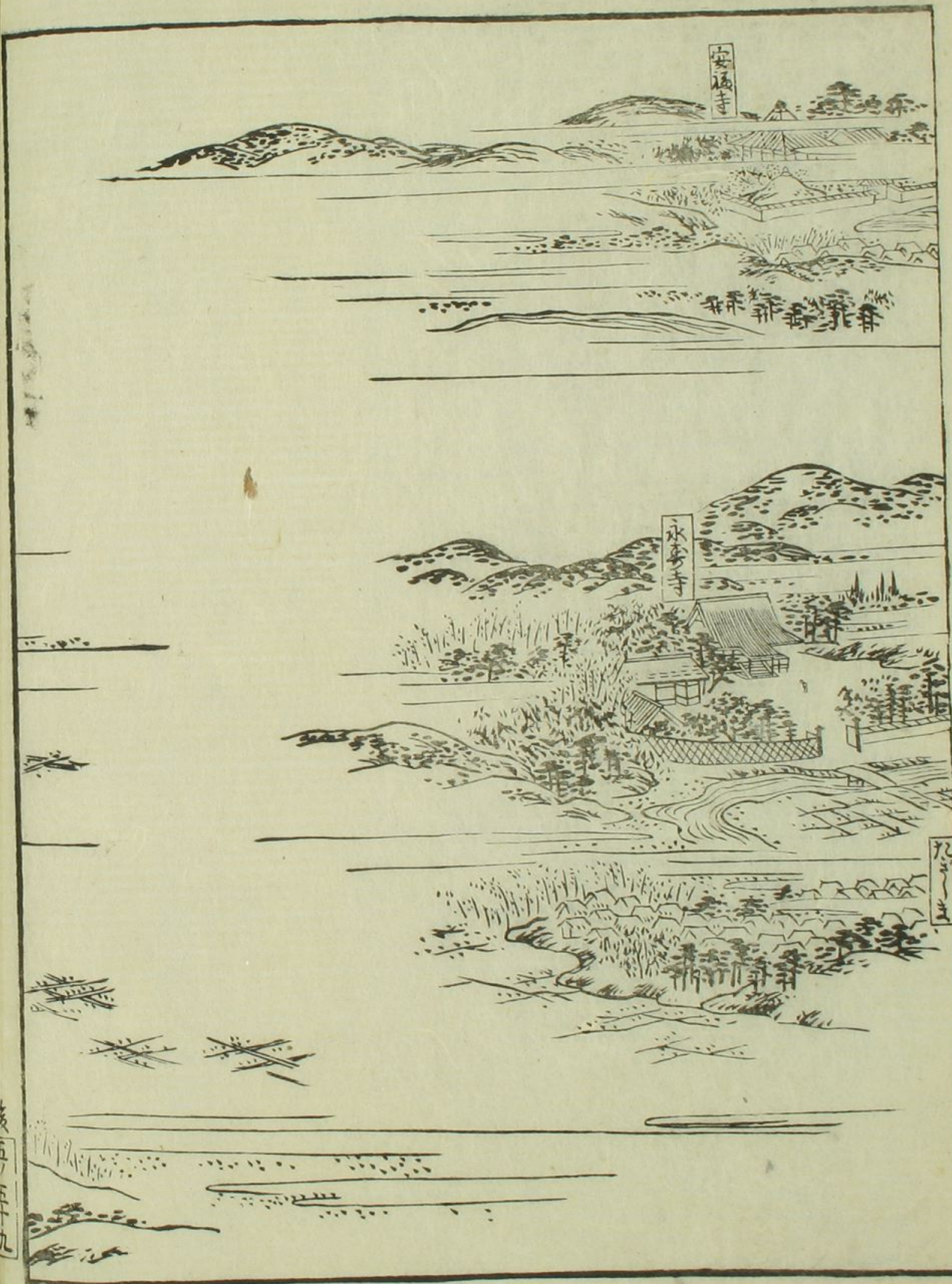
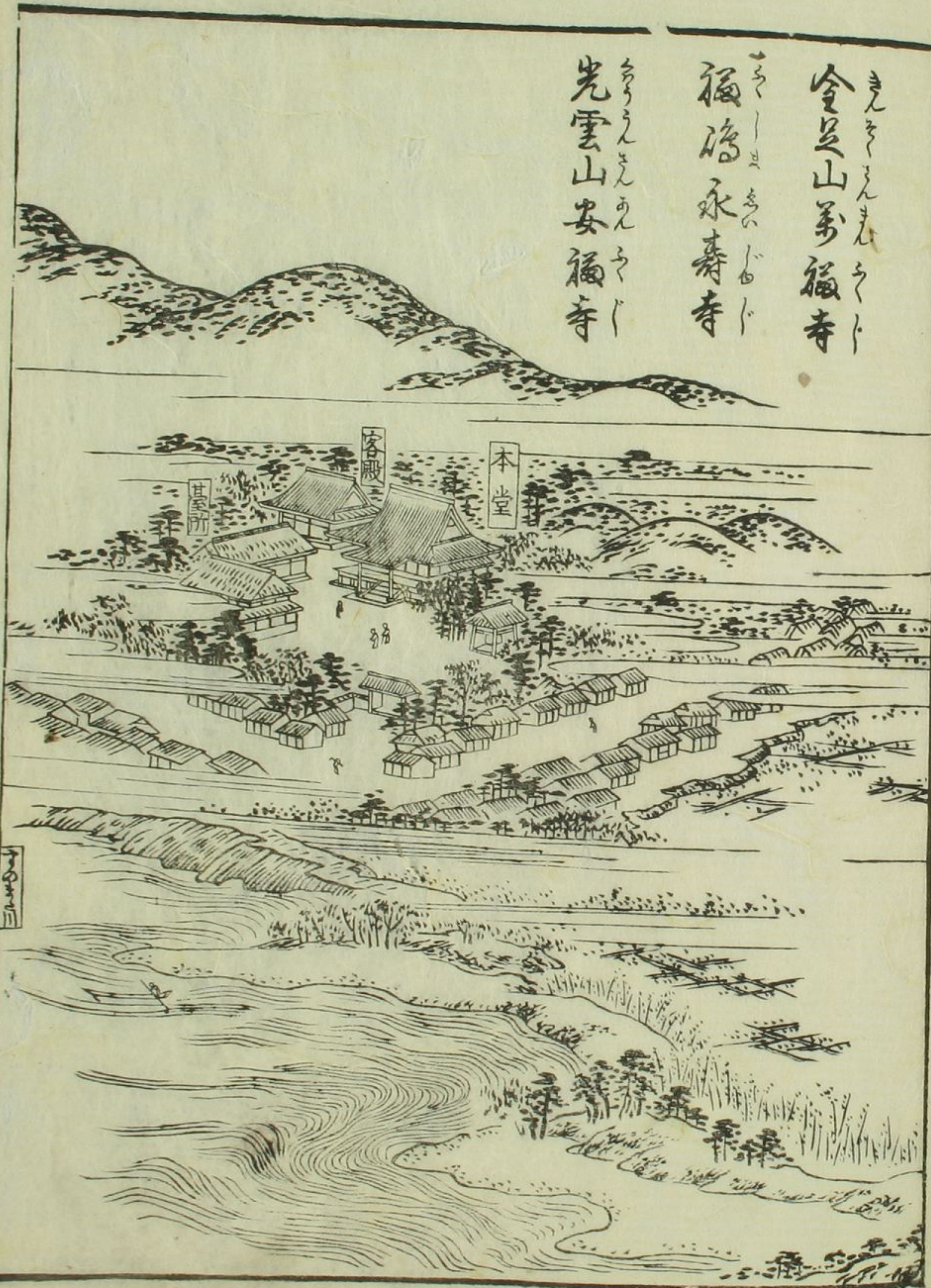
河野九門後の一院あり是又御坊石にして石佛本座御本座の  
御坊と稱しとるはとるはらこれなり

金足山系福寺 東流 日圓安八那聖候あり

慈谷院と号し聖人の後身祐澄法師の用基なり○本堂十二間  
に面本堂如来本像春日の能塔殿二房あり

祐澄法師の俗姓を尋る小慈谷入道蓮生房の族歎して慈谷密三  
と稱し當國足近の住人なり嘗て高祖聖人尾州大浦に母あり  
漸教化の初圓法の蓋と稱し終は後身と稱し其後一字を建匡  
これを満福寺と稱し專ら當國は弘法一願る化益の勞と稱せり  
中古當り後傳し嗣子お承して今も退治はしと云

光雲山安福寺  
 福壽永壽寺  
 金足山多福寺



福流永壽寺

東流 日圓寺養和寺養谷たり

尚奇なりと天台因宗の佛園たりしを高祖聖人常陸の河分又  
教信法師中真因基とししと真宗と如せり ○奉崇本寺阿彌陀

如來 東心悟 都所他

教信房より以の尚園福流の人も有り信性を行桐丸湯門教宗  
と号せり壯年の次第解又出て官路に於て武藝を以て名を馳せし  
御齡かたより又つけ善提乃心類はしと終に兼門の身と如く福流  
陽又とまぬる一日聖人因崎の堂より吉水の禪房より通ひ終に  
予不思議又値遇はしなりこれより常陸給仕して専修念佛の法と交  
得し則法名を以て換り尚流五三の信者とぞ知り又より猶も聖人計ら  
はし遠く越の國へ移りて來りしが教信既又七旬のよりいと經  
て迎へ遠國の供奉かひがくいと聖人の御別と瓜かはしと紅淚教宗

よ及びたる耐高祖其老實の志を感じ移し自ら筆を以て  
御教を撰り教信たまひしうが教信はむせびながら大さ小  
これを教ひ御記念を以て戴きやがて本國徳州より尚布り  
天台宗の禿區のみつと改めて真宗の道場とし彼教像を安置しなり  
月夜教恭なりと偏に教信の稱名をぞよりびつらかくて嗣に相義  
一并七世室信房の御よりてとせ流はし養僕川瀨より月るがうちみ  
氏屋佛園のよりらるひいと水産に及せりつら又の間に  
相顧るふいとま何らばいんや其他とや我きたよと遊まざりて是と遊  
が相事とく什物を懸候もふとて彼教像よりく流はし移しける  
よや曾く見よせ流りば僧尼信をば下免門後の面くこの名園  
のよりらるをさまぐ揺り求むといふも又其甲斐なく流はし  
三とせれ月日を送りたる小室よりきなるあり彼養僕川の流淵





名号<sup>なごう</sup>神<sup>かみ</sup>あり  
 異<sup>い</sup>光<sup>みつ</sup>と淵<sup>ふち</sup>を  
 又<sup>また</sup>あつて人<sup>ひと</sup>を  
 一<sup>ひと</sup>て不<sup>ふ</sup>互<sup>たご</sup>と  
 知<sup>し</sup>しむ

より先物出く日暮に止り里人多き小を奇く巻簡て水練の  
若を以て彼淵底採りしむる小淵ありて二ツの朽破きなる管と  
上げりこれを見らる小箱の表は押さるくして永壽寺の文字傳り  
抄りしふ急ぎ出寺は持書内これを見らる信大さ小教び是を  
年来見なる河教の管とく直に内を開き見てあれが三ツせがる  
水底よりづり出りしむるれが巻く括されり不思議や河教の  
厥よりとく依然として換り終りぬしきまを抄しきりしむる  
奇美のそのいをぬとる感涙をぞ催しきり家よ抄ひて空信山科  
の本山よ抄し河教は体しうは実如上人甚驚嘆はしく其る  
重た方りし則ち新なる縮は河教を挿表はきりびやう小命は  
又河教河教書名は終りきりきり此を以て切むる河教と稱  
しむる永く出寺の靈室とはなりとる

光雲山安福寺

東流 日圓不破郡室田にあり

高祖聖人上足慶西房中真用山より一は安嘉部寺と稱せり○

本堂阿彌陀如来と安ん 多基菩薩

此は出寺の素歴を尋らるは若くは基菩薩の用闌りて河内内國  
安嘉部玉手山に犯し「畿内に十九院の院あり」が建長年中廢  
退は及び靈區立ありそんと終り其以て孫王經基の二男後  
に後満季の二男安後満則より十一世の孫多田左衛門尉光  
雲といへる若河州に知りしが於聖跡の草莽に埋まんや  
を歎き知識を求めく真後せんとき常と是を教ひたるが竊に  
聖人の高德と及びしうは直に系師を奉門て拜謁し素懐  
の旨をのべたる小聖人其志の厚きを感得させ終り即河内  
真圖の慶西房 俗姓は野州志圖の孫と大内國初に命じてこれを屬せり

此の地は妙い慶西彼地よりなりともやう小堂宇を營築他  
か念佛を弘通専ら化益何れもなき未だなくもあつて  
故に一大佛場を再真せりかほ「わふ多田氏の裔く真宗の功  
徳慶ちなるゆゑと信し終に世務を息し譲り自慶西  
房の後弟より光雲房信西と号し即當寺と相兼して第一  
代の傳燈をうやうせり其後文明八年當寺第六世法西の附  
又玉門と蓮如上人の命よりて當寺に基趾を移す  
二寺と蓮上玉手山安福寺  
と号し法去まの地蓮と名す ○當寺の什物は源教光大江山惡露退治の  
附者より禮甲一具を傳來は是即光雲房の曩祖安福後嗣より  
傳來は是より後則これ瀧仲の甥より教光は後弟之よりや  
とせり

○當寺より今傳へたる圓が示す如く二里ありありと折田村妙覺寺より入る  
なり當寺より聖人街真宗の教の信理六卷を傳來は是より

八幡山聖蓮寺

西流 不破郡居蓋郷平舟村あり

當寺は後若真言宗の梵宇なり「が天福年中附の寺務道  
法法師當山の鎮守八幡大菩薩の靈告より高祖聖人を屈法に  
なり圓法の利益を蒙り即弟より是より真宗弘法の  
たし聖人志より當寺を抄して教導何れ世終に靈二區なり

○圓が示すより三里余西にあり近は圓長溪大通寺よりあり西流御坊不  
又百々寺の末寺あり寺勢概にせし門は御連枝達より傳へ給ふとせ  
近は圓の大方なり

○圓が示すより今類より不破の國の古跡あり門の底よりあややと  
うた御方密よりして「法なるをう」教と傳へ給ふとせ「法は」法は  
むけ圓の「兼くそのりけを」この圓屋の「れ」る「く」造り  
うらんど「す」た「る」がやうて此を「を」せ「後」も圓の「名」を「え」り  
給ふ「が」その「教」の「ま」か「ま」は「ら」る「か」ら「心」つ「き」は「ら」  
ぬ

「ふ」た「く」月「を」そ「り」採「板」は「は」く「極」め「せ」る「の」圓「り」

とらん録しこれバそそ所々きりなをうせ終ひきりらんわじり  
 のまをそつらさまをりて其のれを坊をふいふとつ入るかにい  
 づらや秋乃さまそいあ下の人もいんざんばこいととやまの心の  
 ありきよよまをちんらん

○今頃の名は不備英法尾張の國境を採りのがりと称するところなり  
 これまを来るまはははとの里の山を採りて今頃の階堂のま  
 うんと皆名をえんまをりて今頃の採りの清水番場の名をとりて今頃の  
 風采のまをたえんはははと

○當國の名産・繭糸・繭綿・撰糸綿・厚紙・中杉紙・  
 尺長奉書・斐織織・麻地紙・板紙・油石・藍玉・山椒子・  
 根糸・菅代・やぶた・まぬ・島國を根かき・八層絹・  
 根糸・天目とよけ不ようゆき・團小刀・刺刀・危丁・双云・雄鷄布  
 波阜糸・日鶴・雲倭籠・小山鶴等なり

近江國

當國の北に此の山嶽國の部とて寺院の縁起靈物多國の創をて若橋とて出  
 其の縁のてりて採の吹踏の陸ひ此なりとあり

宝満寺

東流院家 今頃より八里豊智川あり

西方寺

佛光寺門内 能知川より二里八幡あり

天祥護法院彌陀寺

八幡より二里本郷あり

近松河坊

西河門内 大は八丁あり

山嶽國

名は日一

山科河舊地

山科あり

遷師河廟

日

西流河坊

日

東流河坊

日

日輝山永福寺

東流 治西より三里余市田あり

攝津國

採の各其況をさく之大方に此國はあはれはつとつとて採の各其況は今採るは採と  
 号を採津の二字をさるりかへ

溝喰佛照寺

西流 山州市田より八里溝喰あり

高祖聖人神足の子二十代軍第三藤原順信大徳順信房信常州守師  
 命を愛く化奪有り是「芳趾なり其弘法の附は當りては隣の道信  
 美妙ともく安んず釋法」利益を蒙る族日くは市とほ「恰も水の里き  
 流るがごとく其法を信し其徳又泥と乞ふ降るとりとの挙て善く  
 づびとれよのく當地及び西海とあると當寺の末院と稱するもの  
 百を以て教ふるありとありや安んず我門の一巨擘と稱はざり

○桑田國のそのと帝王の都一法ありて名區勝系を多く能く中安ん  
 敷と安んず石山河本坊の四趾ありて都下の繁華なりその師に府は勝  
 未封の家形をすし孫清度の郎を蒙るまゝと建するなり余も海内の  
 産物をも運びて日敷の市を以て天下の巧藝者ありまゝと奉りては附  
 教いを受くは安んず掛をりや安んず炊き人々をまゝと備を多し其末の  
 紹緯なるやいさる本として肩お辱し降とお踏するは「安んず天徳と謂へ

河内國

河内國の山外と稱する名あり神武天皇日向の國より赤征したまふに  
 山外と稱する名あり神武天皇日向の國より赤征したまふに  
 山外と稱する名あり神武天皇日向の國より赤征したまふに  
 山外と稱する名あり神武天皇日向の國より赤征したまふに

戸林山尊應寺 西流 後良郡神崎あり

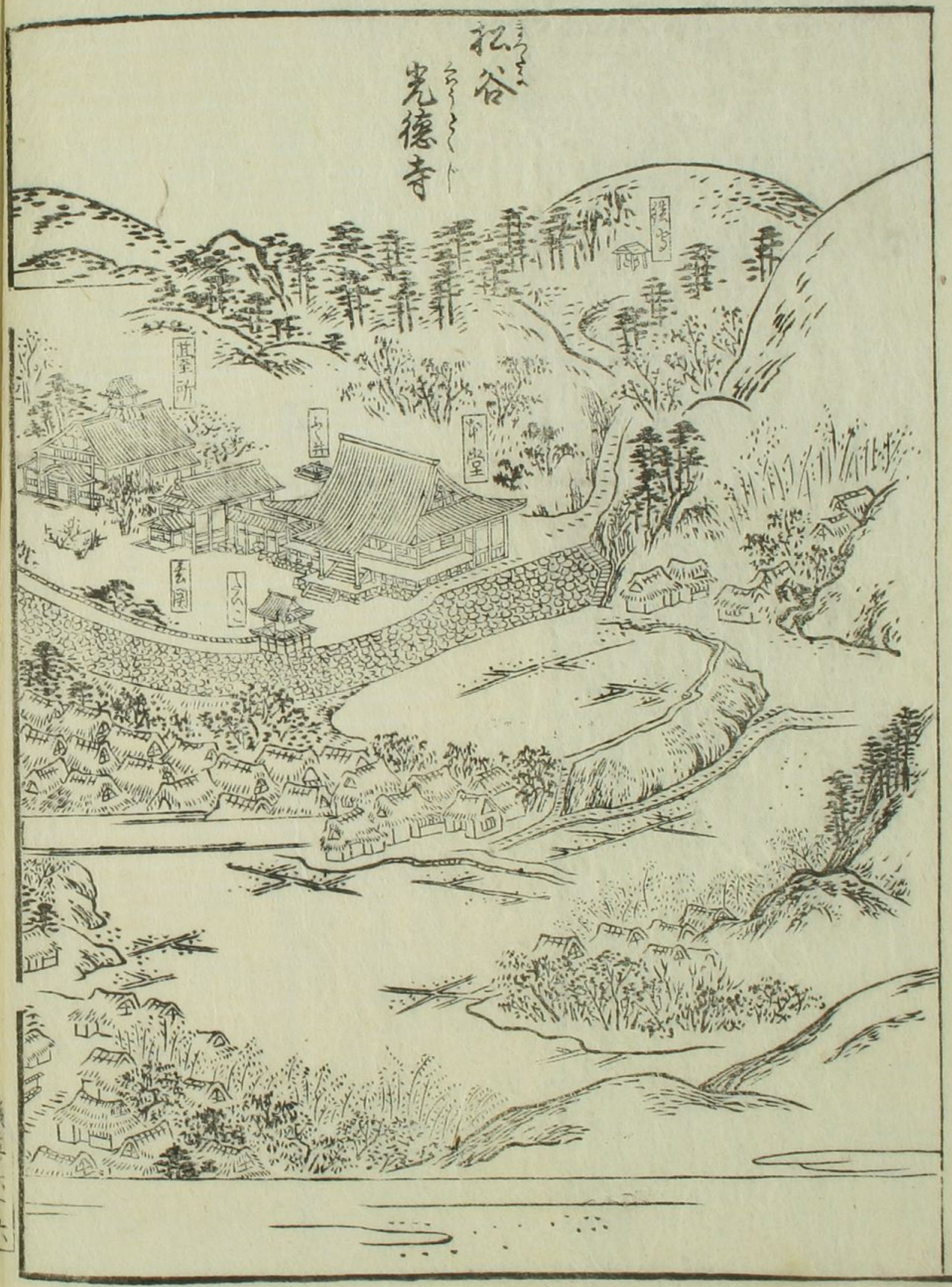
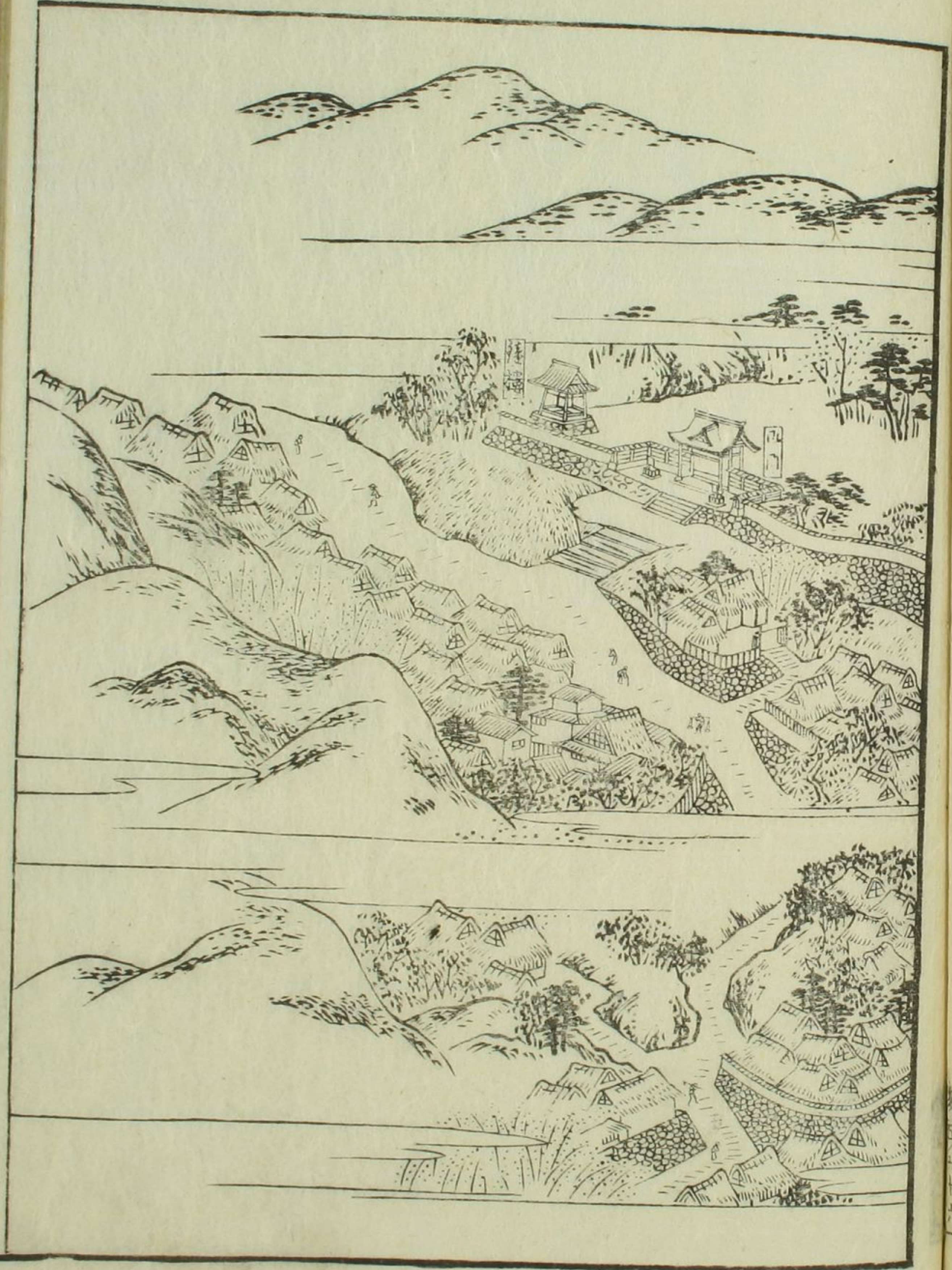
聖人亦門弟二十代軍第二十二戸守唯信法師 唯信房の刺跡常州 師命  
 よのく當寺を開闢し當國を化益あり「遠跡なり嗣は相承して今  
 六百年の星霜を経たり

福山慈願寺 東流院家 日國若に郡八尾の町あり

高祖聖人の嫡弟二十代軍第二十三粟野信教法師の 信教法師の俗信野州  
 開基にして弘法あり「芳趾なり靈室教示略く

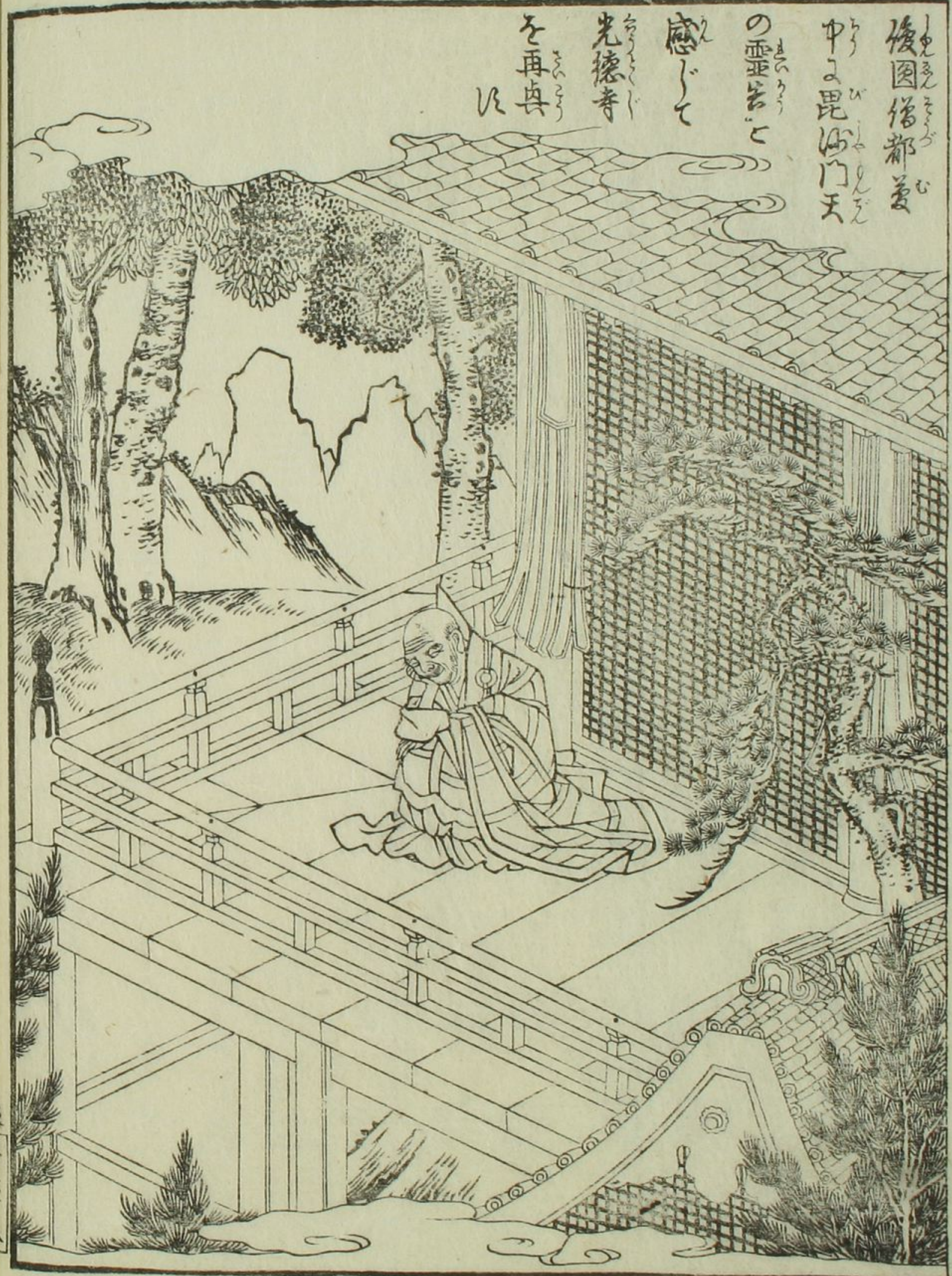
松谷光徳寺 東流院家 日國又縣那雁尾細松谷あり

一は照曜山雁林堂と号し當院の故人皇六十代國融法皇の御  
 勅教は「今日き六十六代一條院承延二成子年の御建立なり



初め、本願山照曜峯寺と勅号を賜ひ延曆寺法園と師と延  
て別當とし密二教を奉じ七堂伽藍の靈趣あり然るに  
七十代多羽院天承年中真福寺延曆寺年撞り朽く  
南都よりして密院を放火し朽く伽藍もくも焼く僅  
又奉堂母の境中真福寺光明寺の小院のみありしに  
てりり退たてりし諸君既納りまつるは亦た此に抄ひて  
溝堂あり親善地菴のあり像をかざるの願士とて奉じ  
大塔あり佛舍利及び法皇の聖像縁起の巻社多とて  
奉堂又納りあり唯其芳跡と十がよ存せしものなり其後  
百余年を経て八十代後醍醐院の中宮安貞二成る年去二月八  
日三舟寺の後園信貴山と詔て天王殿又通称しる小毘沙門  
天愛中示現し給ひ僧都又告命して曰く照曜法地高き妙く佛智

先徳明々朗先開道教利群生 護念常佛念信者 此山の南に  
て松谷とてる靈地ありて汝は有縁の佛像はしまはと争く彼地より  
と拜しせんと僧都羨らて奇異の事いをは彼地より争ふ  
深して朽壊せる古院ありて其末中殿ありて靈場ありしに僧都  
教の感懐をなげ瀧は多門天の告命に再真の本をうんと  
園融帝勅の命と記し堂号再真の像を奏願しる小所の帝後醍醐  
院敷聞うらむと勅許の宣旨を下し給ひ日頃よりて造営成り則  
僧都を別當職に任じ給ひ本寺の瑞光再興を遂げ給ふ因縁ありて山  
号寺号を改め照曜山松谷先徳寺と勅号給ひ給ふ小條時成は奉じ  
山田三百町を寄らせ給ふ 右寺寄附状 今も猶未なり 其後後園信貴都再び毘沙門天の御  
告命より天衣宗を改め念佛門と稱し聖光法印の門に入給ひしが  
聖光法印入寂の後祖師聖人の御弟とあり信の一字を聖人よりとつ





り佛念房信系と改名以後之宗法二年春三月聖人御年七十六歲道院

一河下向あて十余日経御教化何せ給ふ所の御齋跡

○嵩山靈室 本多阿弥陀如来

青白之佛舍利

法皇の御真像

祖師聖人の御真像

名号

高祖聖人の御遺骨

光明十文字名号

基信乘上人之教像

上人及び證如上人の御遺骨

御教を御感ありて嵩山滿の香式を御して御坊を御りて

○八尾より二里半より東南より河下にて玉手山安福寺あり

の雨開くして中真開基の聖人の御門并慶西法除尊修念佛を弘通

一廣退の地を再び真後ありて

○嵩山名産

烏芋・于瓢・小角豆・蓮根・書皮・鸚鵡糞・蛇床子・河

内毛綿

大和國

愚目山立真寺

當寺の住持高祖聖人上人の御後

唯園房の則小住宮若念法師の信承ありて仁治元年聖人の御分り

後五十六九

如く真宗の奥妙を極め智徳兼備の人なり嘗て常州河和園より  
 ありて化存寺らなりしが法縁の引不りや終に苗圃にまゝ秋刈川の  
 邊より二宮を言ひ遠近を礼賛し正應二年二月六日法臘六十八歳  
 して苗圃にありて大往生を遂らまなり

世に唯國房の常州平基郎の舎はて  
 平基郎と云ふ人なりと云何と云ふ者や

尚委一く河和園  
 報佛寺のまゝに也

○苗圃の神武天皇始て都より移入地なり王代靈秘の園なりまゝにして  
 代々の帝の御遊幸の都に名をまけし先神祇の春日の宮と始り  
 此龍田の社三輪の神ありき世より跡をいひ今も終に  
 樹交織の渴仰いやほし又佛園には本大寺真福寺元貞寺  
 師西大寺秋篠寺や法隆寺苗圃又長谷寺壺坂やまの武の峯に  
 谷くも靈をたぐへる靈場なり中より好らうなり其外  
 而跡にまゝの苑をばまゝにや秋のりみだれに川ありぬるがりの  
 下はありのつとくも其神ありき縁あり

○苗圃の石産・奈良晒・日打物・日油桐壘・滑白酒・穀酒・若津漆  
 日くは瀧紙・板原紙・三輪素紙・若津壘・日榎・梵天・内里

御不押内敷の御園にまゝに七つ八つあり  
 神・徳重中・著中の後標・船白子・園榎紙・園榎桑・物標・曲  
 へんそとそと・大峯蒜・奈良良風呂・塗桶・早稻・付流葉・滑皮・馬皮  
 膠・鞠・若穂・灰摺孫・那山標綿・奈良良園扇・西大寺孝心丹・法隆  
 寺洗水香・糸胡・栲杞子・松脂・板原石・山打物・塗漆・龍田合紙  
 高山茶筍等其外敷をまゝに

後園

後園は苗圃の後を合せて若園と云ふ徳若靈天皇第三の皇子雅武若園  
 命ありをんこの三園を封せりまゝにまゝにやめて園の名とせり

山南先照寺

西院院家

近隈郡山南あり

高祖聖人の直弟明光上人師命を奉りて海西を教化あり  
 寺を開設し専ら弘法利益に終る靈區なり委く相州鎌倉  
 名宝寺の記にこれをせり宝物教示果々

常石宝回院

東流院家

日園日那常石あり

当院の光照寺は系に於て明光上人嘗て当寺を開基し十ヶ年が  
間衆機を化養ありし靈場なり凡海西我真宗此門に入降化し  
り安に上人の徳馨よよまり○靈宝教の果々

○当院の名産・聖表・柳菰・篋竹・麩切編笠・田子細・  
瓶の美酒・素麩・秋の麦等なり

修勢園

此は修勢表の神地にして此園と名づけしは古く園の号にして此は修勢表の世  
修勢園と名づく

修勢寺御門跡

奄美郡一宮田あり

高田山と稱し真宗一本山 御寺勢親王家より御入院御里坊御殿

系都河原町二系と云ふに建り○如來堂本尊阿彌陀如來

一對の靈像ありて悉く本尊の御伽方り高山中真惠上人弘法の御北畠山より宗法弘通  
辨げらるる御伽として此は修勢表の神地にして此は修勢表の世に修勢表の如來と稱しなり

○默堂開山聖人御真像教像を安んじ○院家に區

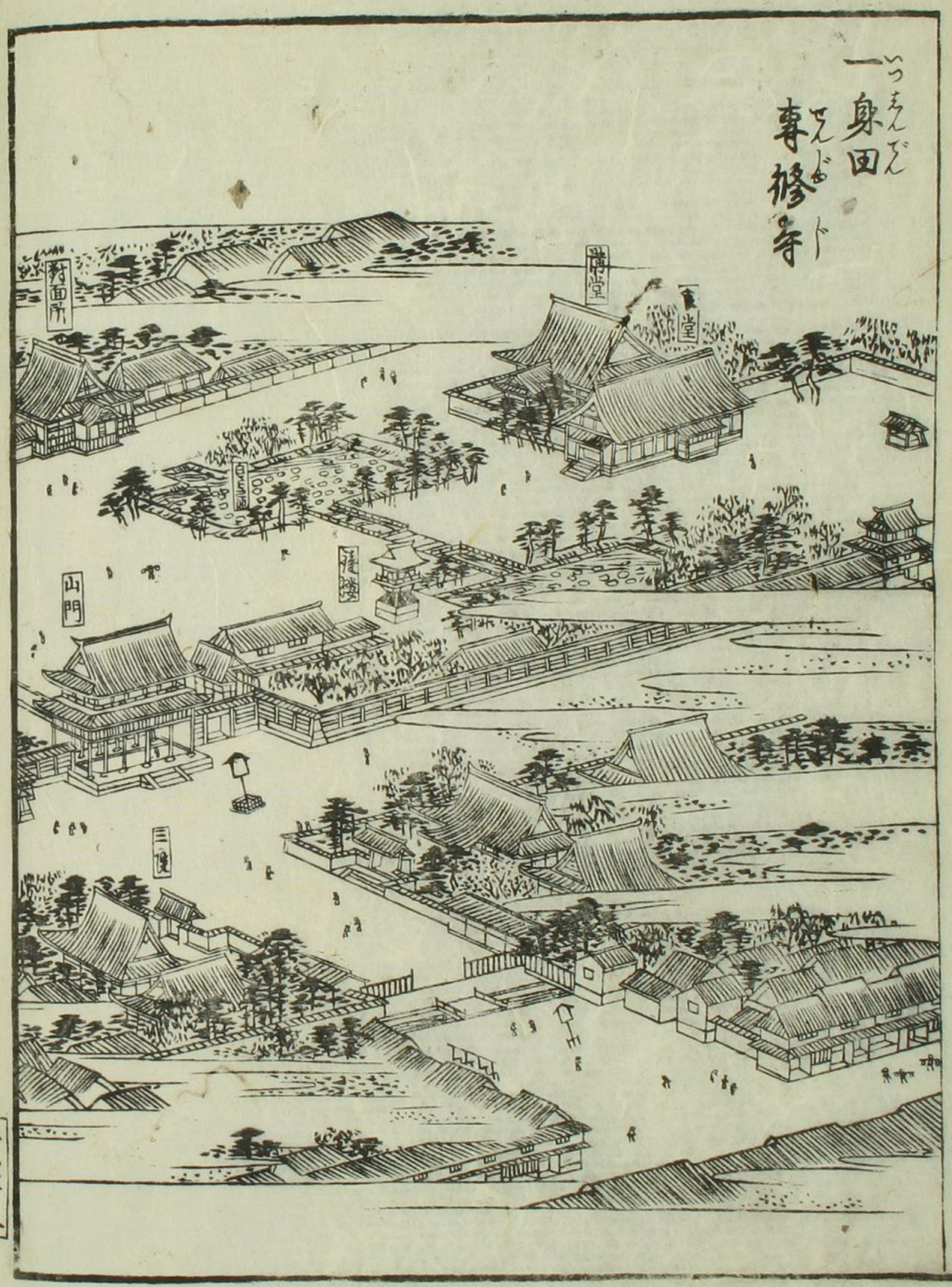
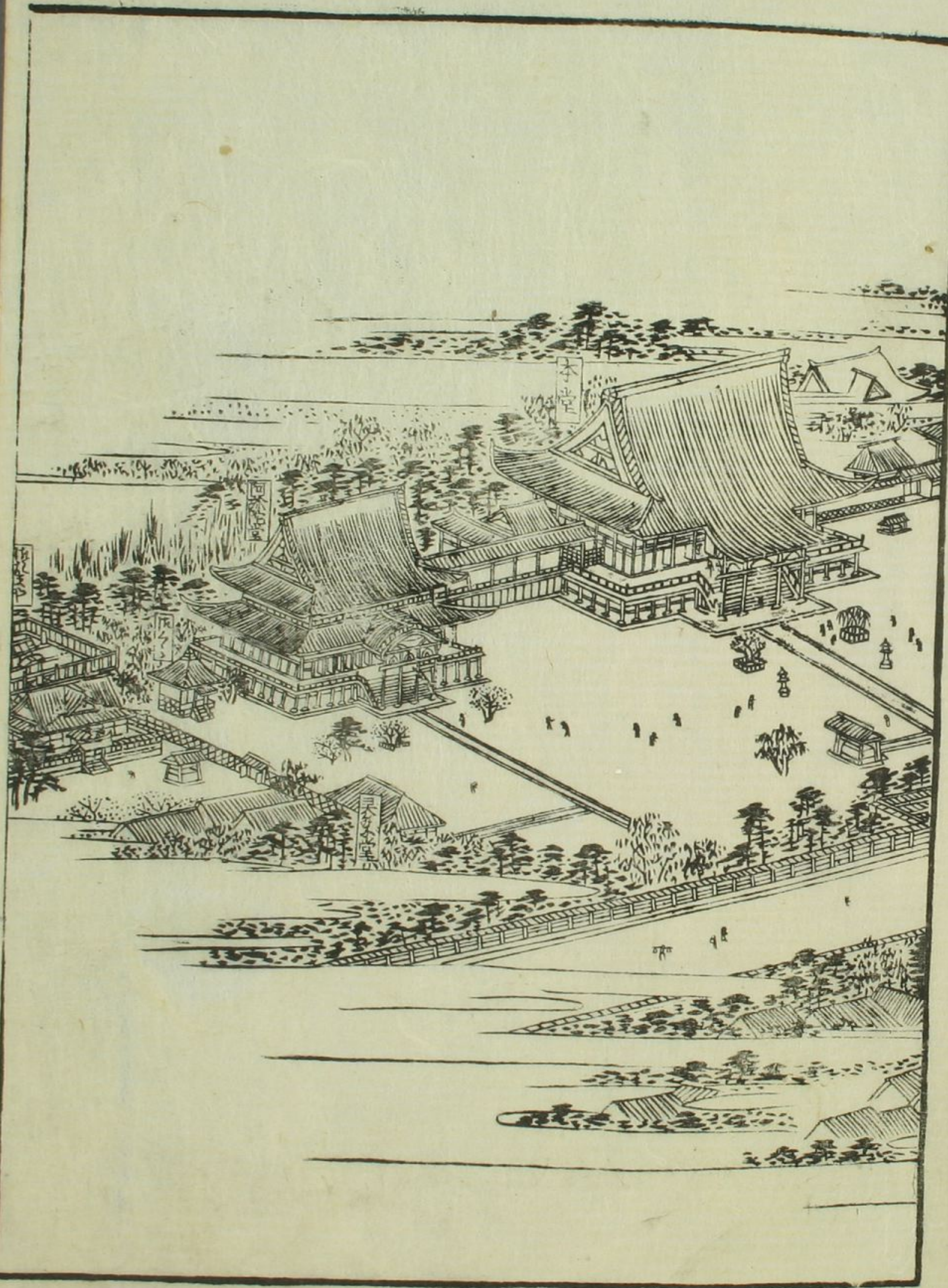
柳高山の根に高祖聖人八十に歳の御附下野園芳賀郡高田に建り

まじく是を真佛上人の御附下野園芳賀郡高田に建り  
第十代真惠上人の御附下野園芳賀郡高田に建り  
年加賀城系道にの諸國を自弘化し易で勢州なりと云ふ  
蓋治と稱し此は抄ひく宛正平年法騰三十一歳にして高田一身田の地  
留く居たり六月六年終り下野園の園より靈區を以て地を移し再建し終り  
此は高田の抄ひく中貞と稱せり其後文明十年 勅使御下野園  
海一承久勅額下野園の右倫布を賜ふ云○当院靈宝其教の果々  
就中聖人御真像の流るる及び御真像の聖教諸抄を教卷法抄上人  
御傳授の選擇集を之と稱するなり

○当院の御附下野園の地は古くして此は修勢表の神地にして此は修勢表の世  
名に云ふるを云ふ人の知るるなり今これを以て

○当院の名産・柳菰・篋竹・麩切編笠・田子細・  
瓶の美酒・素麩・秋の麦等なり

質斗・絲・麩・素・海苔・防風・海松・海薺・素・團子・布



甘茶・藤尾藤・串掛・推草・葵茶・梅・五折板・磨 水浪丹  
 山・掃・煙粉・録尺・巾回廊  
 おの山菜履・紺屋形・白粉・庚子  
 竹火桶

親鸞聖人 御齋院 二十四輩巡拜圖會後編卷之五終

僧了貞著竹原春泉齋画

# 二十四輩巡拜圖會後篇 全部五冊

此篇に載る所は江戸浅草乃御堂築地御坊よりとどめ  
 上野常陸奥出羽下野下総相摸甲斐文駿河遠江参  
 河尾張美濃摂津河内大和備後に至るまでの御舊跡  
 を前編と同く真景の繪圖を加へ里數名所等と集り  
 記し其後の篇と合せ視ると凡の安坐し多御舊跡と順  
 拜せしむの書なり

彫刀氏

- 京
- 井上治兵衛
- 樋口源兵衛
- 市田次郎兵衛
- 池田長右衛門

享和三年癸亥春新刻

京都書林

菱屋

孫兵衛

江戸書林

松本

平助

大阪書林

小刀屋

六兵衛

海部屋

勘兵衛

勝尾屋

六兵衛

河内屋

太助

名所記総目録

浪華心齋橋通  
唐物町書林

河内屋太助梓行

平安秋里離島輯

五畿内名所圖會 全部三冊

各國神社佛堂の傳記山川幽谷國境  
村里名賢英哲の経略を撰ぶ一冊所を  
燈教をわけ悉く今の風景とそのまじり  
寫し同くかた文章をくくつて其監觸と  
實小全備大成の去以下名所圖會

都名所圖會 全部六冊

都拾遺名處名云 全部五冊

大和名所圖會 全部七冊

河内名所圖會 全部六冊

和泉名所圖會 全部四冊

摂津名所圖會 全部三冊

東海道名所圖會

全部六冊

本曾路名所圖會

全部七冊

伊勢路名所圖會

全部六冊

仁道も別より  
上仕と申すは座の  
を余清好と通  
仕の清用は作持  
てとの年希と云

北陸東奥勝地真景  
六四輩順拜國會

全部十册

山城近江越前加賀越中越後信濃  
上野等八箇國 前篇五册  
武藏下総幸陸陸奥出羽下野相模  
甲斐駿河遠江參河尾張美濃後篇  
附錄 伊勢大和河内攝津備後五册

山陰道名所國會

全部七册 近刻

南海道名所國會

全部世册

紀伊國名所國會 全部五册

淡路 阿波 讃岐

同後集續編 嗣出

伊豫 土佐 續刻

文中題詩諸名家寄合書  
唐土名勝國會

直隸省部 全部六册

此書ハ唐土名勝國會ノ一統ノ先キ直隸省部ノ  
唐土名勝國會ノ一統ノ先キ直隸省部ノ  
唐土名勝國會ノ一統ノ先キ直隸省部ノ  
唐土名勝國會ノ一統ノ先キ直隸省部ノ

唐土訓蒙國會

平任專安先生選  
後素軒橋本國圖  
全部十五册

山城名勝志

全部二十二册  
系十二枚箱入

山列名勝志

全部二十二册

帝都雅景一覽

文鳳山人書  
全部二册

系の系

全部二册  
二面

都細見之圖

懐中折本一册

都名所分圖

懐中小本一册

花洛細見圖

折本十五册  
後素軒社松園書院

出来初系七府

全部七册

京師紀覽

全部拾五册

都茶時記

全部七册

此書ハ山城國中社傳國ノ傳記也其書ノ書  
歌人英哲寺ノ經緯ノ校百編ノ引書也  
記ノ書末とあり  
此書ハ山城國中社傳國ノ傳記也其書ノ書  
歌人英哲寺ノ經緯ノ校百編ノ引書也  
記ノ書末とあり  
此書ハ山城國中社傳國ノ傳記也其書ノ書  
歌人英哲寺ノ經緯ノ校百編ノ引書也  
記ノ書末とあり





